

W. Besant 著 *London in the Eighteenth Century.*

一卷

A. Barbeau 著 *Life and Letters at Bath in the Eighteenth Century.*

一卷

W. Hogarth 畫集

二卷

是等の書物には、普通の歴史又は文學史杯に書いてない、裏面生活の状態が述べてある。普通の参考書とは趣が違ふから、掲げて置く。其他の論説、原作、又は批評、歴史等で此の講義に縁故の深いものは、其都度紹介した丈で澤山だから省く。以下には斯う云ふ性質の参考書が出て來ない。だから特別な目錄を付けない。然し他人の説を引くときは、其出所を明かにして責任を明かにする。

第三編 アヂソン (Joseph Addison. 1672—1719) 及びスチ

ール (Sir Richard Steele. 1672—1729) と常識文學

是から愈々本論にかゝる。前申した通り十八世紀の文學と云つても、文學は長い河の流れの様に繼續して居る者だから、途中で無理に引きちぎつて、是から十八世紀の文學だと云ふのは甚だ不自然である。然し是が不自然だからと云うて其前に遡れば、又其前から始める所に不自然がある譯だから、詰り順を追つて英文學の初から出立しなければならなくなる。だから不自然でも仕様がなない。矢張りいゝ加減に始めなければならぬ。ゴツスの『十八世紀文學』を見ると、王政復古後から始めて居る。詩はウォラー (Waller. 1605—1687) デナム (Denham. 1615—1668) カウレー (Cowley. 1618—1667) 邊から、脚本はジョン・ウイルソン (John Wilson. 1622?—1696?) から、散文も亦一六六〇年あたりから論じて居る。然し私は一七〇〇年を基點として出立する積りである。無論文學者も人間の一部分であるから一七〇〇年に古いのが悉く死んで、一七〇〇年に

新らしいのが悉く生れると云ふ譯はない。十七世紀と十八世紀の兩方に跨つて生息して居る者はいくらでもある。従つて其著述も兩世紀に跨つて居るのも少くはない。夫だから前後の關係上已むを得ぬ時は十七世紀迄遡る事もあらう。又は十八世紀に入り込んだ部分を切り棄て、仕舞ふ事もあらう。其邊は臨機應變として置いて、先づ大體は一七〇〇年以後から論じ出す積りである。扱一七〇〇年から論じ出すと云ふ事を目安に置いて文壇を見渡して見ると、一七〇〇年にはトムソンが生れて居る。同時にドライデンが死んで居る。四年経つてスキフトの『桶物語』(A Tale of a Tub)と『書籍戦争』(The Battle of the Books)が出版されて居る。夫れから五年目に(一七〇九)ポープの *Pastorals* が出て居る。同年に雑誌『タトラ』が出現した。此三四人の作者即ちスキフト、ポープ、アヂソン、スチール、等は互に咖啡店へ寄り合つては談笑に其日を暮らした朋友である。今云ふ通りの一七〇〇年を標準として始める以上は、先づ是等から論じて行かなければならぬ。デフォアの如きは比較的古いかも知れぬが、デフォアが眞の文學者として小説を書き始めたのは一七二〇年頃の話であるからして、寧ろ後廻しにしても差支ない。そこで以上三四人の内、どれから論じ出しても差支はないが、スキフトの『桶物語』は彼の『ガリヴァー巡廻記』と同じく小説と云うてよいか、比喩譚と云うてよいか一寸風變りの者であるのみならず、『ガリヴァー』程の影響を文壇に與へてゐない。ポープは固より詩人である。一流の祖と云はれる人に

は違ないが、詩は十八世紀の特産物ではない。たゞアヂソンとスチールは此世紀にあつて一種清
新な文學を書き始めた人で、一方から云ふと、前代の性格描寫 (character sketches) の著るしい
發展とも思はれるし、又體裁から云つても、定期刊行文學の發達の一部を形造る一連鎖となつて
居るし、又其動機から云つても、十八世紀一般の傾向をあらはして居るし、色々の點から云うて
興味がある。それで先づ此アヂソン、スチール兩人から論じ出さうと思ふ。其前に當時の文學者
の團體はどんな者から成立して居つたか一寸一言して置いたら諸君の参考になるだらうと思ふが、
是れは余自身が御話するよりも、此時代に精通した研究家の説を引用する方が確かでもあり、又
有益であるから、そうする積である。レスリー、スチーヴンが前に一寸紹介した『十八世紀に於
ける英國文學及び社會』と云ふ講義の五十三頁以下に當時の文學機關の組織を論じてかう書いて
居る。

"It is made up of men of the world—'Wits' is their favourite self-designation, scholars and gentlemen, with rather more of the gentlemen than the scholars—living in the capital, which forms a kind of island of illumination amid the surrounding darkness of the agricultural country—including men of rank and others of sufficient social standing to receive them on friendly terms—meeting at coffee-houses and in

a kind of tacit confederation of clubs to compare notes and form the whole public opinion of the day. They are conscious that in them is concentrated the enlightenment of the period. The class to which they belong is socially and politically dominant—the advance guard of national progress. It has finally cast off the incubus of a retrograde political system; it has placed the nation in a position—of unprecedented importance in Europe; and it is setting an example of ordered liberty to the whole civilized world. It has forced the Church and the priesthood to abandon the old claim to spiritual supremacy. It has, in the intellectual sphere, crushed the old authority which embodied superstition, antiquated prejudice, and a sham system of professional knowledge, which was upheld by a close corporation. It believes in reason—meaning the principles which are evident to the ordinary common sense of men at its own level. It believes in what it calls the Religion of Nature—the plain demonstrable truths obvious to every intelligent person. With Locke for its spokesman, and Newton as a living proof of its scientific capacity, it holds that England is the favoured nation marked out as the land of liberty, philosophy, common sense, toleration, and intellectual excellence. And with certain reserves, it will be taken at its own valuation by foreigners who are still in darkness and deplorably given to slavery, to say nothing of wooden shoes and the consumption of frogs.”

(文學機關を組織するものは俗情に通じたる世間的人物である。所謂、witsである。彼等は自から稱して、普通 wits と呼んでゐた。wits と云ふと、まあ旦那と學者の混つた様なもので、其混り方の歩合を云ふと、學者よりも寧ろ旦那の方が勝つてゐる。無論都に住んでゐる。(其時分の都と云ふと暗い田舎で取り囲まれたなかの、一種の燈明に比較すべきものである。)で其連中には地位の高いものもゐる。地位は夫程でなくても、之と對等の交際が出来る位な身分のものが這入つてゐる。冥々のうちに俱樂部が同盟したと同じ結果になるが、咖啡店で寄り合つては、意見を交換して、一代の輿論を作らうとする。彼等は時の文化を一身に集めた様な氣でゐる。彼等の屬する階級こそ社會的に云つても政治的に云つても優勢である。國家的進歩の先鋒である。彼等は遂に時勢後れの政體に對する迷霧を破つた。彼等は國家を前古未曾有の重要な地位に据ゑた。全世界に向て秩序ある自由の模範を示した。僧侶をして、精神的主權者たるの要求を撤回せしめたものは彼等である。思索界に於て、迷信、僻見の舊權威を打破したものは彼等である。牢たる團結によつて標榜せられたる専門的知識の虚偽を曝露したものは彼

等である。彼等は理智を信ずるのみである。理智とは常人の常識に常程度に訴へて戻らざる原則を云ふのである。彼等は自然教を信ずるのみである。自然教とは條理に暗からざる人の明かに認めて、平易にして他に説明し得べき眞理となす所のものである。ロツクは彼等の先覺者である。ニュートンは彼等の能力を活きながら證明する豪傑である。自由、哲學、常識、寛容、能力卓越の國柄として、天祐を受けたるは英國である。——是が彼等の意見であつた。全然贊成する譯にも行かぬだらうが、まづ大體の上から評すれば、當時の外國人は彼等自身の評價を、彼等自身の言葉通りに受けても宜いかも知れない。當時の外國人は木履を穿いて蛙を食つてゐた位のものだ。さう手苛い事を云はないにしても、奴隸はあるし、文明は進まないし、氣の毒なものであつた。

是は單簡であるが明瞭である。のみならず必要の事項を悉く含蓄して居る。余が此講義の冒頭に述べた十八世紀の狀況一般と題する諸項を綜合して考へて見たら、成程當時の文學者なる者の地位、資格はかうもあらうと思はれるであらう。

かゝる現象を生じた原因を説明してスチーヴンは當時の政治状態と智力状態の二つを擧げてゐる。第一に、立憲政體の下に立つ政治家はもう往時の様にたゞ宮廷の鼻息を窺つて行動する必要がない。彼等は専制君主と戦つて大勝利を得た。英國は言論自由の國となつた。宗教寛假の國と

なつた。立憲的秩序の國となつた。戦争には大勝利を得た。昔しアメリカを撃沈した時と同様の刺激を受けた。凡て此等の成効は皆自由の名を以て得たのである。自由とは甚だ曖昧な言葉だけれども、英人の胸中には、一種の感慨を興へる歴史的因縁がある。英國は自由の國土なりとは彼の佛國人が大いに羨んだ所である。第二に、學問即ち智力の方から云へば、十八世紀を支配すべき哲學、宗教、政治の三者に互つて、永く其基礎を置いたロツクが彼等の同胞の中に出てゐる。ロツクはスピノザやデカルトの如く論理的に一貫した議論は立て得ないかも知れない。又バークレーやヒュームの如く雋妙な哲理を發揮し得ないかも知れないが、當時に於ける根本的信仰の解釋者として一世を支配すべき人であつた。即ち教育ある分別のある社會の常識を代表して居る哲學を組織した人である。かの哲學者ならざるアデソンの如きが少々哲學者ぶらんとする時は何時でもロツクを引用する位に迄常識に富んだ哲學者であつた。ロツクの著書を読むと教育ある人の普通使用する言葉で書き流してある。哲學の歴史を研究して當時に至ると所謂煩瑣哲學の臭味のないのが著しく目につく。勿論煩瑣哲學なるものが其前から攻撃を受けて居たには相違ないが、大學からはまだ驅逐されなかつたのである。十七世紀の僧侶などになると其專攻する所の一派の神學に在つては、到底俗人の嘴を容るゝ能はざる程の奇妙な三段論法の訓練を受けた位である。彼等は古代の教祖の著書を悉く暗誦しかね間敷哲學者であつた。哲學者と云はんよりは一種の運

動圖書館であつた。だから彼等の説教と云ふ者は古書古典の引用のみで充満して居る。世紀の末にチロツトソンと云ふ神學者が出て漸く此弊風を一變した。神學に於けるチロツトソンは恰も哲學に於けるロツクと同様の手柄がある。説教をしても唯各人の有して居る理性に訴へる。別に六つかしい引用や、微臭い書籍などを振り廻さない。従つて俗人でも頭腦さへあれば理解が出来る。英國の散文は實に此時代に發達したと稱せられて居る。専門の學者でなければ分らぬ様な言句を使はぬ様になつたのも此時代である。錯雜極まる羅句流の構造を棄てたのも此時代である。其先鞭をつけたのはドライデンであるが、ドライデンは其文章をチロツトソンから得たのである。

凡て是等の變化を綜合して見ると。——政治に至つて此變化は寛容トレインヨとなる。俗人も自家自在の意見を有することを得る。學問にあつては是れが唯理論ラショナルイズムとなる。即ち理性——人々の所持する共有の理性——に訴へて判斷する。文學に在つては術學を嫌ふ、換言すれば一般の人間の常識で理解の出來得る様な文體を撰ぶ事。總て是等が落ち合つて前に引用した様な特色のある文學機關の組織が成立した。——是れがスチーヴンの解釋である。要領を得た立派な考である。冒頭には丈けの事實を承知して置いて、本論を聞いて貰ふ。有名なる『タトラー』(The Teller)『ガーデア』(The Garder)『スペクテーター』(The Spectator)はかゝる風潮を受け、かゝる時勢に際會して、かゝる態度を以て世間を觀、事物を察する *views*——アヂソン及びスチール——によつて計

畫せられ又發行せられたのである。私は彼等の文章と彼等の生息せる時代とを實例によつて比較し、又彼等の文章上に、如何なる程度に於て個人性が發揮せられて居るかを研究し、又彼等の文章の功罪を指摘して見やうと思ふ。これが此編の重なる目的である。然し一寸記憶して置くべき事がある。上記の刊行物は一種の文學的述作であると同時に又一種の定期發行の文字であるからして、今云つた主要の點を論ずる前に英國の新聞事業を歴史的に一瞥して置く必要があると思ふ。遠く新聞の起源を尋ねると、羅馬時代に始まるのださうである。無論當時の事であるから印刷された者ではない。唯日毎の出來事、官吏の任免黜陟等を記した板を、公共の場所に掲げて、衆庶の觀覽に供した迄の事で、*Acta Diurna*と稱したとある。方今用ふる「ガゼット」と云ふ語はもとヴェニスから來たので、是も其頃觀覽所にかけて衆人に見せた者ださうだ。英國ではバリー卿と云ふ人が初めて新聞を起したと云ふが、其動機を尋ねると西班牙艦隊が英國へ攻めて來ると云ふ當時、之れを迎へ撃つ爲めに、一國の元氣を鼓舞して敵愾心を喚起する必要があつた爲めからださうだ。然し是れはどんな者であるか、現今傳はつて居らんから分らない。ガーネット及びゴツスの『英文學史』卷二、百八頁に英國古代の新聞『イングリッシュ、マーキュリー』の五十號が昔の儘で轉載されて居るけれども、是れは偽物である。著者自身も其偽物なることを斷はつて居る。眞正なる確實なる新聞は『ゼ、ウィークリー、ニウス』と號する者で、一六二二年の

五月二十三日初めて発行した。是れは無論日刊ではない、週刊で、編輯者の名をナサニエル、パターと云うた。其後色々なが出たが、『ゼ、インテリゼンサー』と云ふのが彼のサー、ロジャヤ、レストレンジの發行にかゝるものである。(一六六三年八月三十一日。)此『インテリゼンサー』が後に『ゼ、ロンドン、ガゼット』に變化し(一六六五年)、『ゼ、ロンドン、ガゼット』が又『ゼ、オブザーヴェーター』に變つた。其時彼の革命が起つたのである(一六八八年)。此革命が所謂君主神權説を破壊して、議院制度の建設となり、新教宗義の基礎となり、國家の收入及び支出は凡て下院の管理する所となつたと同時に、出版の自由を公衆に與へたのである。(尤も檢閲係の官職はまだ存してゐた。相當の束縛と所罰もあつた。)

それから愈々十八世紀に入るのであるが、十八世紀に入つて一寸人の目を惹くのは、初めて日刊新聞の出來た事である。是は『ゼ、デーリー、クランツ』と云つて、一七〇二年の三月十一日に出た。然し無論つまらぬ者である。今一つ注目すべき事はデフォアの發刊にかゝる『ア、レヴュー、オブ、ゼ、アフエラス、オブ、ステート』と稱する新聞體の者である。是は一週二回の發行であつたが、賣れるので一週三回にした。學者の説によると是が『タトララー』の源であると云ふ話である。

然し其内容は大變違ふ。デフォアは小説家であると同時に政客であつた。彼の編輯にかゝる隔日新聞は純然たる政治的目的を以て發刊された者である。處がアデソンやスチールになると一面に於ては政治家に相違ないが、彼等は其政治的意見を發表する爲めに『タトララー』や『スペクテーター』を書きはしなかつた。だから目的が根本的に違つて居る。是に次で起つた者が王黨の機關『ゼ、エキザミナー』である。是れにはボリンブローク、スキフト、アターベリー、プライア杯が執筆した。民黨は之に拮抗する爲に『ホイッグ、エキザミナー』を起してアデソンを其主筆に推した。是から論じやうとする『ゼ、タトララー』は恰も此際に生れ出たのである。

此『タトララー』は一七〇九年四月十二日に一號を出して、一七一一年の正月二日を以て廢刊した。(一週三回。)次で同年三月一日に『ゼ、スペクテーター』が出た。是は日刊で一七一二二年十月六日に至つてやんだ。續いて『ゼ、ガーディアン』の一號が一七一三年の三月十二日に生れて同年の十月第七十五號を以て往生した。(日刊。)翌年一七一四年の正月に、一旦中絶した『スペクテーター』が又再興して、遂に其年の十二月迄繼續した。以上は此三種の文學の興廢に就ての年月である。調べて見ると、三四年の間に前後して起つたり倒れたりしてゐる。時期の前後する如く内容も殆んど同じ性質である。筆者も同じく二人である。二人とは即ちアデソンとスチールである。尤も外の文士も時々は助勢を與へて居る。之を區別して見ると以上の刊行物の三種に涉つて、スチールは五百十號を擔任してゐる。アデソンの受持は三百六十九號である。スキフ

トは二號程寄草して手傳つた。コングリーヴは『タトラー』にたゞ一文を載せて居る。ポーブは『スペクテーター』に三度書いた事がある。『ガーヂアン』には八度寄稿した。だから以上の三種を通じて大體の責任者はアヂソンとスチールになる。尤も發起人は何時でもスチールであつた。現に『タトラー』を發行した時杯は、アヂソンは公用でアイアランドに出張中で、誰が主筆だか知らぬ位であつたが、倫敦へ歸てからスチールが發起したのだと聞いて、初めて執筆者の一人になつた位である。けれども、アヂソンはスチールに劣らざる位に此方面に盡力した人であるから、評論の際彼をスチールの下に置くことの出来ぬのは無論の事である。且つ詞藻の上から云つても、文壇に貢獻した功績の上から云つても、アヂソンの方がずっと重きを置かれて居るのだから、其點は御互に承知して置きたい。

次に起る問題は、是等雜誌の性質如何であるが、これも私が答へるより斯道に權威のある古人が皆く答へて居るから、それを引用する。ジョンソンが書いたアヂソン傳中に斯うある。

“To teach the minuter decencies and inferior duties, to regulate the practice of daily conversation, to correct those depravities which are rather ridiculous than criminal, and remove those grievances which, if they produce no lasting calamities, impress hourly vexation, was first attempted by Casa in his book of Manners, and Castiglione in his “Courtier;” two books yet celebrated in Italy for purity and elegance, and which, if they are now less read, are neglected only because they have effected that reformation which their authors intended, and their precepts now are no longer wanted. Their usefulness to the age in which they were written is sufficiently attested by the translations which almost all the nations of Europe were in haste to obtain.

This species of instruction was continued, and perhaps advanced, by the French; among whom La Bruyere’s “Manners of the Age,” though, as Boileau remarked, it is written without connection, certainly deserves praise for liveliness of description and justness of observation.

Before the “Tatler” and “Spectator,” if the writers for the theatre are excepted, England had no masters of common life. No writers had yet undertaken to reform either the savageness of neglect or the impertinence of civility; to show when to speak or to be silent; how to refuse or how to comply. We had many books to teach us our more important duties, and to settle opinions in philosophy or politics; but an

Arbiter Elegantiarum, a judge of propriety, was yet wanting, who should survey the track of daily conversation, and free it from thorns and prickles, which tease the passer, though they do not wound him."

200

(一寸した禮儀だの細かい作法だのを教へたり、日常の談話法を改良したり、罪惡ではあるまいが、見にくいと思はれる陋習を矯めたり、又は永久の災とならない迄も時々刻々に不快を感じしむる弊害を除いたり、——斯云ふ方面の著述は、カサの禮法書と、カスチリオネの『コーチア』とが嚆矢の様に思はれる。兩書共優雅高潔の趣を具へてゐるので、以太利では今猶盛んに行はれてゐる。尤も昔しの様に讀み手が多くないかも知れないが、それは著者の思はく通り改革の目的を達したからの事で、書中の教訓が不用に屬した爲と見れば宜い。出版當時是等の著述の有益であつた事は、全歐の人が争つて、之を翻譯しやうと力めたのでも充分に分る。此種類の教訓を持續し又進前せしめたものは佛人である。就中ラ、ブリュイエルの『今代の禮法』が最も効力があつた。ボアローは此書を評して、滅裂だと稱したが、敘述に活氣ある點に於て、觀察の正鵠を得たる點に於て、充分賞贊の價値がある。

英國に在つては、脚本家を除くの外、通俗生活に筆を著けたものがない。これあるは『タトラ』と『スペクテーター』から始まると云つて宜しい。無愛想も過ぎれば野蠻になる。丁寧も無暗だと無しつげに陥る。斯う云ふ缺點を矯正しやうとした作家はまだ一人もなかつた。其他何時口を利いて宜いか、又何時差控えべきものか、斷わるには何うして斷わるもの、應ずるには、どうして應ずるものか、『タトラ』と『スペクテーター』が出る迄は誰も教へて呉れ手がなかつた。重大な倫理問題に關して義務の意義を説いたものはある。哲學、政治の大爭論に斷案を下したものはある。けれども日常談話の道程を測量して、通行人を傷つけない迄も、往來の煩ひになる茨、とげの類を取り除かうとした趣味の主宰者、禮法の判決者は是より以前にまだ出た事が無かつたのである。

『タトラ』『スペクテーター』『ガーヂアン』の英國文壇に於る地位及び其性質はジョンソンの言によつて明かである。此上に何も云ふ必要はない。私は是から其内容に就て聊か解剖的批評を試みて、其内容の精神がどの位まで時代精神をあらはして居るかを紹介しやうと思ふ。

(一) 最前話の中に十八世紀は常識の世であるといふ言葉を使つた。今研究しようとしつゝあるアヂソンは嘗て詩を作つて、スペンサーの如き浪漫的な詩は「理智の時代」を樂ましむるに足らんと云ふて居る。すると此世紀の特色なる常識は是等の三種の文學中であらはれて居るだらうと云ふ考が先づ浮ぶ。調べて見ると果してさうである。常識は解釋の仕様で色々な意味になる。(イ) 明快なものも常識の表現である。文章ばかりではない、内容にも毫も不可思議な分子を容れな

いのである。(ロ)問題が日常に見聞する以外に涉らないで、平時平人の観察で満足して居るのも常識である。(ハ)過度を嫌ひ突飛を忌むのも常識である。先づ此三點を驗べて見る。

(イ)『スペクテーター』の第百五十九號に『マーザの幻夢』と題した一文がある。是れはよく人の讀んで知つて居る文章である。ある人が變怪に遇つて岩山の天邊に連れて行かれる。そして恐ろしい様な幻を見ると云ふ筋である。然しながら讀んで見ると一向に神秘的な所がない。神秘的に見える所は悉く作者に依つて説明されて居る。従つて理解の出來ぬ所はない、よく分る。よく分るのは結構である。然しよく分ると云ふのがよく感ずると云ふ譯でない。否なある物になるとよく分る様にした爲めに却てよく感じなくなつたと云ふことも云ひ得る。變怪がマーザに向つて Cast thy eyes eastward and tell me what thou seest. (東の方を見る、何が見えるか云へ。) 杯と云ふ所は譯すと駄目だが原文で讀めば莊重である。マーザが之に答へて、I see a huge valley and a prodigious tide of water rolling through it. (大きな谷が見える。大きな水が谷の中を流れてゐる。)と云ふのもよろしい。此問答文で澤山である。所が此谷と此水を變怪が説明して居る。The valley that thou seest is the vale of misery, and the tide of water that thou seest is part of the great tide of eternity. (谷は不幸の谷である。水は永劫の流である。)と云ふのが其言葉であるが、折角の感興も此二句、殊に不幸の谷云々の一句の爲めに打ち崩されて

仕舞ふ様に思ふ。マーザの答を聞くと共に、讀者は腦中に雄大なる谷と汪洋たる水を描き出す。化物が其名を説明するに及んで又聞いて見ると、谷は不幸の谷だと云ふ。河は時間の流れだと云ふのだから、頭中にはすぐ一轉換が起る。扱は眞の谷でもない、眞の河でもない。單に比喩的の河と谷であると思ふ様になる。之を思ふと同時に今迄描いて居た腦中の大景色は消えて仕舞はねばならぬ。尤もアヂソンは此名前によつて人生の苦痛と永久に流るゝ時とをあらはし度いのである。あらはしたいのみではない、是非説明したいのである。もし説明をしなければ荒誕不稽の物語と一般にして、何等の寓意も假托もないものとなつて仕舞はねばならぬ。さうなつては常識に反するのである。常識にはづれた狂氣染みた事は教養ある紳士のやる事ではない。だから是非共に此谷は何をあらはす谷で、此河は何の記號になる河であると云ふ事を是非理解させて置きたいのである。理解させる方はどこ迄も理解させたいが、感得せしむる事は、之が爲めに却つて減じて仕舞ふと云ふ眞理には氣が付かなかつたと見える。昔から常識の發達した人に感じの強い例はない。ある程度以上に強烈な感じを有してゐるものは狂人であると、所謂 *insane* なるものは解釋して居たのだから、アヂソンが感興に重きを置かないで、わざと説明を加へて不可思議を可思議に翻譯し、幻像を比喩に崩したのは十八世紀の文學者たるアヂソンのアヂソンたる所である。然しいくら感じが乗つても何の意味が分らなくてはならぬ。人生問題を比喩的に説明したと云

ふ事を人が理解しなくつては行かぬと主張する人があるかも知れぬ。一應は尤であるけれども、是は必ずしも感興を害して迄も説明する必要はない筈である。浮世の苦難とか不幸とか云ふものを圖で示せばかうだと説明するよりも、ある物を假つて浮世の苦痛を直覺的に讀者に悟らしむるのが文學者の手際である。直覺と云ふのは何だか曖昧な言葉であるなら暗示すると云つてもよしい。暗示には感じ丈けあつて理由が分らぬ事がある。従つて神秘的である。従つて常識を満足せしめない事になるかも知れない。

不幸の谷や永久の時の流丈けなら是でもまだよろしいが、其下にマーザが *I see a bridge standing in the midst of the tide.* (橋がある。)と云ふと、其橋が人生だから能く見ると變怪が注意する。するとマーザの答が斯うである。Upon a more leisurely survey of it, I found that it consisted of threescore and ten entire arches, with several broken arches, which added to those that were entire, made up the number about an hundred. (能く見ると、橋にはアーチの数が七十ある。其他に壞れたのも大分見える。みんな合せると百程になる。)此一句に至ると前の傾向が一層明かになる。あの橋が人生だと云ふのは何の意味もない事で、唯河が時の流れだから、其流れに懸けてある橋は人生だと妙に縁をつけた丈である。小供が壘の上でこゝが御湯で、此所が着物を入れる所よと相談で極めてゐる様なものである。常識に訴へると云

ふけれども、常識よりも淺薄な器械的な約束に過ぎない。のみならず其橋のアーチの数が七十あると云ふのは人生七十と云ふ西洋の陳套語から出たもので、橋を人生とすればアーチの数が七十あるべき筈だ抔と考へるのは福引の落ちと同然である。理智一片を動かすにしても、もう少し深い所がなくはならない。——是は一例である。例だから全斑を窺ふに足るものとして紹介する。例外を例に引いてアヂソンを故意に貶したものと思つては不可ない。

(ロ)前段に當時の政治と文學とは密接な關係を有して居ると述べた。政治の中心は無論倫敦である。政治に關係のある者は、貴族若くは貴族的傾向を有した人間であつて、社交上流行の中心である。従つて政治家兼文學者なるアヂソンやスチールが自ら流行的紳士を以て許し、自ら *wits* を以て任じ、しかも都人士のみを眼中に置いて、日毎に遊戯半分の筆を舞はずならば、其述作の性質は豫想するに難からずと云つても差支ない。

彼等の作物は都會の空氣を以て飽和してゐる。私はあながちに都會の空氣を非難する積はない。古來の文學者中、傑作雄篇と稱せられるもの——ことに小説の如きは都會生活に關係のあるものが多い様に思はれる。けれども其傑作たり雄篇たる根本義を尋ねて見ると、都鄙の區別から起つたのではなくつて、それ以上に立ち入つた或物を描き出してゐるからである。それを委細に述べらる必要もないから、諸君も御同意と見做して略して行く。又觀察のしやうや、經驗の具合や、暗

示の受け方や、變化の區域や、人間の複雑な發達や、事件の進行の模様や、凡て色々な點から見
て、都會でなくては研究も出來ず、描寫も六づかしい場合が澤山ある。其澤山あるうちには、一
つでも見逃さうものなら、又書き損なつて仕舞はうものなら、文壇——廣く云へば社會が永久に
損失を受けた様な氣のするものもあるだらう。私はあなたがちに都會の空氣を非難するものではな
い。

現にアヂソンやスチールの書いたものを讀むと、當時の倫敦は斯う云ふ有様であつたかと、恰
かも一部の風俗史に對する様な興味が起る丈でも結構である。然し、都會の風俗は、人類發展の
一停車場として、吾々の注意を惹くには違ひないにしても、其風俗を作り上げた人間内部裏面の
消息迄も此表面上の敘述中に充分含んでゐると思ふのは間違である。人間を捕へたのと、其人間
の manners 丈を捕へたのとは大分違ふ。同じ小説にしても、此兩様の差違は、瞭然として深淺
厚薄の感に等級を生じて來る。まして兩人のかいたものは多くは斷片的で普通の小説程に纏つて
ゐない。だから彼等の寫した都會の空氣は、都會一般の空氣である。甚だ明瞭な様で、又甚だ朦
朧たる人間の描寫である。鮮やかに人が動いてゐるが、切實に人が生きてゐない。飯を食ふ人の
箸の持ち方は分るが、箸を持つ主人公の何者たるかは分らない。又其箸の持ち方から想像出來る
様にも書いてない。

私はあなたがちに都會の空氣を非難するものではない。又都會的空氣の描寫を忌むものでもない。
もつと讓歩して云へばアヂソンやスチールの寫し出した都會の空氣にさへ感謝の意を表するもの
である。けれどもアヂソンやスチール以上の觀察や感想や解釋が都會的生活の上に於て充分なし
得らるゝ餘地のある事を信じて疑はぬものである。

何故に彼等が、あの程度にとゞまつて、それ以外に一步も向上の道を開かなかつたかと考へて、
私は彼等が自己の生息してゐた都會的空氣に災せられたものだと思つた。私の非難したいのは、
寧ろ彼等の觀察眼を眯ました意味に於ての一種の都會的空氣を云ふのである。

都會は一國の中心である。人の競つて集まる所である。金の多い所である。娛樂の多い所であ
る。餘裕の多い所である。當時の英國は前にも述べた通り全歐で最も優勢な地位を占めてゐた、
少なくとも英國人自からはさう考へてゐた。其優勢な英國の首府が倫敦であつて、倫敦の金と娛
樂と餘裕とを比較的に支配する地位にあるアヂソン杯の心持はどんなものであらう。己れに足り
て外に待つなしと云ふ言葉が一番よく彼等の境遇をあらはしては居ないだらうか。左右前後を見
廻しても刺激がない。佛蘭西が恐ろしくも獨逸が怖くもない、國家は安泰である。才學、文章は
自分が一番えらい。社會と風俗は自分が一番よく心得てゐる。政治上の黨派はあるかも知れない
が、文學上に劇烈な戰爭などはない。丁度下町邊の大町人の旦那の様なものである。自分一人が

通人で、物がよく分つて、粹も甘いも噛み分けてゐて、何處へ出てもちやほやされて、萬事にそつがなくつて、意氣で上品で——一口に云へば極めて低級な程度に於ける全智全能の神である。

斯う云ふ人は萬事をもう卒業してゐるのだから、決して研究心や向上心を起すものではない。自分以外に自分と、同程度、もしくは同程度以上の種類の違つた人間が存在し得るとは決して認めない。たま／＼そんな人に出逢へば氣の毒なものだとして仕舞ふ。だから凡てが得意である。云ふ事が樂天的である。

それで生活問題に追はれやうじやなし。(スチールと云ふ男はよく借金取りに追ひ廻されたが、是は無茶遣ひをする馬鹿なんだから、實際追はれてゐるのではない。冗談半分に逃げてゐる様なものである。) 人生の大問題を考へ様ぢやなし、生死の難關を切り抜け様ぢやなし、肉の束縛を苦しがるんぢやなし、人間の奥迄切り込んで、自分を曝露しやうと云ふんぢやなし、まあ呑氣である。呑氣だからして強ひて事件を拵える。無理に拵える事件だから勢ひ煩瑣になる。肉汁ニクジュを吸ふのにちゆう／＼云はせるのは下卑てゐるとか、紋付の羽織は野暮だとか、女にはかう云ふ風に御辭儀をするものだとか、黙つて拜聴してゐれば大變な所へ連れて行く。

其上都會は氣の移り易い所である。漫然として一町も歩いてゐると、家を出た時とは了見が違つて来る。又一町も歩くと又周圍が變つて来る。物を追懸けて歩きさへすれば際限のない程ぐるぐる回る。さうして家へ歸ると何にも残らない。漫然と云ふと弊があるかも知れないが、凡てに満足して政治、社會、あらゆる方面に根本的な不平もなく、又は研究の競争から血眼になる懸念もなく、或は痛烈な悲喜哀樂の爲に驅られて、厭でも應でも一筋道に引張られる憂もなく、もしくは眞率直下に人生の機微に接する神経もなく、落付いた頭で眼前の萬事を商量する知欲もなく、——是等がないとすれば、いくら夜會帽に氣を揉んで舞踏の相手に心痛したつて、まあ漫然暮してゐる様なものである。一面から云へばアヂソンやスチールは夫相應の心配も苦勞も色々な經驗も有たらうけれども、浮氣な調子のなかに得意に浮かれてゐた所から云へば、漫然生活と云つても差支ない。だから彼れ等の書いたものも矢張漫然としてゐる。漫然とはボンヤリと云ふ意味ではない。全たく反對である。能く氣が付く。氣が付いてぐる／＼回り過ぎる。『スペクテーター』『タトラ』『ガ、ヂアン』めて何百號かを讀み盡して、あとで何が残るか考へて見れば分る。勸工場を通り過した様なものである。よく云へば軽い感じがする。綺麗な心持がする。氣が利いてゐる。寄木細工の香箱見た様である。悪く云へば、どれも是も土足で踏み壞しても構はないもの許りである。

都會生活と云つても中々複雑である。さう一概に言はれないのは無論の事で、現に私も諸君も都會生活を送つてゐる。然し私や諸君の全生活のうちから、個人に特有な生活を除いて、一般に

共通な都會的生活を考へて見ると、思つたよりも、べつなものである。百萬の人が寄つて市を構成してゐると云ふ意味は、此百萬人が或る機關の下に調和して共同生活を營んでゐると解釋してよろしい。ある機關の下に束縛的な調和を保つ許りではない。個人と個人が接觸する場合に必ず一種の調和術が必要である。所が交際の範圍やら往來の區域が、田舎と違つて大分廣いから、あつちへ調和する爲めにこゝの角を磨り減らし、こつちへ調和する爲めにその角を磨り減らし、段々磨り減らして行くうちに、角が全く無くなつて、丸藥の様な轉がるに便利なものが出來上る。此丸藥を稱して、其都會に共通の常識と云ふのである。一度び常識の薰陶を受けて、常識以上の修養をする機會がないと、現在の凡てが、永久に正當なものであるかの如き考になる。此社會が正當の社會で、此道德が正當の道德で、此政體が正當の政體で、萬事が正當であるから根本的に満足である。異を立てる必要もなし、奇を衒ふ了見も起らず、行住坐臥尋常の世界にあつて満足である。元祿、天明の江戸は正にこれであつた。アデソン、スチールの生れた倫敦は正にこれであつた。

彼等は斯う考へてゐた。——世界の歴史あつてより以來、尤も開化した世に生れたものは自分等である。開化した世のうちで、尤も開化したものは自分等である。ゴシックと名の付いた野蠻時代の事物は固より論ずるに足らぬ。文藝復興と稱する波瀾も左迄に感心したものではない。希臘

臘羅馬の古に溯つては、文物制度の蔚然たる偉觀を望み得ないとも限らないが、要するに異教徒の仕事である。此開明、此宗教、此政體、此自由と寛容と、此合理的に物を觀、事を察するの明とは英國人に限つてゐる。英國人のうちでも下等社會や田舎ものは相手にならん、自分等丈に限つてゐる。

彼等は斯う云ふ了見で筆を執り始めた。固より世間を教育する積りでゐた。應じないものは冷笑する氣でゐた。然し眞面目にはやらない氣でゐた。眞面目は野蠻で、喧嘩は野蠻であると思つてゐた。熱烈痛刻は未開時代の人民の性情で、enlightenedと云ふ言葉と矛盾する様に考へてゐた。都會の流行を書けば文學者の能事は畢るものと信じてゐた。日常の禮義作法に批評を下げば天晴な道德家だと心得てゐた。市井の瑣事を論ずれば文學者だと合點してゐた。彼等のあとに、バーンスが出た。クーパーが出た。ブレイクが出た。オシアンの譯が出た。パーシーの古謡集が出た。彼等は是等の詩人と詩集とを天地間に存在し得るものとは夢にも想像し得なかつたらう。アデソンの街學者を論じた條(『スペクテーター』第百五號)に斯うある。

“The worst kind of pedants among learned men, are such as are naturally endued with a very small share of common sense, and have read a great number of books without taste or distinction. The truth of it is, learning, like travelling, and all other

methods of improvement, as it finishes good sense, so it makes a silly man ten thousand times more insufferable, by supplying variety of matter to his impertinence, and giving him an opportunity of abounding in absurdities."

(學問をする男のうちで、最も性質の悪い^{オベディント} 學者は、天分常識の缺乏した上に、相當の好悪も分別もなく無暗に澤山書物を讀んだ輩である。學問は旅行其他の教育法と同じく才智を研くと同時に、馬鹿を千層倍も厄介にする。馬鹿が生意氣になる材料が殖えて、猶々物笑ひの種を増す機會を得るとなつたら堪らない。)

尤もである。然し此批評の尤もか、尤もでないかは、アヂソンの見たる常識の性質如何によつて決せらるべき問題である。アヂソンの住んでゐた社會に共通な常識やアヂソン自身の頭にある常識を標準として考へれば、アヂソンの攻撃してゐる方が却つてアヂソンを笑つて然る可きかも知れない。是非は暫らく措くも、アヂソンの常識に重きを置いた事は慥かである。

常識は毎日の俗事以外に問題も作らねば、思索も及ぼさない。常識以上の詩、常識以上の興は眞偽、美醜、善惡、壯劣の各方面に涉つて嘗つて接觸する事がない。アヂソンは『スペクテーター』七號に於て、俗人の迷信を嘲弄して居る。ある時彼が正餐の招待を受けて去る所へ行つて見ると、主人夫婦が殊の外の御幣擔ぎであつた。彼等の談話が如何にも愚劣なので、

"I dispatched my dinner as soon as I could, with my usual taciturnity; when, to my utter confusion, the lady seeing me quitting my knife and fork, and laying them across one another upon my plate, desired me that I would humour her so far as to take them out of that figure, and place them side by side. What the absurdity was which I had committed I did not know, but I suppose there was some traditional superstition in it; and therefore, in obedience to the lady of the house, I disposed of my knife and fork in two parallel lines, which is the figure I shall always lay them in for the future, though I do not know any reason for it."

(自分は例の通り黙つて、出来る丈早く飯を食つて仕舞つた。所が驚ろいた事には、細君が自分の肉叉と肉刀を置く所を見て、——自分は二つを食ひ違に置いたのだが——御願だから食ひ違はよして、竝べて下さいと云つた。自分はどんなまな事をしたのだか一向氣が付かなかつたが、何しろなにか傳來の迷信がある事と思つて、細君の云ふが儘に、肉刀と肉叉を二行に竝べ直した。細君の言葉に従へば、是から注意して何時でもかう置かなければ不可ないさうだが、其譯は分らない。)

と書いてゐる。書き方が全く客觀的で自己の批評を加へて居ないから事實其物の敘述に一種の滑

稽趣味を感じて讀んで行くと、あとからこんな句が出て來た。

“ Upon my return home, I fell into a profound contemplation on the evils that attend these superstitious follies of mankind.”

(家に歸つて、人間の迷信的愚昧に伴ふ弊害を考へて深き冥想に沈んだ。)

中學生徒だつて、こんな冥想に沈むものは一人もない。冥想の低價も亦甚しい。讀んで此句に至ると、最前の敘述は此冥想の下拵えで、敘述其物の面白味に滑稽の興味を感じて居たのではないといふ結論になる。文藝のたしなみがないのみならず、常識をはづれた冥想家だとも思はれる。成程箸の竝べ方で「深き冥想に沈む」のは常識をはづれてゐるには相違ないが、よく考へると是がアデソンの常識である。常識であればこそ、箸の揃へ方に心配する。箸の揃え方以上に「深き冥想に沈むべき何物をも持つて居らん所が常識なのである。アデソンがもしかゝる低級の常識を有つて居なかつたならば、——たゞ迷信的の細君を敘述して一種の可笑味を與へる文に留めて置いたならば、讀者は其可笑味の裏面に、此冥想より遙かに大なる教訓を得得し得たらう。

百十號に「スペクター」君がサー、ロジャーの下屋敷の近邊にある廢寺に、幽靈が出ると云ふ噂を聞いて探檢に出懸る所がある。是も事實其儘を平敘して置けば、其調子一つで、幽靈が出た様にも取れ、又幽靈などが有る譯のものでないと云ふ考にもなれるのだが、さうやつてはアデソンの常識に反するから決して遣らない。常識の目的は幽靈不可有論を説明しなければ已まない。尤も最初の一節には夜陰荒涼の敘景が少しある。さうして、かゝる寂寞たる所だから愚人の變怪を認むるも亦宜なるかなと云ふ口調で結んでゐる。愚人には恐縮する。さも〴〵賢人らしい。しかも賢人になれば、どんな暗闇でも、墓原でも、決して氣味の悪いものぢやないと云はぬ許りの挨拶である。何だか小學校の倫理の先生然としてゐる。其上ロツクの哲學を引用して、幽靈の有無は明暗に關係なきものだといふ辯解してゐる。御苦勞の至である。少し後へくると斯う云ふ句がある。

“ As I was walking in this solitude,…… I observed a cow grazing not far from me, which an imagination that is apt to *stattle* might easily have construed into a black horse without an head: and I dare say the poor footman lost his wits upon some such trivial occasion.”

(淋しい所を歩いてゐると、少し向ふに牝牛が草を食んでゐた。氣の短かい臆病者には首のない黒馬に見えかねる。先達ての仲間は何でもこんなものを見て腰を抜かしたに違ない。)

立派な落ちである。ロツクを抜きにして、此落ち文書いて置いたらどんなものだらう。常識を振り廻すより、いくら効目があるか知れやしない。

こんな譯だから大した詩興もない、えらい熱情もない、雄俊博大の氣象は固より乏しい。けれども當時市井の風俗に至つては一から十迄悉く網羅して、どこかに出てゐる。咖啡店の討論や、サー、ロジャリーの芝居見物や、モーホツク共の亂暴や、(註、モーホツクと云ふのは良家の不良子弟で夜になると隊を結んで狼藉を働いたものである。婦人を酒樽へ入れて轉がしたり、番太の鼻をひしやがしたり、悪戯ばかりしてゐた。)其亂暴にそなへる爲めに、ロジャリーの從僕が棍棒を携えて護衛をする事や、貧乏な家具屋が無暗に外國通信を聞いたがる事や、下つては男子の服装の事や、女子が退屈して一日を暮しかねる事や、婦人の帽子の馬鹿に大きい事や、——何でもある。純然たる一部の風俗志である。さう云ふ例を挙げれば、此等の雑誌の各號を悉く挙げなければならぬから略して仕舞ふ。

風俗志であると同時に一種の性格描寫(character sketches)にもなる。普通の小説では、筋が發展するに従つて、篇中人物の性格が自然にあらはれて來るのだが、是は其人の特長や性癖を二三枚のうちに収めて、面目を活動させる。アヂソンやスチールが普通の小説を書かないで、かう云ふ短かい描寫に満足してゐた理由は一寸分らないが、彼等より以前にあつて、眼前の誰彼をモデルに捕へて、筋の込み入つた社會小説の様なものを書いた人がないので、始めからフェールドング的な長篇に手を下しかねた事が一つ。夫から彼等の従事した仕事が多くは日刊物で、半ば新聞の體を具へた娯樂的機關であるから、豫じめ話の筋を立て、これを續きものに書き足して行く事が困難であるのが一つ。で短かい性格描寫となつたのだらう。其中で比較的長くつて、且つ尤も有名な性格はサー、ロジャリー、ド、カヴレーである。これはアヂソンとスチールの兩人が共同して書いたもので、丁度甲乙二人が寄つて、連句をした様な體になる。ロジャリーの出るのは『スペクテーター』の第二號からで、此二號はスチールの筆である。

"He is a gentleman that is very singular in his behaviour, but his singularities proceed from his good sense, and are contradictions to the manners of the world, only as he thinks the world is in the wrong. However, this humour creates him no enemies, for he does nothing with sourness or obstinacy; and his being unconfined to modes and forms, makes him but the readier and more capable to please and oblige all who know him."

(随分な奇人である。然し其奇人たる所は彼の分別から出て來る。世間が間違つてゐるから世間の習俗に反するのださうだ。奇人には相違ないが別に敵も出來ない。苦い顔をしたり、強情を張る様な性質ではない。彼の禮法に拘泥しない所が、却つて彼の朋友の氣に入り易い。)スチールが初めに、かう書いた以上は、アヂソンもかう云ふ人物にロジャリーを書き上げて行か

なければならぬ。夫が旨く出来てゐる。二人で拵えたとは思はれない位渾然としてゐる。加之アヂソンは此人物に對して非常な同情を有つて居た。ある號にスチールが、此人物が酒屋に女を引張り込んだ所を書いたのでアヂソンから散々怒られたさうだ。ロジャーの性格はよく出来てゐる。閑があつたら参考に御覽になるが好い。

(ハ)常識の結果として、彼等の中庸を愛して、過度を嫌つた。法外を悪んだ。extravaganceは彼等にとつて禁物である。當時婦人の帽子の無暗に高かつた事は前に述べた通りである。アヂソンはすぐ之を攻撃した。『スペクテーター』の九十八號にある。

“There is not so variable a thing in nature as a lady's head-dress: within my own memory I have known it rise and fall above thirty degrees. About ten years ago it shot up to a very great height, insomuch that the female part of our species were much taller than the men. The women were of such an enormous stature, that “we appeared as grasshoppers before them”: at present the whole sex is in a manner dwarfed and shrunk into a race of beauties that seems almost another species.”

(婦人の帽子程變り易いものはない。自分の知る限りでも三十度位上つたり下つたりした。十年前であつたか急に飛び上つた事がある。其時は女の方が男よりもずつと背が高かつた。我

我が女の前へ出ると丸でムツタの様な感があつた。現今では又ずつと萎縮して殆んど別種屬と見える美人團が出来た。)

帽子杯に馬鹿氣た意匠を凝らして、徒らに人を驚かしたつて、何の役にも立たないと云ふ注意があつて、仕舞に例の説教がある。

“I would desire the fair sex to consider how impossible it is for them to add any thing that can be ornamental to what is already the masterpiece of nature. The head has the most beautiful appearance, as well as the highest station, in a human figure…… in short she (nature) seems to have designed the head as the cupola to the most glorious of her works; and when we load it with such a pile of supernumerary ornaments, we destroy the symmetry of the human figure, and foolishly contrive to call off the eye from great and real beauties, to childish gewgaws, ribbands, and bone-lace.”

(婦人自身が既に自然の大傑作であるのに、裝飾の御蔭で、其上にどうしやうの、斯うしやうと云ふのは全然不可能である。婦人方は是非此點を御一考願ひたい。頭は人間の最高部に位する所で、又尤も美しい部分である。……手短かに云ふと、自然は其尤も光榮ある作物の頂

冠として頭を据ゑたのである。其上に入らざる裝飾を積み疊ねて、整つた形を崩したり、小供らしい玩具をびらつかせて、わざ／＼本來の美を目に付かない様にするのは愚かである。)

常識の説法は大概此位なものである。別段面白い事もないが、過度を忌むと云ふ例にはなる。もう一つ例を擧げる。

一としきり婦人の男装が流行つた事がある。是も常識から見れば突飛である。『スペクテーター』の百四號にスチールが之を攻撃した。

“There is so large a portion of natural agreeableness among the fair sex of our island, that they seem betrayed into these romantic habits without having the same occasion for them with their inventors: all that needs to be desired of them is, that they would *be themselves*, that is, what nature designed them; and to see their mistake when they depart from this, let them look upon a man who affects the softness and effeminacy of a woman, to learn how their sex must appear to us, when approaching to the resemblance of a man.”

(わが島國の女性には、天性男子の氣に入る様なのが多いと見えて、男子同様の必要もないのに、男装をしてくれるものが大分ある。自分はたゞ、女は女らしくして貰ひたいと言する

のみである。自然が拵えて呉れた儘であつて欲しいと云ふより外に何も言はない。かうしないのは間違である。男の癖に厭に優しくしたり、ひなひなしたりするのを見たら、男の服装をした女が、我々の眼にどう映するか、女にも大概悟れるだらう。)

是も常識の助言である。今で云へばまあ新聞の雑報に序ながら書く程度の助言である。例をも一つ擧げる。今度は決闘の弊害である。

常識は人並の事をしりと教へるものである。わるく云へば奇抜な事をしてはならない、平凡に暮して行けばよいと教へるものである。此立場から云へば喧嘩さへ不都合である。命の遣り取りに至つては猶更不都合である。理智の世である。情熱の世ではない。劍を抜いたり、血を流したりするのは野蠻至極である。ことに「光明ある革命」の後を承けて、是からこの黄金時代の太平を謳歌しやうと考へてゐる上流の先覺者から見れば、殺伐な斬り合は蒙昧の餘弊に過ぎない。彼等は嘗て其君主をさへ殺す程血に渴いてゐた。然しそれは過去の夢である。立憲政體の基礎が確と定つて、年來の理想であつた自由が現實された今日は、たゞ樂天的に暮すべき時代である。安寧無事に過すべき日月を眼前に控えながら死ぬの生きるのとは物騒千萬である。成程 *Witt* の眼から見たら決闘は不條理、不合理極つた精神錯亂の所爲に違ない。this chimerical groundless humour である。this unchristian-like and bloody custom である。スチールは『タトラー』

の紙上に號を重ねて此陋習を攻撃してゐる。

一寸當時の決闘に立ち戻つて御話をするが、決闘に *satisfaction* と云ふ言葉がある。スチールには第一此字が氣に食はなかつた。まづ此所に正直な田舎の紳士があるとす。それが所謂當世流の *men of honour* と何かの緣故で一座になる。さうして侮辱される。侮辱した方は、故意に侮辱を加へた事を自覺してゐる。その一人が翌朝になつて、侮辱された當人へ手紙を付ける。其文句にはいつ何時でも御満足の行く様に取り計ひますとある。(ready to give him satisfaction.) 手紙をつけられた田舎紳士こそ難有い仕合である。

昨夜は散々な目に逢ふ。今日は決闘をしると云ふ。要するに御満足を與へると云ふ意味は殺されて仕舞へと云ふ意味と同じ事になる。かゝる場合につける果し状は大抵極り文句を竝べたものだが、其内容を明らかに書けば、こんな不合理極まる書翰になる。——スチールは滑稽的に其手紙を作つて、之を公けにした。

“Sir,—Your extraordinary behaviour last night, and the liberty you were pleased to take with me, makes me this morning give you this, to tell you, because you are an ill-bred puppy, I will meet you in Hyde-park an hour hence; and because you want both breeding and humanity, I desire you would come with a pistol in your hand, on

horseback, and endeavour to shoot me through the head, to teach you more manners. If you fail of doing me this pleasure, I shall say, you are a rascal, on every post in town: and so, sir, if you will not injure me more, I shall never forgive what you have done already. Pray, sir, do not fail of getting every thing ready; and you will infinitely oblige, sir, your most obedient humble servant, etc.”

(昨夜の君の行爲は法外千萬である。余に向つて狼藉を加へたるものと認める。よつて此書を送る。君は禮儀を知らぬ犬だ。今より一時間後ハイド、パークで出合はう。君は無教育な人道を辨へない男だから、短銃ピストルを持つて、馬に乗つて、余の頭を打ち抜く積りで來るがよい。さうしたら少しは禮儀を覺えるだらう。もし余の申し込に應じないと、向後君は兇漢ラスカルである。倫敦中の柱へ悉く貼り付けてやる。此上にも余に向つて無禮を加へ様ものなら、過去の事も決して許してやらない。早く御支度を祈る。さうすれば千萬辱ない。君の順良謙虚なる從僕より。) 君は教育もなく人道をも辨へないから決闘を申し込むんだと云ふ。決闘を申し込んで人を傷ける意志の明かな自分は、教育があり、人道をも辨へた氣である。君が決闘の申込に應じて、僕を殺すか傷けるかしなければ決して許さないなどと云ふのは大した滑稽である。

こんな話もある。ある咖啡店へ、若い男が鞭を上衣の釦へ結びつけて、赤い踵の靴を穿いて來

た。それを smart fellow だと評したら、其男がすぐ決闘を申し込んだ。smart fellow でないと云つたら決闘を申し込む意味も分るが、是は又異常である。そこで『タトラ』の主筆は、世人は何故かう云ふ馬鹿氣た事で、決闘騒ぎをやるのだらうと、一般公衆から答辯を求めた。讀者の一人からの返事にかうあつた。(無論スチール自身の書いたものである。)

“It is to avoid being sneered at for his singularity, and from a desire to appear more agreeable to his mistress, that a wise, experienced, and polite man, complies with the dress commonly received; and is prevailed upon to violate his reason and principles, in hazarding his life and estate by a tilt, as well as suffering his pleasures to be constrained and soured by the constant apprehension of a quarrel.”

(分別のある、経験のある、禮儀を心得た人が流俗の服装を着け、(註、不自然な鬘などを被る事を指す)又自己の理性も主義も顧みずして、妄りに生命財産を危くするのみならず、居住争闘の念に妨げられて、彼等の娛樂を縦まにする事の出來んのは、全く他から變つた様に思はれたくないからである。又情婦の歡心を得んが爲である。)

スチールが『タトラ』の二十五、二十八、二十九の三號に互つて、決闘の惡習を攻撃したのは尤もな事で、かゝる薄弱の原因で、無暗に決闘が流行しては堪るまい。然し自から決闘の流行

する世の中の薰習を帯びながら、之を攻撃する眼識のあるのは矢張り常識の御蔭である。感情の熾な世には随分不合理な事が流行しながらも時人擧つて、熱心に其存在を主張するものである。こんな事は中々云はない。

(二)私は常識から生じた特性を二三文學上の例に徴して、之を時代精神の反響として説明して見た。是から彼等の訓戒的傾向(moralising tendency)に移つて、少しく所見を述べ様と思ふ。尤も十八世紀は一概に評すると訓戒的作物の世と云つても差支ない。自然派の一種とも見做されべきフヒールデングにさへ此傾向は著るしく見える。必ずしもアヂソンとスチールに限つた譯ではない。が此二人にあつて、は此傾向が述作の本位になつてゐるかの様に思はれるので、世紀一般の傾向としてのみならず、とくに二人の特色として、諸君の注意を煩はしたのである。

茲に訓戒の意義を明瞭にする必要が起る。凡て文藝上の作物は、其取材の天然たると、動物たると、人間たるとに論なく、又其目的の、眞を描くと、美を寫すと、善を述べる、と、壯を敘する、とに關せず、又普通の場合の如く此等の二以上もしくは全體に互つての作物たると否とを問はず、人世と没交渉のものは一つもない筈である。絶體に人世と交渉のない事は頭のなかで想像する事さへ出來ない。従つて如何に愚劣な作物でも、人世を度外に置いてゐるものは決して存在しない。果して何等かの點に於て、人世と交渉があるとすると、其交渉のある點に於て、讀者を動かすの

は當然である。(動かし方の強弱、大小、及び其影響する時間の長短は固より無限の差があると理論的に許してもよろしいが。) 動かしたとすれば、動かした程度に於て、其人の未來を支配したものである。未來を支配したと云ふ意味は、向後の生活状態に多少の變化を輸入すると云ふ事だから、たとひ其變化が處世の大問題に觸れないにしろ、一舉手一投足の微細な行動にしろ、日常平凡の瑣事を觀察する方法にしろ、悉く之を作物上から得た訓戒に得たと云はなければならぬ。此變化は自己の意志に従つた變化であつて、其變化の源は作物に接したから起つたと溯つて行けば、現在の自己をして、しかく現在にあらしむるものは作物の訓戒によると云はなければならぬ。人世のどの方面に輸入した變化に對しても訓戒の二字は使用する事が出来る。ある作物を讀んで、ある事を知つたとする。(今迄氣のつかなくつた人生の上のある眞を知つたとする。) 知つた事が娛樂であるかも知れない。然し此娛樂は其底に横はる知識を擁して、其人の未來の運命を構成する一要素となるのが當然である。従つて此人は此作物から一種の訓戒を得たのである。又ある作物を讀んで美醜、善惡、壯劣、の諸方面に就て感じたとする。此感じも娛樂であるかも知れない。然し此娛樂も亦其内部に美醜、善惡、壯劣それらの感じを含んで、矢張り其人の好惡、言動を支配する様になるのは明かである。従つて此人はそれ等の作物から一種の訓戒を得た事に當る。

此意味に於ての訓戒は文藝上あらゆる作物の自然的結果であつて、何人も訓戒の二字に對して異議を申し立てる權利はないものと思ふ。然し今私が諸君の御注意を煩はしたいと云ふ訓戒的傾向は、かう云ふ廣義に解釋した訓戒ではない。人生の一部分即ち善惡文に觸れた訓戒である。しかも十八世紀の常識に束縛された習俗的道德を標準とした訓戒である。しかも其訓戒は、娛樂の裏面に形を具へず伏在する訓戒でなくつて、明からさまに訓戒的文字となつて現はれる、恰かも政府の公布する法律の條令の様なものである。條令は懲罰を控えて、禁壓の意をほめめかすものである。自由意志を誘つて、有機的に人の未來の運命を改造するものではない。一言にして其弊を云へば、非藝術的である。アデソンとスチールの訓戒的方法是、前段に例證した彼等の口氣と態度とによつて明瞭であるが、その明からさまなる忠告的の言説を附加する所が條令とよく似てゐる。異なる所は懲罰の項を省いた丈である。

方法の非藝術な所が即ち私の尤も諸君に御注意したい點であるが、是は前に引いた例、たとへば、肉叉と肉刀の置き方が迷信的なので、家へ歸つて、深き冥想に沈んだとか、女は女らしく自家の服装をしてゐる方が見好いとか云ふ文章で一斑は明かであるから、其點は此位にて置く事にする。それから彼等の標榜した道德は、日常の禮義作法に關する瑣末な事で、それより以上に大なる問題を捕へてゐないと云ふ事も前段で略御了解になつたらうと思ふから重複を避けて前へ行

く。

たゞ残るものは、横からも、縦からも、斜めにも見られる廣い世界を、たゞ道德の二字で貫いて、何でもかんでも道德的に眺めてゐる彼等の平面的眼界、直線的視線である。私は彼等が咖啡店の有様から、女子の帽子、肉刀肉叉の置き方に至る迄、あらゆる日常の瑣事を書き連ねたのを非難する見方は少しもない。私の様なものは此瑣事の顛末を讀んで頗る興味を感じる一人である。たゞ何故彼等が凡てを綜ぶるに道德の二字を以てして、萬事を善惡の標準で律しやうとしたかを疑ふのである。彼等の訓戒を聞く度に、彼等の世界観はこれ程狭かつたのかと驚ろく位である。もしさうでないと、彼等の存在して居た社會は如何にも狭くて窮屈なものであつたと云ふ氣になる。

無論人生の半は行爲から成り立つてゐる。その行爲の半ばは道德的意義を帯びたものが多い。また研究して見ると存外妙な所に此意義を認める事が出来る。筆を執り文を草するものは、暗に此意義を認めながら、無意識に或物を敘述してゐる場合が多い。たとへば茲に一人の男があつたとして、其男が他の贈物を拒絶したと云ふ事實を傳へるとする。其時あるものは「彼は傲然として斥けた」とかくかも知れない。又あるものは「彼は毅然として斥けた」とかくかも知れない。又あるものは「欲しさうな顔をして」とも「感謝の意を表して」とも書くだらう。どう書くのも

隨意には相違ないが、此數種の敘方のうちには、どれも是も善惡の評価の意味が含まれてゐる。即ち讀者の方で厭な奴だとか、面白い男だとか、其人を好悪し易い様な敘方である。言葉を換えて云ふと、讀者の好惡を幾分か支配した様な書方であつて、さうして其好惡は、拒絶した本人の人格上、ことに人の贈りものを拒絶するといふ一事件に就て起るのだから、其裏面に道德的な匂ひを帯びてゐるのは無論である。して見ると普通我々が信じて、純然たる客觀的敘述と見做して居るもの、なかでも、道德上の分子はある形式を以て入り込んで来る。存外區域の廣いものになる。

けれども人生の全體が是で掩ひ盡せるものではない。是等は人生と云ふ一枚の布を織り上げた中で、^{かすり} 紕にも比較すべきものである。萬遍なく入り込んで来るには相違ないが、夫丈で人生の模様は成り立たない。

然しかう云ふ風に、人生の總體に互つて織り込まれてゐる、點にも比すべき、道德上の意義は、どんな事を書いて、——肉刀肉叉の置き方を書いて、もつと烈敷云へば、天然の光景を書いても——切り離す事が出来ないかも知れない。その意味からしてアヂソンとスチールが倫理的傾向を有してゐると評した所で別に批評にも知識にも何にもならない。アヂソン、スチールに限つた事ではない。古今東西に互つて人事に筆を着けたものは一人として此倫理的傾向を免かれない。

私の所謂彼等の倫理的傾向と云ふのはある一事一件を全體と觀て、其全體に向つて倫理的批評を加へなければ已まない傾向を云ふのである。かうなると世界が急に狭くなる、一本調子になる。例へば芝居の光景を描くとする。舞臺の模様、觀客の態度、役者の所作、それ文でまあ充分だろうと思ふ。所がアデソンになると此光景の凡てを括つて道德的に觀察し、判斷しなくては氣が濟まない。道義の批評が最後の斷案であるかの如くに考へてゐる。だから結末に至つて、あゝ役者が怠けては困るとか、觀客が殺風景で嘆すべき事だとか、道具の粗末なのは座主の責任だとか、——何でも物々しく注意する。其物々しさから見れば彼は此訓戒を役者と、觀客と、座主に與ふるの目的と約束を以て、場に臨み、其訓戒に必要なが爲に、わざと場内の光景を敘した事となる。私の平面的眼界、直線的視覺と云ふのは、これを申すのである。此點に關する例はくゞしくなる許だから省略する。

アデソンは批評家としてミルトンを賞め出したと云ふので有名である。又『チェヴィ、チエーズ』の古謡を稱揚したので評判である。ミルトンはアデソンが賞め出したのではない、デフォーが既に賞贊してゐる。ミルトンは何うでも好いとして、彼が野蠻時代と見做してゐる中世の *Darlad* を紹介して世に出したのは一見矛盾の感がある。私は異に思つて、わざ／＼調べて見た。アデソンの『チェヴィ、チエーズ』を論じた文章は『スペクテーター』七十號と七十四號に出てゐる。七十四號の方は大した参考にはならないが、七十號の方には彼の傾向がよく出てゐる。其中に斯んな文句がある。

“The greatest modern critics have laid it down as a rule, that an heroic poem should be founded upon some important precept of morality, adapted to the constitution of the country in which the poet writes.”

(現代に名ある批評家の規定せる一則によれば、ヒロイック詩は建國の主旨に戻らざる重要な道德上の格言に基いて筆を起さざるべからずとある。)

彼は之を説明してゐる。——ホーマーもグージュルも此目的を以て彼等の計畫を起した。希臘は小國の集合體で、曾て波斯から侵略せられたとき、その爲め非常な不便を感じた事がある。それでホーマーは彼等の安全に必要な統一を確立せんが爲めに、數多の公子が敵を眼前に控えながら、互に軋轢して、遂に其乗する所となるあたりから筆を起した。『チェヴィ、チエーズ』の作者も亦中世のバロンが互に割據して、空しく争鬪に日月を送つてゐた時に、生れたから此詩を作つたのである。

“The poet, to deter men from such unnatural contentions, describes a bloody battle and dreadful scene of death, occasioned by the mutual feuds which reigned in the

families of an English and Scotch nobleman : that he designed this for the instruction of his poem, we may learn from his four last lines, in which, after the example of the modern tragedians, he draws from it a precept for the benefit of his readers.

'God save the King, and bless the land

In plenty, joy, and peace ;

And grant he ceforth that foul debate

'Twixt noblemen may cease.'"

(此著者が血腥さい戦争や、恐ろしい光景を書いたのは、英吉利と蘇格蘭土の兩貴族の間に起つた確執の爲めに、不自然な争の長びくのを防ぐ爲である。此詩の訓戒がこゝに存する事は、最後の四行を読みさへすれば分る。此四行は現代の悲劇に倣つて、作者が讀者の爲に教訓を垂れたものである。其四行には、

君に國に、豊かに、喜びに、平和に、幸を下し玉へ。

願くは向後に諸侯の争ひを禁め玉へ。)

此評を讀んだらばアヂソンの文藝觀の一斑は容易く窺ひ知る事が出来るであらう。彼の考によると『チェヴィイ、チェーズ』の作者の目的は全く當時諸侯の紛擾を憂ひて之を和解せしむる目的

である。『チェヴィイ、チェーズ』は有名なものだから諸君も定めて御覽になつたらう。あの詩を讀んでアヂソンの様に解釋の出来るものはたんとあるまい。私などは却つて喧嘩がしたくなる。打ち合つたり斬り合つたりする事が愉快に思はれる。あんなものを讀んですら、アヂソンの眼には教訓的に映するのだから、彼の書いたものが、萬事に互つて訓戒を條令的に附加するのは無理もない事である。

(訓戒的傾向とは關係がないが序でだから、當時の批評家の考を一寸紹介して置く。『チェヴィイ、チェーズ』を評したアヂソンの言葉のうちにも I must only caution the reader not to let the simplicity of the style, which one may well pardon in so old a poet, prejudice him against the greatness of the thought. ——(文體の單純なるが爲め、大いなる内容を閑却しない様に讀者の注意を煩はしたい。文體の單純なのは昔の詩人だから仕方がない)。——『チェヴィイ、チェーズ』は英詩のうちで尤も面白いものゝ一つと考へてゐるが、其面白いのは、私の見る所では、全く其文體の單純な爲である。私ばかりではない、諸君も御同感だらうと思ふ。此點に於てアヂソンの云ふ所は全く我々の批評と相容れない様に思はれる。實際容れないのである。當時の詩人は手の入つたもの、磨きを掛けたもの、きちりと緊つたものでなければ丸で詩とは認めなかつた。だから十八世紀の終りになる迄 ^{バラッド}Ballad 文學の價値を認めるものは一人もなかつた

のである。アヂソンは十八世紀に生れた人だから無論單純といふ事には興味をもつてゐなかつた。此點は大分現代の人と違ふ様であるが、さすがにアヂソン丈あつて、群小批評家より一頭地を抜いてゐたと見えて、『チェヴィ、チエーズ』の自然に訴へる力を認めて、思ひ切つて之を世間に紹介したのである。之を紹介する丈でも大變に勇氣の入る事である。所が當時の批評家中にジヨン、デニスなるものがゐて、大いにアヂソンを罵倒した。其言に。—— There is a way of deviating from nature, by bombast or tumour, which soars above nature, and enlarges images beyond their real bulk; by affectation, which forsakes nature in quest of something unsuitable; and by imbecility, which degrades nature by faintness and diminution, by obscuring its appearances, and weakening its effects. In "Chevy Chase" there is not much of either bombast or affectation; but there is chill and lifeless imbecility. The story cannot possibly be told in a manner that shall make less impression on the mind. —— (誇大に失して自然を離れる事がある。誇大とは自然以上に飛躍するものである。凡ての物象を本來の大きさ以上に擴げて仕舞ふ。人巧に失して自然を離れる事もある。是は自然を棄て、却つて適切ならざる他のものへ走りたがる。最後に無氣無力の爲に自然を失する場合がある。自然は之が爲めに明瞭を欠き又萎縮して仕舞ふ。自然の形状は朦朧と化し、自然の感じは薄弱に陥

る。『チェヴィ、チエーズ』には誇大もない、人巧もない。然し冷え盡した命根のない無氣力なるものがある。是より印象の薄い書き方は、どう書いても出来るものではない。——『チェヴィ、チエーズ』は御承知の通り尤も豪壯な、尤も活潑な、尤も氣魄に充ちたバラッドである。之を批評するのに悪口もあらうに、無氣無力だと云ふに至つては、殆んど解し難い。人間の趣味が時代によつて、斯う迄も變らうとは思ひも寄らぬ事である。然し無氣無力はデニスに取つては疑ひもなき眞理なのだらう。歴史を調べると時々かう云ふ人物に出合つて驚ろく事がある。驚ろかれる位の人間だから、今日は白骨となつて、唯一人デニスの名さへ知らないのかも知れない。序でだから一寸御吹聴申して置く。)

(三)常識に富んだ都會人種の趣味はヒューモアとなつて現はるゝよりも寧ろキツトとなつて現はれる。フォルスタツフの様な狼藉に近い行爲や、ドンキホテの如き非凡な言動は彼等の眼から見れば宛然狂人の沙汰である。到底彼等の鑑賞に價しない。元來ヒューモアとはどんなものかと云ふ議論になると、問題が大分込み入つて來て、六づかしい研究を経なければ御話も出来かねるかも知れないが、其特色の尤も著るしい點を挙げると、ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味であるといふ事になりはせぬかと思ふ。外の言葉で云ふと、ヒューモアのある人の行爲は、他から見ると可笑しいが、當人自身では他から可笑しがられる譯がないと思つてゐる。彼は眞面

目である。無意識に可笑味を演じつゝある。もう一つ言ひ直すと、可笑味が當人の天性、持つて生れた木地から出る。従つて取つて付けた様に見えない。行雲流水の如く自然である。之に反してもし人を笑はせると云ふ結果を豫期して可笑味を演ずるならば、其人は如何に巧妙に道化でも、道化を自覺しつゝ遣つてゐる。意識して、尋常にはづれた行爲言語を弄するならば、其行爲言動は故意である。即ち不自然である。假り物である。内から湧いたのではない、外から引つ付けたのである。私の解釋によると是がキツトである。勿論かう區別をしたからと云つて、二つのものが截然明瞭に二つになつて、作物の上にも實際の上にも現はるゝものではない。極端はかう分るが其中間に横はるものは悉く雜種である。それは御承知を願つて置く。さてかう解釋して見るとヒューモアを有してゐる人は、人間として何處か常識を欠いてゐなければならぬ。常識を欠かないで、尋常一般の行動をしてゐたならば、いつ迄立つてもヒューモアの出で来る譯がない。(火事地震の様な非常事件が外界に起るときは、特別である。かう云ふ時は普通の人でも尋常一般の行動をやる事が出来ない。だから事件が済んだ後から當時の状態を思ひ出すと、笑はずにゐられない場合が多い。猛烈な一時の刺激でみんながヒューモラスに成つたのである。)従つて極めて常識に重きを置いてゐる十八世紀の紳士、アヂソン、スチールの如きものゝ描き出すヒューモアは、フォルスタッフやドンキホテの如き狂人に近い劇しいものでなくて、常識を去る遠からざる

ヒューモアである。又彼等自身が演じたるヒューモアありとすれば、それはヒューモアと云はんよりも寧ろキツトであらうと思ふ。

彼兩人の合作になると傳へられたサー、ロジヤの如き性格を見ても分る。ロジヤは奇癖に富んだ人である。然し其奇癖は、根本的に常識を具へた人の上皮もしくは一局部が、少し宛常人と異なる所から出る奇癖に過ぎないのである。従つてロジヤの言動を見ると、讀者は微笑する。然し決してげら／＼笑はない。作者も其積りで書きこなして居る。腹を抱へて笑ふ扱は、彼等から見れば、山出し、田舎漢の類である。

『タトラ』の百五十五號にアヂソンが去る家具師の性格を敘してゐる。固より椅子、寢臺の類を商ふ男だから、政治政論には縁の遠い方に違ひない。然し其縁の遠い政治政論に熱中して無暗に狂奔するとなると、そこに一種の矛盾が起つて、可笑味が出る。アヂソンは正に此可笑味を捕へたのである。

“Upon his coming up to me, I was going to enquire into his present circumstances; but was prevented by his asking me, with a whisper, ‘Whether the last letters brought any accounts that one might rely upon from Bender?’ I told him, ‘None that I heard of;’ and asked him, ‘whether he had yet married his eldest daughter?’ He

told me, 'no. But pray,' says he, 'tell me sincerely, what are your thoughts of the king of Sweden?' For though his wife and children were starving, I found his chief concern at present was for this great monarch. I told him, 'that I looked upon him as one of the first heroes of the age.' 'But pray,' says he, 'do you think there is any truth in the story of his wound?' And finding me surprised at the question, 'Nay,' says he, 'I only propose it to you.' I answered, 'that I thought there was no reason to doubt of it.' 'But why in the heel,' says he, 'more than in any other part of the body?' 'Because,' said I, 'the bullet chanced to light there.'

(段々近づいて来たから、此頃の暮し向は、どんな模様か聞いてやらうと思つてみると、向ふから小聲で話しかけた。「ベンダーから信用すべき通信が来たでせうか。」私は知らないと思つて、「御前の娘はもう片付いたか」と聞いて見た。「まだです。時にスキーデンの國王はどうでせう。あなたの御考は、本當の所を聞かして下さいな。」女房も小供も食ふや食はずの有様なのに、まだスキーデンの國王の事を考へてゐる。私は「偉い人さね」と答へた。「創を受けたつて云ひますが本當でせうか。」私が驚ろいた顔をしてゐると、「いえ、たゞ御聞き申す丈なんです」と云つた。「そりや間違はなからうぢやないか」と答へたら、すぐ「然し何故踵へ

創をしたんでせう。他部でもよきさうなもんぢやありませんか」と聞いた。私は「銃丸が丁度其所へ中つたからさ」と答へた。

此家具師は多少常識を失してゐる。然しながら彼の言動は只讀者をして微笑せしむるに留まる丈である。アヂソンは是より以上のヒューモアを好まなかつたのである。

アヂソンは『スペクテーター』の三十五號にヒューモアの何物なるかを論じてゐる。

"It is not an imagination that teems with monsters, an head that is filled with extravagant conceptions, which is capable of furnishing the world with diversions of this nature; and yet if we look into the productions of several writers, who set up for men of humour, what wild irregular fancies, what unnatural distortions of thought, do we meet with? If they speak nonsense, they believe they are talking humour; and when they have drawn together a scheme of absurd, inconsistent ideas, they are not able to read it over to themselves without laughing."

(ヒューモアとは怪物を以て充滿した想像を云ふのではない。漫に法外の思想を蓄へて一世を喜ばしむるに足る頭腦を云ふのではない。普通ヒューモアの人と號する文士の作物を讀めば、放縱なる空想と、旋毛の曲つた不自然に充ちて居る丈である。無意味な事を云ひさへすればヒ

ユーモアだと思つてゐる。不合理にして矛盾極まる觀念を連結して、自分さへ笑はずには讀めないものを書けばヒューモアだと信じてゐる。

ヒューモアに關するアヂソンの議論を取つて、さきの家具師の例と引き較べて見ると、彼の考がよく分る。彼は家具師以上のヒューモアを決して許す氣はなかつたのである。ヒューモアに於て過度法外を忌んだ如く、彼はキツトに於ても中庸説を持つてゐたらしい。従つてラベレイもしくはシエクスピヤーもしくはスタインの如き、突飛な、執拗な、奇抜な、理を離れた、常識を飛び越した、種類のキツトは彼の好まざるのみか、解し得ざる所であつたらしい。キツトに關する彼の考は矢張り彼の口から聞くのが一番慥かである。彼は『スペクテーター』の五十八號より六十三號に互つて偽りのキツトを攻撃してゐる。其説は今から見ても決して下らないものではない。偽りのキツトの第一には古昔(希臘)の詩人が、自分の詩を、卵の形や、翼の形や、又は斧の形に似せて書き綴つた例を擧げてゐる。是はキツトかも知れないが、私の見る所では文學上の價値はないものとしか思はれない。偽りのキツトの第二にはリポグラマチスト即ち字落しを擧げてゐる。此字落しと云ふのはイロハのうちのある字を使ひつこなしで詩を作る。一種の遊戯である。成程是も才がなければ出來かねるかも知れないが、文學の内容には關係のない事だから論ずるには當らぬ事である。第三の偽りのキツトは中世紀に起つた換綴トウツクださうである。是はイロハ中の五文字

とか十文字とかを撰んで色々に並べ換え、置き換えて其都度新らしい字形に組み上げる。是も文學ぢやない慰みだから我々には用はない。第四の偽りのキツトとして、アヂソンはパン(地口)を擧げてゐる。是は日本で俗に云ふ駄洒落の事である。沙翁にも大分ある。アヂソンはわざ／＼沙翁杯も此弊を受けてゐると斷つてゐる。此節に彼は甚だ尤もな事を述べた。

“Having pursued the history of a pun, from its original to its downfall, I shall here define it to be a conceit arising from the use of two words that agree in the sound, but differ in the sense. The only way therefore to try a piece of wit, is to translate it into a different language: if it bears the test, you may pronounce it true; but if it vanishes in the experiment, you may conclude it to have been a pun.”—No. 61.

(パンの歴史の興廢を敘したから、余は茲にパンの定義を下さうと思ふ。パンとは發音が同じくつて、意義の違つた二つの言葉を用ひて生ずる一種の氣轉である。キツトを試験する唯一の方法は、之を他國の言語に翻譯するにある。翻譯しても通用すれば眞のキツトである。もし翻譯と共に消えて仕舞へばパンである。)

パンは固より文學的に價値の多いものではない。其價値は字音の類似の通用する範圍内に限られてゐる。従つて之を外國語に譯す事は到底出來ない。譯せば消えて仕舞ふ許である。外國語に

譯せないと云ふ事は、つまり其價値の普遍的でないといふ意味と一般である。アヂソンの説く所は至當である。然し普遍的であると云ふ事は、あながち文學的に最上といふ事にはならない。普遍とはたゞ誰が、讀んでも興味がある事で、興味の廣狹を示す言葉ではあるが、其深淺を定める言葉ではない。従つて單に翻譯が出来る出来ないで、萬事の試験を了する譯には行かない。嚴密に云へば文學的に尤も價値のある部分でも翻譯しがたい所はいくらでもある。パンに限つた事ではない。アヂソンの説は此所迄及んでゐないから不完全なものには相違ない。其積で御聞を願ひたい。

次に彼は眞のキツトを説明してゐる。彼の意見によると、眞のキツトは字音に關係なく、多くの場合に於て、觀念の類似調和から出る。又眞偽の混交したものもある。彼は之を雜のキツトと名づけてゐる。彼は雜のキツトの例にカウレーを擧げた。情熱は火に似てゐる。昔から此類似觀念の連想を利用して愛を喩へて火と云ひ燄と呼ぶのが御定まりである。此表裏二面の意味をもちつて、詩人が種々様々のキツトを弄した中に、カウレーのは大分手数がかゝつてゐる。

第一には、女の眼が愛の熱情の源である。同時に眼そのものは甚だつれない。冷やかな様子を。だから之を喩へると、氷から出來た燃えるが如き硝子 (burning-glasses made of ice) である。けれども女の爲なら、何んな苦痛も厭はない。此意味を、熱帯でも住めると云ふ句であらしてゐる。次に、此女にレモンの汁で書いた手紙を送つたら、女はこれを火に翳して讀んだと云ふ所から引掛けて、どうぞもう一度愛の燄に翳して讀んで貰ひたいと云つてゐる。次に女が泣けば、内心の熱から蒸溜した涙であれかしと願ふ。夫から女の居ない時は八十度以上になる。三十度も極に近づいて来る。彼の冒險性の愛は向上の燄である。幸福なる愛は天上の火である。不幸なる愛は地獄の火である。寐られぬ時の愛は烟の出ぬ火である。人の意見に従はぬ愛は風に煽られて愈熾なる火である。酒を呑んで戀を忘れ様とするのは、火に油を注す様なものである。彼の心はエトナの火で、ヴルカンの代りにキューピッドの鍛冶場を有してゐる。——どこ迄行つても際限がないから此位にして已める。但しアヂソンは之を評して「雜のキツトである。……類似が言葉にあるか觀念にあるかの階級によつて眞に近づいたり、偽に近づいたりする」と云つてゐる。

是でアヂソンのキツトに關する意見が大分明瞭になつた。私の考へてゐるキツトの意味はいざ知らず、彼は二個の類似觀念を綜合する才を稱してキツトと呼んでゐるのである。此點に關しては、去年の講義中に卑見を述べて置いたから、再び之を繰り返す必要はあるまい。然しアヂソン自身のキツトは果してどの位の程度なものであらうか。少し研究して見たい。「スペクテーター」の百九十八號に女を Salamander (普通山椒魚と譯すが、こゝにあるのは傳説的のサラマンダー

である。架空の動物である。)に比較した所がある。

"There is a species of women, whom I shall distinguish by the name of salamanders. Now a salamander is a kind of heroine in chastity, that treads upon fire, and lives in the midst of flames without being hurt. A salamander knows no distinction of sex in those she converses with, grows familiar with a stranger at first sight, and is not so narrow-spirited as to observe whether the person she talks to be in breeches or petticoats."

(世の中には一種の婦人連がある。余は此婦人連に敢てサラマンダーの名稱を呈したい。サラマンダーと云ふのは、火の上を渡つたり、燄のなかに住んでゐて、怪我をした例のない程に節操堅固の女豪を云ふのである。サラマンダーは相手が男だらうが女だらうが御構ひなしに話をする。一見直ちに舊知の如く親しくなる。先方が袴を着けてゐやうが、簪をさして様が、そんな事に頓着する様な局量の狭い女ではない。)

サラマンダーは蜥蜴の様な恰好をして、火を食つて生きてゐるといふ怪物だが、此怪物を以つて、御轉婆に喩へた所がアヂソンのキツトである。甚しい御轉婆になると、男性の訪問者を寢室へ案内したり、月夜に男の手をとつて、一所に散歩したり、随分危ない事をやる。サラマンダー

が大渡りを遣るやうなものである。夫を見兼ねて、亭主や親爺が意見でもすると、清淨なる自由を妨害すると云つて大不平を鳴らす。つまり何處へ行つて、何んな誘惑に逢つても平氣な女(無論冷評的に云ふ)だから、恰もサラマンダーが火の中に晏如として生活してゐるのと能く似てゐる。此似たものを二つ引き付けたのがアヂソンのキツトである。

頗る面白い。思ひも寄らぬサラマンダーを引張り出した所が奇抜であるのみならず、比喩が中適切に行つてゐる。誰でも微笑する様な御手際である。日本で云ふと蛙の面に水といふのと同程度で、それ程陳腐に聞えないから刺激が多い。此位なものは、彼等の書いた何を見ても至る所にある。中には是よりも旨いと思はれるものもある。

然しアヂソンの解釋する様なキツトの意義に束縛されずに、もつと廣い一般のキツト——それを説明して見ると云はれると一寸困るかも知れないが、まあ私と諸君がぼんやりながら一致してゐるキツト——此方の御手際はどの位なものであらう。調べて見ると、是が彼等の尤も得意な所である。彼等の文章のうちには、痛切な悲哀や、深刻な苦惱や、又は幽玄縹緲の趣や、壯烈勇壯の感じや、非凡超群のヒューモアはないが、謂ふ所のキツトは何所にでも充満してゐる。例を擧げれば際限もない。今迄擧げたものを見ても其一斑は既に分つてゐる。

『スペクテーター』の百二號にある「扇運動」と云ふのを其うちの輕妙な一として紹介して置

かう。

女の扇は男の刀と同じく、大切な道具である。だから男が撃剣を稽古する様に女も扇の使い方を練習する必要がある。そこで學校を立て、扇子使用法の教授をやる。持て (handle your fans) とか、擴げ (unfurl your fans) とか云ふ號令を掛けると、生徒が其通りに扇を持つたり擴げたりする。

“There is an infinite variety of motions to be made use of in the *futter of a fan*. There is the angry *futter*, the modest *futter*, the timorous *futter*, the confused *futter*, the merry *futter*, and the amorous *futter*. Not to be tedious, there is scarce any emotion in the mind which does not produce a suitable agitation in the fan; insomuch, that if I only see the fan of a disciplined lady, I know very well whether she laughs, frowns, or blushes.”

(煽ぎ方は千差萬別に使ひ分けが出来る。むつとした煽ぎ方がある。内氣な煽ぎ方がある。おづ／＼した煽ぎ方がある。落ち付かないのも、快豁なのも色氣の多いのもある。一口口に云つて仕舞うと、どんな心行きでも扇の使ひ方で、それと悟らせる事が出来る。自分杯は心得のある婦人の扇さへ見れば、は、あ、笑つてゐるな、八の字を寄せてゐるな、顔を赧かくしたな杯

と、すぐ鑑定がつく位である。)

是は無論遠廻しの諷刺である。女供が扇を道具に色々な藝をするのを、それとなく戒めたものに極つてゐる。學校を立て、扇の使用法を教授する迄に、女の小刀細工が發達したと云ふ主意で、之をあからさまに罵倒する代りに、裏面から面白可笑しく敘述した所にキツトがあるのであらう。前に云つた通り輕妙ではある。又彼等の尤も得意とする所である。けれども左程の手柄ではない。一概に云へば下らない。如何にも女性的で、こせ／＼してゐる。それはキツトの性質でなくつて、題目の科だから仕方がないと云へば、それでも宜しい。題目は別として、たゞキツト其物の性質から論じて見ても、成程と首肯される迄の事である。常識を離れないから馬鹿氣た所がない。馬鹿氣た所は彼等の尤も嫌ふ所で、どこか馬鹿氣た所がないと、ある面白味は乏しくなる。尤も馬鹿氣た感じの薄い所にデリケートな所がある。それが都會的な所以である。彼等の通人粹客たる所以である。通人粹客とはデリケートの必要なき瑣事に迄、手段をかけてデリケートたるものである。

アデソンとスチールの人格と作物。今迄は兩人を一樣に十八世紀の思潮に感染したものと見做して、其作物對時代といふ問題を眼中に置いて解剖的に進んで來た。然し作物は時代の反射であると同時に、人格の表現である。だから今度は後の方から少し研究して見たい。アデソンとスチ

ールは昔から並び稱せられてゐる。離すべからざるものとなつてゐる。夫程に此二人は實際文藝の兩生活に於て密接な關係があつたのである。兩人は大學當時からの朋友で、其交際は彼等の生涯を通じて渝らなかつた。アヂソンが死んで六ヶ月目に、スチールは、二人生前の交情の親密なる有様を『シアター』十二號に寄せた。其言によると彼と、アヂソンとは非常に關係が深かつた。長い間かつて一度も二人の間に行違ひがあつた事がない。たゞ同じ事を二人でやるときに雙方行き方の違があつた丈である。一人は差控えてゐる。さうして潮流を食ひ留める。一人は我無しやりに其中へ飛び込んで仕舞ふ。それで少時らくの間は双方とも避け合ふ様にしてゐたが、それでも相互の幸福は絶えず心配し合つてゐた。だから又逢ふ様になると遠慮も何もない。丸で小供の様であつた。其時一生の大事を談じたけれども、相方共に相手を説き伏せてやらう杯と云ふ考は丸でなかつた。又やつたつて出来るものではない。彼等の間に生じた意見の相違とはどんな事であつたか、又どの位の價値のある事であるか一向分らない。スチールはたゞ、自分の虚榮心を傷けた爲め、家族には不都合であつたかも知れないが、國家には幸であつたと、意味あり氣な事を洩してゐる。

斯の如く親密な友誼を結んでゐた二人は、性質の點に行くと大分違つて居た。アヂソンは感情の鋭敏な男で、他人の前へ出ると滅多に口も聞かない。冷やかで何となく構へてゐる様に思はれ

る。スチールは卒直一方の性で、腹藏のない、親切な所はあるが時々無茶をやる。或る時金に困つて千圓程アヂソンから用立つて貰つた事がある。所がかう云ふ男の常として、到底期限内には返せない。するとアヂソンはスチールを相手取つて法廷に訴へた。詳しい事情は分らないが是丈聞いて見ると頗る妙な感じがする。ポープの詩名が隆々と世間に喧傳せられる様になつた時、アヂソンは嫉妬の念に堪えないで、裏面から手を廻して、彼を傷けたといふ話さへある。ジョンソンの彼を評する言葉によると、かうである。

"This modesty was by no means inconsistent with a very high opinion of his own merit. He demanded to be the first name in modern wits; and, with Steele to echo him, used to depreciate Dryden, whom Pope and Congreve defended against them. There is no reason to doubt that he suffered too much pain from the prevalence of Pope's poetical reputation; nor is it without strong reason suspected, that by some disingenuous acts he endeavoured to obstruct it; Pope was not the only man whom he insidiously injured, though the only man of whom he could be afraid."

(大變謙遜に控えてゐる。然しいくら謙遜したつて、自分が一番偉いと思つてゐる事も出来る。此男は當世 wits の第一に數へられなくつちや承知しないのである。彼はスチールを味方

にして、ドライデンをくさした。ポープとコングリーブが賞めたからである。ポープの詩名が高いので煩悶したのも疑もない事實である。又陰險な手段に訴へて、其盛名を傷けやうとしたのも根拠のある事の様に思はれる。彼が不正な方法を用ひて傷けたのはポープばかりではない。尤も彼の恐れてゐたのはポープ丈であつたらう。

アデソンは又極めて注意深い男である。力めて敵を作る事を避けた男である。スウィフト杯に對しても出来る丈骨を折つて調停策を講じた男である。スチールとは全然反對である。此の方は輕卒で、淡泊で、非常な勢力家で、遊ぶ事も、いくらでも遊び、仕事をする事も、いくらでもする。友達の爲めに日常の計畫などを打ち壊されても、苦にする所ではない、寧ろ一所になつて愉快に遊んで仕舞ふと云つた風の性である。だから直情徑行、結果も成行も決して構はない。容貌から云つても鼻の短かい、顔の丈の詰つた滑稽漢である。

之を括つて見ると、アデソンは落ち付き拂つた、手落のない人の様に思はれる。スチールは亂暴で失敗が多くつて、それでゐて愛すべき資格を具へてゐる様に見える。どつちが好きでも、どつちが上手でも構はないが、普通世間の評價は、いつでも眼前の實用文で人物の高下をつけてゐる。あれは人物だと云ふから、どんな男かと思つて見ると、たゞ實際的實用向だと云ふのと同じ事である。用をさせるには都合が好いかも知れないが詩的に云ふと三文の面白味もない。人間は

用ばかりして居られるものぢやないのだから、用以外の點に就ても少し人物を拵えて置いたら善からうと思ふ。夫れはほんの餘事である。此二人の性格が果して作物の上に出てゐるか、ゐないかを一應調べて、すぐ次の問題に移らうと思ふ。

『スペクテーター』の四百二十二號にスチールが「嘲笑」に關してかう云つた。

“To say a thing which perplexes the heart of him you speak to, or brings blushes into his face, is a degree of murder; and it is, I think, an unpardonable offence to shew a man you do not care, whether he is pleased or displeased.”

(人を困らしたり、人を赤面させる様な事を云ふのは、人殺しの軽いものである。たとひ先の人はどう思はうとも、厭な奴だからと云ふので、其人に對して、こんな所作をするのは許すべからざる罪惡である。……)

實際彼は此主義を實行したと云つてよろしい。彼が他の惡徳や愚習を攻撃するときにはアデソンの遣口とは大分趣を異にしてゐる。アデソンに比べると皮肉の度が餘程少ない。ミントーは其著『英國の散文』中に此兩者を比較して、スチールのヒューモアは眞卒な和氣に満ちてゐるけれども、婉曲な細工になるとアデソンに及ばないと評した後にかう論じてゐる。

“Steele was a kindly observer of human frailties. Against what he considered to be

heartlessness and vice he was openly indignant: his natural tendency was to use the lash freely in hot blood—not to introduce galling points of satire with a smiling countenance. Minor faults, affectation, presumption, a dictatorial manner, and suchlike, he ridiculed with good humour, with a certain fellow-feeling for the objects of his ridicule.”

252

(スチールは人間の弱點を親切に觀察する人である。彼の眼から見ても、無情、惡徳と思はれるものに對しては、彼は明かに公憤を洩すを憚らなかつた。彼の傾向は熱情に乗じて、容赦なく鞭を振ふにある。破顔微笑の下に針で刺す様な遣口は取らない。其他の小過に至つては、氣取る事であらうが、生意氣な事であらうが、威張る事であらうが、皆同情を以て、善意的に嘲笑した。)

ミントーは又アヂソンを評して斯う云つた。

“He is the great English example of polite ridicule…… Not a single paper of Addison's can be pointed out that does not contain some stroke of malice—'gay malevolence,' perhaps, but nevertheless malevolence.…… Still, in characterising his humour, the critic must not sink the fact that it is at basis malicious—it is 'humorous satire.' If we call it amiable humour, we must remember that it is a kind of humour that may be amiable to the reader or hearer, but is far from appearing amiable to the object.”

(彼は恭しき嘲弄の好模範である。……凡そアヂソンの書いたもので、何處かに惡意を含んで居ないものは一枚もない。陽氣な惡意と云へば云へるかも知れないが、矢張り惡意はどこ迄も惡意である。……彼のヒューモアの性質を論ずるに當つて、其根底が惡意的であると云ふ事は決して見逃すべからざる事實である。彼のヒューモアはヒューモアの諷刺である。感じの好いヒューモアと云ひたければ云つても差支ないが、それは讀者又は聽者に感じが好いので、當人には感じが好い所ではない。)

もし人物が著作の上にはあらはれるとして、兩人の人物が前に述べた通りとすれば、ミントーの批評は當つてゐるかも知れない。但し私の見た所では是程の相違もない様に思はれる。先に一寸御話した兩人の合作になるサー、ロジヤの性格でも、ミントーの説によると、スチールの書いた所は親切で、常識があつて、愛すべき點のみが出てゐるが、アヂソンの受持つた部分になると、ロジヤが嘲笑に價する様な妙な人物になると云ふ話である。私は一々調べて見ない事だから、ミントーにどの位信頼して好いか分らない。只御参考の爲に紹介して置く。ミントーは又兩人の

差違を知らうと思ふなら、スチールの『醜俱樂部』と、アヂソンの『二片志俱樂部』とを比較すればすぐ分ると云つてゐるが、私には只是丈の區別がある様に考へられる。——アヂソンのほどこまでも細かで、仕上げが見事で、キツトが練れてゐる。之に反してスチールのは無邪氣で、活潑で、男性的である。此點に於て、もう少し長く二人を比較したら興味があるだらうと思ふが、時間がないから是で此編を終る。

第四編 スキフト (Jonathan Swift. 1667—1745) と 厭世文學

年齢から云ふと、スキフトはアヂソンやスチールよりも四五歳年上者である。死んだ時も此の兩人よりはすつと後れて居る。著作の上から云ふと、『桶物語』(A Tale of a Tub)と『書籍の戦争』(The Battle of the Books)は一七〇四年の出版であるから、『タトラ』杯よりも古い。加之彼が稿を起したのは、それよりもすつと前のことであるからして、無論スキフトの方を前に論ずべき筈であつたが、彼が一代の大著作と評せられる『ガリヴァー巡回記』(Gulliver's Travels)の如きは一七二六年に出たもので、『タトラ』杯とは十年以上後れて居る。そこでアヂソンやスチールを論じた後に、スキフトに移ることにした。

スキフトは英文學史中第一流の文學者と目されてゐる。苟も英語を解する者でスキフトの名を知らぬものはあるまい。尤も其著述の中で、Gulliver's Travelsだけは今でも汎く讀まれて居る

が、其他は専門學者の外殆んど手にされない。否、この有名な Gulliver ですら、單に小兒の讀み物として迎へられて居るに過ぎない。日本などでは此頃は Gulliver さへ讀まない者が多いだらうと思ふ。尤、Gulliver's Travels を讀まなければ英文學が研究出來ないと云ふ譯でも無いからして、讀まんでも構はないが、兎に角其名前が耳に熟して居る割合に、作物が讀まれて居らぬことは事實で有るらしい。從て此機會を利用して、スウィフトと云ふ人の著作は如何なる性質のもので、又如何なる價值のあるものかを研究するのも一寸面白いことだらうと思ふ。

スウィフトと云へば諷刺家を連想する。古來から諷刺と云ふ問題を論ずる時にスウィフトが引合に出て來ないことは無い。日本でも其通りである。して見ると、スウィフトの價值は全く諷刺家たる所に在つて存する如く、世間から思はれて居ると云つて可い。で有るから、今スウィフトを論ずるに當つても、矢張り諷刺家として論ずるが可からう。可からうと云ふのは、唯彼を諷刺家であると證明したら可からうと云ふのでは無い。彼の諷刺は如何なるものであるか。諷刺とは元來どんなもので有るか。スウィフトの諷刺は十八世紀の氣風と調和して居るか、又はスウィフトの人格と調和して居るかと云ふ様な問題を、私が力の及ぶ限りの材料と考へて論じたら面白からうと云ふ意味である。但し余の考へがどの位正鵠を得て居るかは、諸君の判斷すべき事に屬するので、唯日本人が今迄論じたことの無い作者を捉へて、日本人として評論する處がお慰みである。

文學は吾人の趣味の表現である。即ちある意味に於て、吾人の好惡を表はすものである。

此ある意味に於てと云ふ言葉を説明しないと誤解が出來易いから一寸御斷りをして置く。前の編に、明かにそれとは云はなかつたけれども、凡ての文學的作物は、普通以上の廣義から見ての訓戒を讀者に與へるものと云ふ事は述べて置いた。此廣義に解釋した訓戒とは、作物の讀者に及ぼす活きた影響の事で、此活きた影響が作物から出る如く、作家は此活きた影響を事實（もしくは想像によつて多少變化されたる事實）から得たのである。だから作物にかいてある事は、事實もしくは想像によつて多少變化されたる事實だけれども、外の言葉で云へば、作家が自然から受けた活きた影響を書いたと云つても差支ない。此活きた影響とは、有機的に吾人の生命の一部を構成するもので、枯死、孤立した斷片的の知識とは違ふ。即ち未來の行爲言動を幾分でも支配する傾向を帯びたものである。是が趣味である。

趣味には必ず好惡が伴つて來る。好惡は撰擇を生ずる。（出來得る場合には。）撰擇の結果は遂に發現して行爲、動作、言語となる。行爲、動作、言語の自由ならざる場合にも、之を發現せんとするの傾向が腦裏にあれば無論同じ事である。だから私の云ふ生きた影響と云ふのはつまり好惡の附着してゐるあるものと云ふのと同じ事になる。從つて此好惡の二字に就て誤解を防いで置く必要がある。

何故と云ふと。私は文學者の取り扱ふ材料を、類別して、眞僞の方面から見る材料、善惡の方面から見る材料、美醜の方面から見る材料、及び壯劣の方面から見る材料とする。(其外に類別のやり方は無論出来る。現に去年の講義は他の類別法を用ひた。)そこで善惡や美醜や壯劣の方面から見る材料には、始めから好惡の念が伴つてゐる。但し標準は必ずしも一定してゐるとは限らない。眞僞の材料にも眞と僞とを對したら好惡の念が伴ふかも知れないが、自然の事實には僞と云ふものがない。想像の事實にも僞と云ふものがない。僞と思ふのは人が評する時の言葉で、作家自身から云へば、想像の事實は矢張り何處迄も事實である。もし僞りと思つたら始めから書く譯がない。いくら架空の事實でも、事實であつて、僞りではない。もし僞りを書くとき云つたら、學校の先生が私は嘘を教へてゐますと公言する様なものである。従つて眞僞の方面から見た材料には、作家自身は好惡がない。皆眞ばかりであるからである。その又眞のうちであれこれと好惡をすれば自然の結果取捨になるから嘘を書く事に歸着する。自家撞着になる。だから眞の部門には好惡がないとしなければならない。

すると前云つた、「活きた影響とは好惡の附着したあるもの」と云ふ命題とびたりと合はなくなる。文學から生ずる(作家から云へば自然から受ける)活きた影響と云ふのは、眞僞、美醜、其他凡ての材料に通じて云ふ事であるのに、眞の部門に限つて好惡はないとしなければならないと

すると其所に衝突が出来るのである。

少し考へると此衝突は解ける。即ち好惡に二重の意味があると云ふ事に氣が付けば明瞭になる。即ち一部門内に於ける甲と乙とを對照して起る好惡が一つである。夫から甲の部門と乙の部門とを比較して起る好惡が一つである。たとへば美醜の部門に屬する材料で云ふと、此部門中の同種類の彼是を并べて、彼よりも是の方が好きだとか嫌だとか云ふのは前者である。四種の材料のうちで、此資格を具へてゐないものは眞僞の部である。又此四種を并べて置いて、美醜よりも眞僞が好きだとか、眞僞よりも善惡が好きだとか云ふ念を起すのは後者である。かう云ふ二通りの好惡を認めるときは、大きく一括して、文學上の述作は、趣味の表現、即ち好惡の匂を帯びたものと云ふ事が出来る。(たとひ、眞をあらはしたのだから、好惡の念に驅られて取捨はしないと主張しても、其主張は眞僞の方面から見た材料の内部にのみ行はるべき主張で、美、善、壯の部門を眞の部門と比較すると、矢張前者を捨て、後者を取りたくなつたんだから仕方がない。)

さて好惡のあらはし方になると色々ある。さうして中々複雑である。たとへば私が茲に脚本か小説で、悪人を書いたとする。すると私は悪人を撰んだのだから悪人に趣味を持つてゐるに違ひない。一步推して行くと悪人を好んだ事になる。そこで此好んだと云ふ字が可笑しく聞える。然し實は可笑しくも何ともないのである。(一)私が一定した善惡の標準を有つて居て、其標準に相

當した悪人ならば、どうしたつて之を好む譯がない。だから人から見ても悪人を書いた様に思はれても自分では善人を書いた積でなければならぬ。是は論ずるに及ばない事である。(一)夫から悪人を好んで書いたが、其實は悪人その人を好むのではない、對照其他の藝術的必要があつて、技巧上に悪人を好んだとも解釋が出来る。是は少し話が悪人から外れて行くから議論にならないが、許さなくてはならない解釋である。(三)最後の一番誤解し易いから混合を避ける爲に、はつきり辯明して置かなければならない。私の所謂悪人と世間一般の所謂悪人と、さう違つた所がないと假定して、さうして私が悪人を作物中に書いたとする。此場合には私は辯明のしやうがない。世間では悪人と思ふかも知れないが、自分は悪人とは考へない杯と言譯を作る譯に行かない。矢張り悪人と意識して書いたに違ない。しかも悪人其物を好んで書いたに違ない。所が自分で悪人と認めて置きながら、自分で之を好むと云ふのは有り得べからざる事である。悪むいが役に立つとか、悪むいが間に合ふ杯と云ふのは、役に立つたり間に合つたりする方を好むの意で、悪むい方迄も好むと云ふ意味ではない。もしさう云ふ意味であつたら、私はある食物を不味いが旨いとか、冷たいが暖かいとも云ひ得る譯である。何故と云へば善悪と云ふ字と好悪と云ふ字とは別物であるけれども、かゝる場合に實際の話を云ふと、好きだから善で、善だから好きなのである。そこで悪人を好むと云ふのは明かに自家撞着である。にも拘はらず私は其悪人を好んで、作中に書

いた。又實際書くかも知れない。私は何故かう撞着するのだらう。説明したいのは此點である。今迄私は好むと云ふ字を善惡の方面から許り見てゐた。だから悪人を好むと云ふと、一個の道德的人物として見たる悪人を好むと云ふ意味になつて仕舞ふ。だから矛盾になる。人間を道德の方面から律して、さうして其うちの悪人を好むと云ふのは有り得べからざる事である。けれども悪人を道德的人物と見做さなければ、矛盾も衝突もなく悪人を好む事は隨意に出来るのである。悪人を道德的人物と見做さないと云ふ意味は、道德を離れて悪人が存在すると云ふのではない。道德的に働きつゝある悪人を、善惡以外の材料として眺めるのである。例へば悪人が惡事を働らく事實を、單なる事實として好む事も出来るのである。即ち其發展の迹を慕つて、一步毎にあらはるゝ心の變化もしくは行爲の推し移る様を、單なる心の變化もしくは推し移る行爲として、好む事も出来るのである。道德上の悪人を好惡する代りに、この悪人がわが前に開展しつゝある眞そのものを好む事も出来るのである。悪人を眞偽の方面より見たる材料として、好惡する事の自由なる如く、同じ悪人を壯劣の方面より見たる材料として、好惡する事も、亦容易である。——好惡はかくして二重にも、三重にも、又此方からも彼方からも出来るものである。

好惡の意味はかう複雑であるが、是から先に使ふときは便宜の爲に、臆劫を避けて、一々どの意味に當るかを説明しない。たゞあなたの方で好い加減に判斷をして頂く積である。

儲吾々が世の中に住んでゐる。世の中が運轉する。吾々は、吾々の性質や、境遇や、又地位や、事で、此世の中を面白く見る事もある。又は癪に障つてならない事もある。尤も世の中の事象を、事象其物として、單に其成行を眺める丈ならば、いつ何時、いづれの世界に生れても面白いばかりで済してゐられるかも知れない。戦争があつて家を焚かれ、財を奪はれても、戦争とは如何なるものであるかを知られる丈が愉快になる。泥棒が這入つて家人を殺しても、泥棒を研究する爲には大變な便宜である。けれども吾々は世の中に住んでゐる。世の外から世の中を眺めて居るのではない。従つて世の中に生存する自己の利害其他から戦争を嫌つたり、泥棒を悪んだりする。即ちたゞ眞の一字の爲めに、わが好悪を支配されてゐる程呑氣な位地には立つてゐない。善惡の方面からも、美醜の方面からも、壯劣の方面からも、盛んに好惡を違ふして世相を眺めてゐる。かう云ふ眼からして、世の中を面白く感じたり、又癪に障つて感じたりすると、其感じを帯びた世間の印象が、文學的作物の内容となつて作家の筆に上るのは當然である。文學の歴史は明かに之を證據立てゝゐる。

但し此感じは二重三重に重なり合つてゐるから、さう容易に烏や鷺の様に類別は出来ないけれども、まづ此講義に便宜の爲めに、類別して御話をする、先づ世相を面白く感じて起る文學がある。面白く感じて起るのだから樂天的と云つてもよろしい。尤もそのうちで現在の世相に満足

を表するのは寫實的で、過去に満足を表するのは歴史的で、(文藝復興、ゴシック復興の如きもの)未來もしくは想像上の世相に満足を表すものは理想的となる譯である。次に世相を悪んで起る文學がある。悪んで起るのだから悲觀と云つても、厭世と云つても、もつと軽い言葉を用ひれば諷刺と云つても構はない。是も理論的に云へば、前同様三つになる筈であるが、尤も多いのは現在の世相に關するものである。過去を悪んだり、未來を悲觀したりするよりも、吾々が一番現在が癪に障るからである。

もう一度御斷りをするが、私は斯様に單純な區別で、當今の様な複雑な作物を律し去る積でも何でも無い。たゞスキフトを評論するに便宜な區別として一應承知して置いて頂くのである。で、前に申した樂天的な寫實主義であるが、是は人々分に安んじて、太平を謳歌する様な國運の際、もしくは神経が麻痺して悲哀疼痛を感じざる様になつた人間が、現在の状態に溺れ喜んで、浮世を面白く暮して行くと云ふ様な不祥な時代に生れる文學である。是は大體から云つて満足を表した文學であるけれども、時によると諷刺的不平の發現と間違へられる事がある。

例へば徳川時代の滑稽物の様なもので、ある人は、あれを諷刺と解釋するが、私にはさうは思へない。(作の善惡巧拙は無論問題でないとして)私が讀んで見ると、あの『膝栗毛』の様なものは、自分が失敗をしたり、失策をして、其失敗や失策を、客觀的に見返つて面白く打ち興じて

ゐる體があり／＼と見える。何處迄も陽氣な文學である。當時の社會制度や、階級制度の抑壓に對して、反抗の聲を裏から仄めかしたものは思はれない。たゞ讀者又は評家の着眼の仕様では諷刺とも皮肉とも解釋が出来る丈の事である。

尤もさう解釋が出来ればそれで宜しい。争ふ必要も何も無い。けれども斯う解釋をするのが深い解釋だ、却と勿體ぶるのは可笑しい。——個人の上でも、何か愉快な事でもあつて、嬉しくつて堪らない程陽氣になると、随分妙な事をやる。それを人から見ると馬鹿にした所作の様に解釋が出来る。眞晝間提灯を點けて往來を歩行くのは、世の中の暗黒な所を諷した皮肉な仕業と取れば、取れない事もあるまいが、一方から云へば、鬘をつけて花見をするのと同じの氣樂さから出ないとも限らない。花見の趣向は現在に満足を表する程度の尤も甚しいもので、不平や諷刺の表現でない事は明かである。現に『ドンキホテ』杯でも、多數の評家は諷刺と見てゐる様だが、私は花見の鬘同様な感がある。

すると樂天的な滑稽物と、諷刺的な文學とのあるものになると、讀者の取り様でどつちにでも解釋が出来る事になる。のみならず、ある作家になると、此兩面に互つて關係を有してゐるかも知れない。ある所は本當に満足で巫山戯てゐるが、次の章になると巫山戯ながら癪を云つてゐるかも知れない。それで作者の意志は勿論分らないとする。よし分つてたつて、分つた通りに讀者

を影響しなければ何にもならないから、暫らく之を問題外として、滑稽物と諷刺物とを區別する。一大索引は何であるかと考へて見る。私はかう思ふ。——滑稽物の讀者に與へる影響は、未來に於て、讀者が其滑稽を再演して見なくなる傾向を帯びて来る。再演して見る程烈しくなくても幾分か其傾向を心に有してゐる事が快感になる。之に反して讀者の諷刺物から得る影響は、同じく未來に於て、讀者が可成此被諷刺的地位を避け様とする傾向である。もし此被諷刺的地位に陥る危険を冒せば、個人として自己の人格を傷けると云ふ不安の念を抱いて来る。もし此被諷刺的地位が、人類一般に共通なる普遍性から出てゐて、如何なる王公貴人も、如何なる金満家も、又如何なる學者も、苟しくも人間である以上は、到底免かれる事が出来ないとなつた時に、諷刺は一變して絶望暗黒なる厭世文學と變するのである。スキフトを評するときには是丈の事を承知して置く必要がある。

スキフトの諷刺の種類及び程度が如何なるものであるかを御話する前に、前に擧げた不満足をあらはす文學的表現の階段を一通り述べる。不満足とは、惡に不満足、醜に不満足、劣に不満足なる意味である。但し文學的表現とある以上は、醜、惡、劣の評價が自然に讀者の趣味に乗り移らなければならぬ。恰も外部の壓迫によりて、作者の評價を己むなく聽くの状態にあつては、文學的評價の極致とは云へない。文學的評價とは、其表現によつて自づから讀者の性を移し、

氣を移す評價を云ふのである。外より押し付けるのでなくて、内より移らしむる手際を云ふのである。一に來るのは正面憎悪である。作中人物の醜、悪、劣を曝露して、如何にも醜、悪、劣なるが如くに感ぜしむるのを云ふ。必ずしも彼は醜なり、彼は悪なり、彼は劣なりと云ふ必要はない。たゞ醜、悪、劣の内容を列挙して、しかく感ぜしめれば宜い。デツキンスは此方法を用ひる。但しデツキンスは自己の憎悪を充分に發揮せんが爲に、一點の取るべき所なき醜惡漢を描き出して、不自然の痕をのこす事が多い。又其評價法が外壓的で厭氣を生じさせる。前編に述べたアデソンとスチールを比較すると、スチールは此種に屬する。彼の攻撃方も亦屢外壓的である。

二は側面憎悪とも云ふべき表現である。敘述は慇懃である。用筆は丁寧である。時々微笑する。それが嘲弄とは取れぬ程の微笑である。激してゐないから讀者からは品が良く見える。又毒惡でない様に見える。然しながら其齷らす結果は好くない。遣られたものに取つては随分辛いものである。是がアデソンの慣用手段であつた。(但しアデソンも屢ば其表現法に於て、文學的に過を犯してゐる事は前に述べた通である。)斯う云ふ冷嘲には手際が入る。正直に怒る様な愛すべき人には一寸遣り悪い藝である。所謂十八世紀の *Mits* は此邊が得意な所であつたのだらう。(尤も後段に御話をするが、當時の批評家や文學者が互に罵り合つた言葉杯には恐ろしい、獐猛極つたものがあつた。今はみんな消えて仕舞つて、ポーブの『ダンシアツド』文残つてゐる。)十九世紀

ではサツカレーが此方面の大將であつた。三は依然として惡を惡として斥け、醜を醜として嫌ふうちに、彼等に對して同情のある保護を加へる様な筆意を用ひる。あながちに辯護の勞を取るには及ばない。事實の敘寫のうちに、此態度が讀者に受け取られ、ばい。此種の書き方のうちで尤も人の眼を惹くものは十九世紀に入つてエリオットがゐる。モーレーがエリオットの作を評して、此作家は人間に本來の惡があると云ふ事實を否定して筆を着けると云つたのは之が爲である。以上の例は簡略を尙ぶ爲め頗る粗雑に流れてゐるが、まあ此位で好いとして、第四に移るが、前に擧げたデツキンスとか、サツカレーとか、アデソンとか、スチールとか、或はエリオットとか云ふ作家等は、種々な點に於て人間の行爲其他を、それぞれに評價して、其評價のある部分には、彼等の不満足を表はしてゐる様なものゝ、決して厭世家でも悲觀家でもない。アデソンやスチールに至ると前に述べた通り本人は大得意である。しかも彼等の住んだ時代が英國に取つて、大得意の時代と信じてゐた。所が此所に述べる第四即ちスウィフトの不満足になると、そんな樂天的な不満足ではない。普通の不満足は必ず一方に満足を控えてゐる。もしくは夢んでゐる。スウィフトの不満足には此對立がない。だから其不満足の表現は、ある目的あつての表現ではない。不満足を不満足として表現する文である。過去、現在、未來を通じて、古今東西を盡くして、苟しくも人間たる以上は、悉く嫌惡すべき動物であると云ふ不満足である。従つて希望がない。救

はれ様がない。免かれ様がない。彼の諷刺は噴火口から迸る氷の様なものである。非常に猛烈であるけれども、非常に冷たい。人を動かす爲の不平でもなければ、自から免かれる爲の不平でもない、どうしたつて世界のあらん限りつゞく、不平の爲めの不平だから、スィフト自身は嘗て激して居ない。冷然平然としてゐる。何だかスィフトなるものが重たい石の様に英國の眞中に轉がつてゐる様な心持がする。さうして此石が一つある爲めに、左右前後は無論、全世界に蠢動する人間と名のつくものが悉く石に變化した様に思はれる。なぜと云ふと、彼は如何に憎惡の意を洩らしても決して赤くならない。又決して慇懃にも出ない。同情は固よりない。しかく他を眼中に置く程に人類的ではない。樂天の分子を含んで居ない。自から石を以て居ると共に、他を片々たるごろ太石と見做してゐる。それでゐて斷えず氷の様な烟を吹き上げてゐる。

姑らく作物を離れて考へると、是が一寸不思議な現象である。こう非常に冷靜で、しかも猛烈極つた人類一般の嫌厭は何日如何なる時代だつて滅多にあるものではない。どんな衰運に傾いた世に生れても、どんな屈辱を蒙つた事のある男でも、容易に斯うは出られない。特に十八世紀に在つては猶更妙である。と云ふものは前に該世紀の概況を話した時に述べた通り、英國の十八世紀は決して厭世的傾向の起る時代ではないのである。十八世紀の英人は一六八八年の革命の結果として議會政治を確乎たる基礎の上に置いた。彼等は之を光榮ある革命 (Glorious Revolution)

と號して、自由の實現を喜んで居た。政體に於て我に匹敵するものはないと自負してゐた。彼等は又理性の世に生れてゐた。凡百の事は理性に訴へて決すべきもの、又決して適當なるものと考へてゐた。彼等の開化は前途有望の開化であつた。有望の開化を有する國民に厭世的の音調はない。彼等は過去を目して野蠻時代と呼んだ。過去に未練のない國民に悲哀の聲は無い、古を慕ふ文學は出ない。凡そ吾人の厭世に傾く原因のうちで其最も大なるものは何であらうと考へて見ると、私は斯う思ふ。——吾人が吾人の生活上に、所謂開化なるものゝ缺くべからざるを覺ると同時に、所謂開化なるものゝ吾人に満足を與ふるに足るもので無いことを徹底に覺つた時である。昔ルソーは自然に歸れと叫んだ。凡ての人工的制度を打破せよと叫んだ。之を打破して自然に歸れば、黄金時代を生ずるに足るとの確信を有して居たからである。この確信がある間は、現在に不満足かは知らぬが、其不満足は現在に不満足なので、絶望と云ふ譯では無い。然しながら現在にも満足が出来ぬ、過去にも同情することが出来ぬ、所謂文明なるものは過去、現在、未來に互りて到底人間の脱却することの出来ぬものであると知ると同時に、文明の價値は極めて低いもので、到底この社會を救済するに足らぬと看破した以上は、腕を拱いて考へ込まなければならぬ。天を仰いで長大息せねばならぬ。厭世の哲學は這の際に起るものである。厭世の文學は這の際に起るものである。文明と云ひ開化と云ふものに飽き果てたるにも係らず、その文明なり開化なり

を如何ともする能はざる時機に發生するのである。

然るに十八世紀は決して斯様な世の中では無い。今云ふ通り英人が社會制度の上に於て、又政治組織の上に於て偉大なる光明を認め得た時代である。して見ると、こゝにスキフトと云ふ一個の人間が有て、非常に暗黒なる觀察を人間と社會との上に放つたのは、時代と關聯して論ずると、一種の常規を外れた現象と云はねばならぬ。無論諷刺の文學は自己又は自己の周圍の何れかに於て不満足の點が無ければ生じない譯である。然しながら之には程度のある事で、アデソンもスチールも世の中の或點に於ては、不満足であつたればこそ、あの様な文學を以て之を匡正しやうと試みたのには違ない、が彼等の不満足の箇所は極めて瑣末の點に多かつた。高が咖啡店で話の仕方が禮儀を失して居るとか、婦人に對して男子が亂暴粗野であるとか、婦人が餘り扇を荷厄介にして困るとか云ふ位な者である。最烈しい攻撃でも、博奕又は飲酒邊の題目に留まつて、それ以上には殆んど出なかつたのである。彼等は決して根本的に人間に愛想を盡かして居らなかつたのみならず、當時の人氣風俗及び政治經濟の大體に於て大に満足して居たのである。彼等の不満足な所は、寧ろ他人が自己の如く啓發されて居ないと云ふ點にある。そこで自己が先覺者として是等を矯正してやらうと云ふ微志をも含んで居る位であるからして、其不満足なるものは反つて彼等自身に満足して居る反響とも見られる。四五十年後にはゴールドスミス杯が出て、商業繁盛の

爲め、世降り道衰ふと云ふ様な嘆息を詩句の間に洩らして居るが、是等は單に通り雨の様な現象であつて、深く腦中に刻み附けられた不満足とも受取れない。事によると、唯詩的ならんが爲に、詩的なので、其實は内容のない感想かも知れぬ。とかく此等の人の不満足から來る批評なるものは、決して時代と調和を缺いたものでは無い。然しスキフトに至つては、如何しても十八世紀流で無いと思ふ。彼の聲は絶望の聲である、何等の光明の存在をも世の中に許さぬ不満足である。如何しても時代思潮の表現とは受取れない。既に時代思潮の表現で無いとすれば、其出處を個人としての彼の人格に求めるより外はない。又彼一人に獨得な一身上の經驗に索ぬるより外に道が無い。彼の私生涯がどの位不愉快であつたか、又彼の公生涯がどの位失敗に終つたかを見るより外に仕方がない。従て此際彼の傳記の一般を參考に供する必要が起つて來る。然るに普通傳記と云ふものは、斯かる非常な例外たるべき現象を生ずるに足ると思はれるだけの事情が詳細に書いて無いものである。従て批評家は能く一の犯し易い誤謬に陥る。即ち作そのものに顯はれた人生觀などを、作家の生涯に於ける極めて微細な事件と結合して説明しやうと試みる。例へば病氣の苦痛を訴へた詩があるとすると、其の作家の傳記を見て、何年何月風邪を引いたことがある、それだから斯様な詩を作つたのだと論定したがる。無論間違つてゐるとは誰も云ひ得ないかも知れないが、果してさうだとは何人にも合點は出來ない。凡て不完全な傳記を基礎として、是非とも

傳記と作物との關係を見出さうとすると、こんな馬鹿氣た弊に陥るものである。縦しや人間の仕事として個人の内部の傳記が完全に出來たとしても、其傳記だけでは、作物の出來た原因が知れるとは云へない。父母から受けた遺傳的の性質などが判然と分らぬ以上は、其人の生涯を貫く言動の傾向も確と分る者ではない。從て其作物の關係も確たる事は一言も云へない道理である。であるからしてスキフトの有して居た様な、人生に對する手痛き不満足を其傳記の中に求めたつて、必ず出て來るか來ないか無論保證は出來ない。實はスキフトの傳を通讀して見て、存外その波瀾の少ないのに驚いたのである。彼が外部の歴史は、多少の失意はあるにもせよ、斯く人類全體に向つて大打撃を加へる様な表現を正當とするに足るだけの起伏波瀾を有して居らんのは明かな事實である。して見ると、此等の作物を説明するには、是非とも彼が内部の歴史に訴へなければならぬ。猶進んでは彼が遺傳的傾向に訴へなければならぬ。然し兩方とも到底行はれ難い事柄である。私の内部の歴史は私より外に知る人が無い、又私と雖氣附かぬ所が多からう。況んや他人のスキフトの内部の歴史などに至つては、どうしたつて到底分らないに極つてゐる。斯うは云ふものゝ、彼の外部に現はれた歴史の中で、吾人の參考に成る様なものが全く無いとも限るまい。必ずしも是等が原因と成つてスキフトをかく迄厭世的にしたと主張する積は無論ないが、或はさうであつたかも知れぬ、又然うあるには與つて力が有つたらう位に判することは敢て差支ないと思ふ。そこで彼の傳記を少々研究して見度い。然し傳を述べることが主でないからして、唯吾人が入用と思ふ事柄ばかりを述べた方が便利である。其積で御話をする。

一。スキフトに就ては一つ著しい事實がある。彼は孤兒である。父は生れぬ前に死んで仕舞つた。母は自活の途に窮して、人の補助に依て暮して居た。從てスキフトは幼少の時から決して豊かに延びくと生ひ立つた事の無い男である。十四歳の時、ダブリン(Dublin)のトリニテイ、カレンヂ(Trinity College)に入學したが、少しも學課を勉強しなかつた。のみならず放縱不羈と云ふ性質で、校則などはてんで守つた事がない。いざ卒業と云ふ場合に、學校では Dulness and Insufficiency (怠惰にして且つ無能)と云ふ理由の下にバチエラア、オプ、アーン(B. A.)の學位を與へなかつた。後に與へられたことは與へられたが、これは speciali gratia と云ふので、學業劣等品行不良なるにも係らず特別の詮議を以て學位を授けられたのである。加之、彼は一六八五年の十一月から一六八七年の十月迄の間に七十度懲罰を受けて居る。品性も無ければ學問もなく、朋友もなければ金も無い。全く散々の體で、母方の遠縁に當るサー、キリヤム、テムブルの家に厄介に成る様になつた。この様な外部に現はれた事情は二様に解釋することが出来る。——彼は自身の境遇が不愉快である所からして、自暴自棄に陥つてこんな真似をしたのであるか、それとも生れ付きからして、こんな亂暴者であつたのか。或は兩方合併したものであるか。何れに

しても可い。斯かる經歷は決して一年や二年で其効果を失ふもので無い。苟も自尊心のある男ならば、苦い屈辱の感じを永く留むるに相違なからう。

二。彼は自尊心の強い男であつた。前にも御話した通りオックスフォードの伯爵が彼に若干の金を贈つた時、その贈り方が氣に喰はぬと云つて、伯爵を一度ならず二度迄も謝罪させた。其頗末は彼自身『ステラへの日誌』(Journal to Stella)の中に書き込んで居る。彼は又デフォーを罵つて名も無き犬とか何とか云つた事がある。それからジョン・デニス(John Dennis)と云ふ評家を氣狂と呼んだ事もある様に記憶する。又或時バリーントンと云ふ貴婦人に唱歌を所望して拒絶された事がある。其時彼は自分の命じたことは是非共遣れと威嚇的に相手を強迫した。又た或時はバークレー卿と其秘書のブッシュを眼の前に置いて、God confound you both for a couple of scoundrels! (ふたり共悪黨だ。くたばつて仕舞へ)と罵つた事がある。

彼は又『ドレーピアの消息』(Draper's Letters)の作者である。之に就ては少し説明が要るから、可成簡略に其顛末を御話して見ると、斯うである。——一と頃、愛蘭土で銅貨が非常に拂底になつた事がある。商人は釣り銭を客に出す事が出来ない。客は又商人から釣り銭を取る譯に行かない。豆腐一丁にも銀貨を放り出して、見す／＼損をすると云ふ有様であつた。此機を利用してウード某と云ふ山師が、英國政府から銅貨鑄造の事業を受負つた。無論銅貨に缺乏を感じてゐる愛

蘭土は是が爲めに多大の便宜を感じる譯ではあるが、英國政府とウードの遣口が悪るかつた。英國政府は愛蘭土政府へ一言の直談もしなかつた。愛蘭土の議院は無論何事をも知らなかつた。それすら反抗の原因となるのは明らかであるに、此ウードなるものが自己の利益を計つて價值以下の銅錢を作つて、無暗に押し付け様とした。丁度天保錢を當百と號したと一般の狡技である。そこでスキフトはドレーピアと云ふ匿名で、第一消息、第二消息、第三消息と、しきりに英國政府攻撃の書翰を公けにした。第四消息に至つて、英國政府は遂にこらへ切れずに、懸賞迄してドレーピアの何人なるかを詮議し出した。スキフトは無論知らぬ顔をしてゐる。誰もスキフトがドレーピアと氣が付く者はない。所が誰一人其秘密を握つてゐた奴がある。これはスキフトが此消息を書いた時に、原稿を清書させた男で、實はスキフトの厨掌である。で、今はスキフトの性格の一端を、例を引いて御話しつゝある所だが、これからの例はスキフトと此厨掌の間に起つた出來事である。それは外でもない。ある時、此厨掌が何處かで酒を飲んで、酪酊の末、酔ひ潰れて仕舞つて、家へ歸らなかつた事がある。厨掌の身として、斯う云ふ始末で外泊するのは不體裁に極つてゐる。普通の場合、普通の主人ならば、たゞ置かないのは無論である。けれどもスキフトと此男とは前云つた通り特別の關係がある。もし事を荒立て様ものなら、厨掌の恨を買つて、自分の秘密を密告される恐れがある。此危険を冒しても正當の懲罰を敢てするか、又は自己の後難

を恐れて、穩便に事を済ますかによつて、スキフトの性格は少し窺へる譯である。スキフトは此時即座に厨掌を解雇した。其時の彼の言葉は *Do the worst you dare, sir* (出来るならどんな復讐でもして見ろ) であつた。彼れが *グナムリ嬢* (Miss Vanhornigh) に對する所作にも、之と似寄つた所がある。——以上の諸例を綜合して見ると、彼は非常な肝癢持である。肝癢を起すと、結果の如何を顧みず我意を通す人である。又人の下について屈從する事の嫌な男である。人に命令したがる男である。

三。同時に彼は單に私利私慾に耽るやうな劣等な我儘者では無い。彼がキルルート (Kilroot) の寺院を預つて百磅の俸給を得て居た時、サー、キリヤム、テンプルから再應の招聘を受けた。このキリヤム、テンプルは元自分の世話に成つた人ではあるが、或事情から疎遠に成つて、雙方とも心持を悪くして居る際であるから、スキフトの様な傲岸な負け嫌は随分我を通して折角の好意を謝絶しかねまじき所だが、彼は一寸した親切な動機からすぐ現職を抛つて仕舞つた。と云ふのは、一日彼が散歩をして居る際に不圖老年の貧窮な牧師に出逢つたところが、其人を見ると突然同情の念に堪へなくなつて、直に此老人を自分の代りにキルルートの教會へ推舉して置いて、自らはテンプルの方へ出かけて行つた。前に擧げた、自分の秘密文書を淨寫させたと云ふ、厨掌に就ても次の様な話がある。彼が怒つて此厨掌に暇を出したのは丁度『ドレーピアの消息』の作

者を知らせるものには三百磅の賞金を與へるといふ布告の出た當時である。然るにその厨掌は存外の正直者で、この誘惑を見事に切り抜けて、布告の時期が過去るまで舊主人の秘密を誰にも洩らさなかつた。そこでスキフトは彼を呼び戻して、遂には本山の役僧に登用した。いつ何日迄に密告すれば三百磅得られると云ふ布告の期限中は呼び戻さないで、わざ／＼それが済むのを待つて再び召し使ふ杯と云ふのは、彼の氣性の勝つた所を見るに足ると同時に、一方には彼が妄りに我儘を振舞ふ様な剛情一點張の男でないといふ事を明にして居る。彼は幼少の時から人の金で修業をした程あつて、非常な節儉家であつたが、それにも關せず、自己の財産を三分して、三分の一は常に慈善の目的に使用して居た。又五百磅の金子を貧乏な商人に貸す資金として別に收めて置いた。商人は之を借りて無利息で一週毎に返済する習慣に成つて居つたさうである。個人として斯かる義侠心もあり又慈悲心もあつた彼が、公人として愛蘭土の爲めに盡すに當つては、猶更私利私慾を離れた立派な愛國者であつた。然しこの方は彼が政治的生涯を述べる際に譲つて置く。四。彼は眞面目な問題でも冗談半分に取扱ふと云ふやうな男である。褒める時でも貶す様な事を云ふ男である。人の世話杯をする前には威したりなどする癖のある男である。彼は熱心なる宗教家で、又宗教家として自分の職分を怠るやうな人では無かつたけれども、この熱心なる職分の中へも折々滑稽を交へる。つまり性質がこんな性質なんで、機會さへあればどんな眞面目な席で

も悪戯が爲て見たくなるのである。彼がララカア(Laraco)と云ふ所で牧師の職を執つて居つた時分の或水曜日のこと、會衆は皆散じて残るは自分とロジャー(Roger)と云ふ書記ばかりと成つた後に、彼は厳格な顔をして立ち上つて、いきなり朝の勤行を始めから終り迄繰返して濟まして居たと云ふ話がある。

五。スキフトには病氣があつた。當人自身では之を胃病だと云つて居たが、兎に角其病氣のため生涯苦しめられた。今の人の考へでは、胃病ではない、腦の近傍を冒す一種の病氣だと云ふ事になつてゐる。これが晩年に及んで、失望や情人の死や憤懣や何や彼やと合併して、大いなる苦痛を彼に與へる様に成つた。又苦痛の無い時は、まるで白痴の如き状態に陥つたのみか、時々癲癇病の様な發作が來て、終に命を終ふるに至つたのである。或人は彼の知性は晩年まで慥かであつたと云ひ、或人は狂人であつたと云ふ。又或人は善惡を識別する力を具へ、行爲と結果とを連結する點に於ては平生の通りであるけれども、彼が言語の粗暴なることは充分精神病の徴候として認むるに足るなど云つてゐる。そんな事が今から分る譯のもので無い、が彼が健康の人でなかつた事實又は記憶して置きたい。

スコット(Scott)は彼の傳記中に次の様な事を書いて居る。

"From 1736, downward, the Dean's fits of periodical giddiness and deafness had returned with violence; he could neither enjoy conversation, nor amuse himself with writing; and an obstinate resolution which he had formed not to wear glasses, prevented him from reading. The following dismal letter to Mrs. Whiteway, in 1740, is almost the last document which we possess of the celebrated Swift, as a rational and reflecting being. It awfully foretells the catastrophe which shortly after took place." 〵〵聞其手紙を略す。"His understanding having totally failed soon after these melancholy expressions of grief and affection, his first state was that of violent and furious lunacy. From a state of outrageous frenzy, aggravated by severe bodily suffering, the illustrious Dean of St. Patrick's sunk into the situation of a helpless changeling. In the course of about three years, he is only known to have spoken once or twice. At length, when this awful moral lesson had subsisted from 1743, until the 19th October, 1745, it pleased God to release the subject of these Memoirs from this calamitous situation. He died upon that day without a single pang, so gently, indeed, that his attendants were scarce aware of the moment of his dissolution."

(一七三六年以降、副監督牧師が眩暈及び耳聾の發作は以前よりも一層激しい勢で戻つて來

た。最早人と會話することも出来なければ、物を書いて自ら娛しむことも慥はぬ。加ふるに如何しても眼鏡を掛けないと云ふ片意地な決心のために讀書すら出来ない。次に掲ぐるホワイトウエイ夫人に寄せた幽鬱な消息は、わが著名なるスキフトが理性の曇らず、省察の鈍らない間に筆を執つたものとしては、吾人の得らるべき最終のものであらう。この消息は其後間もなく起つた彼の悲惨なる最後の状況を恐ろしくも豫言してゐる。(その手紙を略す) 胸中の痛と愛惜の情とをこの消息に託して後、幾程もなく彼はその理性を根柢から失つて、激烈なる癲狂の徴候を示すに至つた。……肉體上の苦痛の爲めに更に甚しくなつた狂暴の状態の経過すると共に、あはれ我有名なる聖。パトリック寺の副監督牧師は小兒の如く便りなき症状に陥つた。それから三年の間、彼が口を利いたのは僅に一度か二度に過ぎないと傳へられて居る。かく怖るべき訓戒を一七四三年より一七四五年一〇月一九日まで與へた神は、終にこの小傳の主人公を慘澹たる境遇から救ひ出した。その日彼は何等の苦惱をも示さないで、眠るが如く瞑目した。其往生の安らかさは看護人でさへ殆ど何時息が絶えたとも知らない位であつた。

六。スキフトの名と關聯して離すべからざる婦人が二人ある。一人はエスサア、ジョンソン(Esther Johnson)と云つてスキフトがサー、キリヤム、テムブルの招聘に應じて、再び英國へ渡つた時に始めて出逢つた女である。この女は母親と共にテムブルの家に厄介に成て居たので、

スキフトは此女に書物其他の稽古をしてやつた。元より師弟の關係ではあるが、永らく然うして居る間には、一種の暖かい感情が二人の間に生じて來たのである。でテムブルの死後スキフトが故國へ戻ると、ジョンソンが男の跡を追ひかけて愛蘭土までやつて來た。スキフトは非常に注意深い男で、女が愛蘭土へ來てからも、第三者の居ない場所で二人逢ふ様なことは決して爲なかつた。かうして悪評の立つのを避けて居つたのである。一七一〇年に彼は再び英國へ渡つた。この時英國から愛蘭土に残したジョンソンの許へ文通をしたのが、有名なる『ステラへの日誌』(Journal to Stella)である。ステラのジョンソンを指したるものであることは云ふまでも無い。スキフトの一生を知らうと思ふ者は是非とも此日誌を材料とする必要がある。これは唯口から出任せに其日々の出來事を情人の所へ報知したもので、殆んど文學物とは云はれない位に自由な文體で書いてある。或人は之を評して、文學では無い、然し文學以上のものであると云つた。

一例を擧げると、――

“The post is just come from London, and just going out, so I have only time to pray to God to bless poor little MD, MD, MD, MD, MD, MD, MD, MD.”

(今倫敦から郵便物が着いた、愚圖々々してゐると出て行つて仕舞ふ。たゞ親愛なる小MDの幸福を神に祈る。早々擱筆。)

是はチエスタールと云ふ所から、郵便物發着の時間を利用して、ジョンソンに送つた手紙の一句である。句中にMDとあるのはスキフトの所謂小言語(a little language)で、Mはステラの事、Dはステラと同居してゐるデングレー(Dingley)の事である。他の手紙は殆んど倫敦發のもの許である。偕スキフトが倫敦に滞在してゐる間に又一人の女と親しくなつた。此女が前に一寸擧げたヴナムリで文學史上ではヴネツサ(Vanessa)として知られてゐる。スキフトは此時既に上流社會に出入して居つた。彼は才氣縱横機智座を動かすにたる好男子であつた。當時の淑女才媛は皆争つて彼が握手を求めた。ヴナムリ嬢も其一人である。この女は固よりスキフトとステラとの間に深い關係があらうとは夢にも知らなかつた。スキフトに接してゐるうちに、何時の間にか其妻に成りたいと云ふ考へを起して、其考が隠し切れぬ程切なくなつた。とうとう最後に自分の愛情を男に打明けた。其時スキフトは斯く迄ヴネツサの心を動かすに至らしめた彼の不注意を後悔したけれども及ばない。實の所は彼も大分この女に心を移したものと見えて、『ステラへの日誌』の中の或箇處は大分調子が違つて居る。

彼が愛蘭土へ歸ると同時にヴナムリも亦跡を慕つてダブリンへ來た。スキフトは今更の様に二人の名譽を思つて手を切らうとしたけれども、然うすれば女の狭い簡から何んな事を仕出來さないとも限らない。と云つて此方を満足させればステラの處分の附け様が無い。仕方がないから

スキフトはステラと結婚の儀式だけを擧げて、然も之を秘密にして置いた。これが一七一六年のことである。此結婚後彼は非常に憂鬱症に陥つて、しかもそは／＼落著かない様子であつたと云ふ評判がある。或人がダブリンの大僧正を訪ねた時、入れ違ひにスキフトが蒼い顔をして言葉も掛けずに出て行つた。で、其人が大僧正の前へ出るや否や大僧正は涙を流して、「今出て行つた男は世界中で一ばん不幸な男である、然し其理由は云へない」と云はれた相である。此時から彼は劇烈な頭痛に悩まされて、それが原因で漸次身體を壞して仕舞ふ様に成つた。又一方ではヴネツサが生ま殺しの境遇に堪へ切れなく成つて、遂に手紙をステラに送つて彼女とスキフトの關係を直接に確めた。ステラはスキフトの妻である事をヴネツサに對して公言すると同時に、スキフトの行爲を憤るの餘り、ヴネツサから送られた手紙を其儘、スキフトに廻送した。するとスキフトは例の肝癢を起した。すぐ様ヴネツサの許へ駈け附けて、其手紙を机の上に叩き附けたまゝ、一言も云はないで引き返した。ヴネツサは取上げて見て、自分がステラに送つた手紙が男の手に渡つた事を漸く知つた。この女は其後二三週間經て死んで仕舞つた。自ら死を招いたとも云へるし、又スキフトの爲に殺されたとも云へる。可哀相な最後である。ステラも名義上の結婚だけで我慢しなければならなかつたのみならず、それすらも終に公にすることが出來ないで、一七二七年に此世を去つた。

七、最後に彼が公けの経歴に就いて一言する。彼は當時の他の文人の如く文學者であると同時に政治家であつた。彼がボリンブローク (Bolingbroke) やオックスフォード伯爵と親密であつたことは人の知る所である。夫の有名なる『桶物語』(A Tale of a Tub) が皇后アン (Queen Anne) の怒に觸れて、一生榮達の機會を失つたのは人の知る所である。而も民黨が權勢を得て以來と云ふものは、益々昇進の途を塞がれたのである。そこで彼は遂に愛蘭土の愛國者として英國政府に反對する地位に立つた。いろ／＼の場合に様々な反抗の態度に出たが、それは必要で無いから略する事とするが、一口に云へば、當時の英國政府が愛蘭土に勝手次第な政令を布いて動ともすれば壓制を加へやうとする、其度毎にスキフトは起つて之に反對したのである。その最も顯著な例は前に御話した、『ドレーピアの消息』を草した時である。此消息は人民の上に非常な勢力を及したもので、凡ての商人はウードの鑄造にかゝる銅貨を一切受取らない、中にはこの銅貨鑄造の件には一切關係して居らんと廣告する者さへ出來た位である。これは一七二三年のことである。此時からスキフトは一躍して國民的英雄 (National Hero) と成つた。彼が英國から歸つた時などは人民が行列をして出迎へる、寺の鐘を撞くと云ふ大騒ぎをやつた。

で、以上擧げた彼の生涯に就て目ぼしい諸點を綜合して考へて見て、是等の一身上の經驗からして『桶物語』だの『ガリヴァー旅行記』だのと云ふ様な深酷な諷刺が出るであらうか、この様な

境遇に居る者は必然的にスキフトの如き深い厭世觀を抱く様に成るのであらうか。成ると云へば成るかも知んが、成らんでも濟むと云へば濟むとも云へる。(一)彼は幼少から他人の世話に成つた、大學に在學中は罰則に觸れてばかり居た。この様な事情は當人を厭世的に爲る原因とならん事もあるまいが、又必ずしもなるとも斷言しにくい。如何もさう斷言出来る程の大事件でも無さ相である。(二)彼の自尊心と剛情と我慢とは、失敗する度に不平を増長させる道具に成つたかも知れん。失敗して世の中が自分の思ふ通りに成らねば成らぬ程、不平を起す機會を形作るかも知れん。併し彼の失敗は彼の作物に顯はれたる厭世觀を正當と認め得る程に甚しいものではない。(三)彼は比較的潔白な男である、正しき人である、自分の利害を離れて常に公憤を抱いて居た人である。斯様な人が政治界などの内幕を見たらば不愉快を感じる人が多いに相違ない、日常見聞する事實に就いて氣に喰はぬことが多いに相違ない。一步進めば、浮世の人間といふものに愛想を盡かすかも知れない。(四)彼の傾才、彼の反語は天性である。従つて『ガリヴァー旅行記』の様な諷諭的の書き方は、假令彼が厭世的の傾向を帯びた人物で無かつたとしても、其天性に適ふた表現と云ふべきであらう。(五)彼の病氣は固より何であるか分らないが、この病氣が彼の人生觀に大影響を及ぼし得たと云ふことは、何人も疑ふことが出來るのである。(六)彼と二人の女との關係は必ずしも彼を厭世家にしなければならぬと云ふ程の出來事では無い。世の中には随分こ

んな關係を有する人がある。然も割合に平氣で居る。然し或人に取つては、矢張心意の上に陰鬱な結果を残しさうな出來事と云つても可い。(七)彼は公人として決して沈淪憾軻の極を盡くした人では無い。それどころか一介の書生を以て、單に自己の力量のみを便りとして聖パトリック寺の副監督牧師にまで成り上つた。副監督牧師以上に登れないのが残念かも知れぬが、それが爲めに世の中が厭に成る程人から残酷にも取扱はれては居らん、輕蔑もされて居らん。否自分の味方たる王黨は云ふまでもなく、敵方の民黨も彼を憚つて居た。才もなく學もなく名もなく道も知らぬ匹夫匹婦から輕蔑されたいざ知らず、彼は本國に在つて愛國家として國民的英雄として民衆の崇拜を受けて居た位のものである。若し公人としての彼の經歷に於て彼の厭世觀を深刻にすべき或物があつたとすれば、人類全體の腐敗と不正不義とに關する公憤であらうと思ふ。

儲是等の諸點を考へ合せて、彼の厭世觀を解釋して見ると、彼の厭世觀は滿更不思議とも思へない位には云へるだらう。彼の一身上の經驗が必然この厭世觀を生じたとは決して云はない。然し此所に與へられたる極めて辛辣な、極めて厭世的な文學がある。この與へられたる文學の由て來つた原因を索ねて、其の著者の一身上の經驗を研究した時に、少々でも之を生ずるに足ると認めらるゝ事情が有るならば、是等の事情も其原因の一部を構成して居るかも知れぬ位には受取つて然るべきである。或人は最愛の妻を失つて厭世的に成つた。又或人は同様の場合に遭遇しても

別段心意の上に異常な結果を生じない。して見ると最愛の妻を失ふと云ふ事實が必ずしも厭世的傾向を生ずるとは云へない。——これは云ふ迄も無いけれども、話を逆にして茲に厭世的の人があるとする。而も其人が愛人を失つたと云ふ過去の歴史を有するならば、この歴史が其厭世の全部若しくは一部の原因に爲つて居るかも知れぬと云ふことだけは、慥かに言ひ得られるのである。吾人はスキフトの厭世的傾向を見て、どうも十八世紀一般の思潮に伴へるもので無いと判定した。既に時代思潮の影響で無いとすれば、其人の人格又は一身上の經驗から來たものだらうと鑑定を下して見た。そこで多少其一生を研究して見たところが、或は是等が原因に成りはせぬかと思はれるやうな五六項の事實を得たのである。勿論確と論斷の出來るものは一つも無いが、何れも多少の參考には成るであらう。其中で最も有力だと思はれるのは、彼が肉體上に病的であつたと云ふ一項である。

儲てこれ迄の講義で、彼が厭世的傾向の出所も先づ一通り研究して見た積である。其結果が積極的でも消極的でも仕方がない。兎に角相應の手續を盡したのだから、是より其厭世主義とは果して何んなものであらう、又其所謂諷刺なるものは文學的に何の位の價值があるものだらう。

——それを論じて見たいと思ふ。

スキフトの諷刺家として後世に認められるのは、第一に『ガリヴァー旅行記』の爲である。下つ

ては『桶物語』の爲である。彼の諷刺の特色を知るには、此二書を取つて吟味して見るのが一番好い。然しながら其前に一寸注意して置く事がある。人に依ると生涯の中に一冊か二冊諷刺的の物を書いた丈で、其他の作品には一向此方面を顯はして居ないことがある、又顯はさないでも済むことである。だから、今スウィフトの場合でも、前の二書が際立つて有名な所から、或は下の様な誤解を生ずるかも知れぬ。——成程スウィフトは諷刺的天才かも知れない。かれの『ガリヴァー旅行記』や『桶物語』を讀めば、さうかと首肯されぬでもない。然し其他の作品の上に於ても、矢張り諷刺家として、同様の態度で、筆を執つたとも限るまい。彼は其諷刺の才を此二書に残りなく發揮して、あとは存外眞面目な述作に従事したのではあるまいか。——かう解釋して仕舞ふと、スウィフトの諷刺評價が大分違つて来る。成程彼の書いたものうちにも、稀には正面から堂々と陣を張つて出るのがある。然し其諷刺は決して此二書にのみ現はれて居るのではない。諷刺は彼の天性とも云ふべき傾向で、苟も彼の筆に上る人事は問題の如何に係らず、大抵この傾向を帯びて居る。『愛蘭土に於ける貧家の兒女を有用ならしめんとする卑見』(A Modest Proposal for Utilising the Children of Poor People in Ireland)、『ユカアスタッフに關する書類』(The "Bickerstaff" Papers)、『僕婢への注意』(Directions to Servants)等の如き孰れも諷刺的の作物である。

それで斯う云ふ事が解る。スウィフトは世の中を見ても、人間を見ても、誰を見ても彼を見ても、皆諷刺的に見て仕舞ふ人である。彼の諷刺は一時的の態度でなくて、彼の一生を貫いた、牢として抜くべからざる生來の性癖である。世の中には随分物事を滑稽にも、莊重にも、平靜にも、又優美にも見ることの出来る、多方面多趣味な人がある。これは一様に滿遍なく發達した人である。又通常の人でも時に依て笑ふこともある、怒ることもある、當て擦りや皮肉を云ふこともある。これが普通の人の心的状態の推移である。然るにスウィフトに至つては、何時でも一定不變の態度を以て物を見て居る。何時でも不満足と云ふ消極的の態度を取つてゐて、而も其表現は必ず裏から来る、決して正面からは出掛けない。彼は此態度以外には殆ど出ることが出来なかつたのである。従て此方面は他人の及ぶ能はざる迄に發達して居る。盲人が視覺の無いために觸覺が著しく發達する様に、彼は他の立脚地を知らない爲めに、自分の立つて居る地盤だけは一手販賣とも云ふべき程に進歩して居る。一言にして云へば、彼は此種の表現に於て天才であると云ふことになる。だから諷刺的態度はスウィフト自身に存するので、『ガリヴァー旅行記』や『桶物語』に存するのでは無い。余が特に二書を取つて其諷刺的内容を論じやうとするのは、唯例として論ずるのである。唯之をスウィフトの諷刺的態度の標準にすると云ふ迄である。それで『ガリヴァー旅行記』と『桶物語』との批評に入る前に、一應其梗概を述べる。二書を御讀了の諸君には御迷惑だらうか

ら、此講義に必要な程度の極めて簡単な梗概にとめて置く積である。

『桶物語』(A Tale of a Tub)の梗概。これは前に述べた如く一七〇四年に出版したものであるが、實はそれよりすつと前、彼がダブリン市のトリニティ、カレツヂに居た間、若しくは一六九二年始めて愛蘭土を出てサー、キリヤム、テムブルの家に寄寓した頃に出來たものだと思ふ話である。こんな若い時分、即ち世の中の苦痛を能くも味はず、従て人間に愛想を盡かしたと思はれない時分、又ステラやヴェツサの様な關係が生じない前からして、既にこんな著述をやつて居たことから推斷して見ても、「彼の諷刺的態度は天性である」と云ふ、今話した命題を證明するに足ると思ふ。それから色々な世の中の經驗を嘗めて、益この態度が固定したものに成つた傾きはあるかも知れぬが、是が彼の特色である、持つて生れた性質であると云ふことは明白の様に思はれる。

『桶物語』は妙な表題であるが、何故こんな名を附けたかと云ふと、彼は自序に其由來を辯じて居る。曰く、近頃の様に所謂才人(wits)なる者が續々輩出して、宗教や政治の缺點を搜し廻つて無暗に攻撃ばかりして居る様では困る。何うかして之を防遏する方法はあるまいかと、其筋では色々心配になつた。——其先は原文で引用する。

"To this end, at a grand committee some days ago, this important discovery was made by a certain curious and refined observer: that seamen have a custom, when they meet a whale, to fling him out an empty tub by way of amusement, to divert him from laying violent hands upon the ship. This parable was immediately mythologised; the whale was interpreted to be Hobbes' Leviathan, which tosses and plays with all schemes of religion and government, whereof a great many are hollow, and dry, and empty, and noisy, and wooden, and given to rotation: this is the Leviathan, from which the terrible wits of our age are said to borrow their weapons. The ship in danger is easily understood to be its old antitype, the commonwealth. But how to analyse the tub, was a matter of difficulty; when, after long inquiry and debate, the literal meaning was preserved; and it was decreed, that in order to prevent these Leviathans from tossing and sporting with the commonwealth, which of itself is too apt to fluctuate, they should be diverted from that game by a Tale of a Tub. And, my genius being conceived to lie not unhappily that way, I had the honour done me to be engaged in the performance."—*The Author's Preface.*

(此間委員大會の席上で、或る物好きで細緻な觀察家が、此目的に應じて次の様な大發見を

やつた。船乗りが鯨に出合ふと轉覆の虞を免かれる爲めに、空の桶を玩具として鯨に投げてやる習慣がある。と云ふので、此比喻を直ちに神話にして仕舞つた。先づ鯨をホッブスの『大鯨』と解釋する。此『大鯨』(ホッブスの著書の名)は宗教、政治二門の施設を捉へて、自由自在に翻弄する。尤も其施設中には、空虚で、枯れ朽ちて、實がなくつて、騒々しくつて、馬鹿氣てゐて、動ともするとぐらつきたがるのが多い。此『大鯨』こそ恐るべき現代の才人どもの武器を借り來る源である。それから危険の心配のある船は昔しの型通り國民である。たゞ桶に至つては何と解いて可いやら分らん。それに就いては、長い間研究もしたし、議論もしたが、要するに桶は桶として置かうと云ふ事に極つた。それから、是等の小鯨共が、たゞでさへ搖きたがる國民を、御もぢやにしたり、翻弄したりする憂のない様に、『桶物語』をあてがつて、氣を紛ぎらさうと云ふ事になつた。幸ひ自分はこんな事にかけてと器用だと云ふ所から、遂に其御役目を仰せ付けられる榮譽を荷ふに至つた。

これが表向此物語を書いた主意になつてゐる。偕て其話の筋はといふに、先づ斯うである。或人に三人の伴があつた。其人が死ぬ間際に此三人の息子呼んで、自分には財産が無いから讓つてやる物は何も無い。唯こゝに新しい上衣がある。この上衣は旨く使ひさへすれば、何日迄も擦り切れると云ふ憂がない、又お前達が生長するに従て着物も生長する至極重寶なものだから、之

を遣らうと云ふ。それから三人が上衣を受取つて、各々町へ出て、いろ／＼な事業に取り掛る。兄のピーター(Peter)は長老ピーターとかピーター卿とか稱して大に威張る。其の上、様々な嘘を吐く。遂には二人の弟を追ひ出す。追ひ出された兄弟は父の遺言通りに上衣の改革(Reform)を遣らうと決心する。一人はマーチン(Martin)と號し、一人はジャック(Jack)と名乗る。マーチンが注意して上衣を修復(改革)するに引易へて、ジャックは滅茶々に引裂いて仕舞ふ。何うしても氣風の合はぬ所から、提携を止めて別々に成る。ジャックとピーターとは大喧嘩を遣る。マーチンは北の方で成功する。ピーターはマーチンの爲に自己の收入を奪はれたと云つて非常に憤る。最後にマーチンが外國人を呼び込んで、元の地主を追ひ出す。新に地主と成つた外國人はマーチンの權利を元の如く回復してやると同時にジャックをも驅逐しなかつた。ジャックは北方で誰憚らず幅を利かして居る。

唯是だけである。これ丈では一向詰らん、何處に文學的價值があるのか又全體何の意味であるか、一向要領を得ん。で、解釋家の説に従ふと是は諷諭である。父が與へたと云ふ上衣は基督教の信仰と教理との衣服で、又神の宗祖の智慧で、凡ての時、凡ての場所と場合とに當て嵌まるものを表はしたのだと云ふ。三人の兄弟の中でピーターと云ふのは天主教(Popery)のこと、マーチンは英國教會(Church of England)のことである。それからジャックは非國教徒(Protestant

Disenters)を意味して居る。すると此『桶物語』なるものは長い諷諭である。即ち教會の歴史を個人の歴史に引直したものである。偕て此處で一の議論が出る。去年の講義の中にも述べて置いたごとく記憶するが、今又此機會を利用して、参考の爲に卑見を陳じやうと思ふ。それも前の所論を再び繰返へす必要は無い。多少關係はあるけれども、別の方面から出立して見たいと思ふ。諷諭(allegory)なるものは修辭學者に云はせたら艱かしい定義を下すかも知れんが、兎に角、或物を他の物で比喩的に表はす方法である。又其物に就ての出來事の序列(the course of events)を矢張り比喩的に他の一組の出來事の序列(another course of events)で表はす方法である。或は方法の一種であると云ふ方が可いかも知れん。この比喩的に物を表現すると云ふことが文學上頗る大切なのは、云ふ迄もないが、私は先づこれを大體三種に區別することが出来るかと思ふ。

(一)は甲を乙で表現する時に感じが好くなるもの、言ひ換ふれば甲と云ふものが乙の辭で表はされたる時に、吾人が感情の上から甲を理解することの出来るもの。例へば美人の悄然として居る容子を花の凋んだのに比するのは、兩者の間に感情の類似があるからで、片方を片方で感情の上から理解する便りになる。極端の例を云ふと、色を以て聲を形容する様なもので、感情以外に兩者の間に一點の似た所も無い。(二)は感情よりも智力に訴ふる比較。例へば人間は蒸汽機關の如しと云ふ様なものである。別段それに伴ふ感じの似た所は無い。然らば何故に此兩者を比較す

るかと聞いた時、兩つながら火を焚かなければ活動しないと云はれて成程と頷く。成程と頷くのは感じが似て居ると云ふよりも、智的に兩者の似た所を發見したからである。(三)は專擅的な比較で、智的にも情的にも似た所は無いけれども、たゞこれを此代りにするから左様思へと云ふに過ぎるのである。例へば人間を以て「時」を表はしたり、日本と云ふ國を女で示す様なもので、恰も代數でaが十の代りに成り、bが二十の代りになるのと同じ事である。是は單なる約束であつて、兩者の間に別段感じの似た所も無ければ、又理由も認められない、唯勝手に極めたものである。

今天主教をピーターと云ふ個人で表はし、英國教會をマーチンで表はし、其他非國教徒をジャックで表はすのは、以上の三者の中何れに屬するかと云ふに、勿論專擅的な比較に屬するものと云はなければならぬ。尤もピーターと云へば聖ピーター(Sr. Peter)と同名であり、マーチンはルーテル(Luther)、ジャックはジョン、カルギン(John Calvin)の名に相違ないが、其以外には智的にも情的にも原物を想ひ出す手引になるものは無い。是だけでは但斯う云ふ風に極めたと傳へるのみで、成程道理だと合點せらるゝ點は無いのである。次に親父が此三人に形見として新しい上衣を與へるが、この爺は何だか分らない。又この上衣は用ひ様で何日迄も新しいばかりで無く、自分の脊文が延びるに従つて着物の丈も次第に延びて來るんだと云ふが、この上衣が何者か

分らない。此親父が神の宗祖で、此上衣が基督教の教理と信仰に當ると云ふことは、情の上からは勿論のこと、智に訴へても分る筈はない。全く專擅的な比較だと云はねばならぬ。

偕この專擅的な三つの比較を理解する爲には、始めから説明を求めるか、左もなければ其話を一應通讀して考へた上に判斷するより外に仕方が無い。スウィフトは自から説明を加へて居らんが、後世の註釋家が考へた上で説明をして呉れるから、吾人は『桶物語』を讀む時に先づこの説明を聽いて、此三者は何を表はして居る者か、豫め承知してからかゝる。然うするとピーターの遣つた事は天主教の仕業であり、マーチンは英國教會の歴史であり、ジャックは非國教徒を代表すると云ふことが智的に了解される。智的に了解されると云ふ意味は、ピーターが威張るのを見て、羅馬法王の專横と解釋する。ジャックが衣服を引裂くのを見て、清教徒の様な凡ての裝飾を取去ることに想ひ到る。つまり此三人の遣る事からして教會の歴史に於ける並行線的の出來事を考へ出すのである。それだから『桶物語』の諷諭なるものは、文學的に價値を判斷することに成ると、智的價値あるのみで情的の價値は無いと云ふても差支へない。次には智的價値があるとしても、此諷諭を理解するためには、吾人は豫め教會の歴史を知らねばならぬ。歴史を讀む位な教育のある者は一通り教會の歴史を辨へなければなるまいけれども、然しながら人間として必然知らなければならぬと云ふ程の知識では無い。宗教史を知らなくても教育のある人でもあり得るし、又文

學趣味を有する人でもあり得る。ところが此宗教史上の知識が無いと、この書の諷諭は殆ど無意味で、智的にも何を云つて居るのが殆んど解し難いものに成る。従て之を欣賞し得る讀者は、多くの人間の中で宗教史を知る者、若しくは之に興味を有する者と云ふ條件がついて來る。からして此書の訴ふる讀者の範圍は自ら限られなければならぬ。

縦しや宗教史を知る者と雖、スウィフトの企圖せる様に解釋が出来るか如何か疑はしい。と云ふものは此處に一つの出來事の序列があつて、其れに並行する序列を求めやうとする時は、事實の上にて又は想像の上にて、其序列は幾組も出来るのである。例へば今舉げた親讓りの上衣でも、必ずしも基督教の教理及び信仰に取れるとは限らない。眞理を表はすものと解釋しても宜しい、又は最高善を表はすものと解釋することも出來やう。或は吾人の精神とか靈魂とか云ふ様なものを表はすと見做しても差支へない。して見ると此一篇の物語を教會の歴史の諷諭と解釋するのは絶對的に必要と云ふわけで無くなつて來る。然うなると此書の諷諭は諷諭として價値を失つて仕舞ふ。少く共スウィフトの企圖した様な價値が無くなつて仕舞ふ。

最後に最重要な事柄がある。この諷諭はイソップの寓話の様に、嘘は吐くものでないとか、無暗に慾張つてはならぬとか云ふ、抽象的の眞理を比喩的に表したものは大に趣が違ふ。何故かと云ふに、教會の歴史は既に事實として發展したものである。如何なスウィフトでも既に與へられ

たる事實を如何ともする事は出来ない。従てこの諷諭たるや、或事實、曲ぐべからざる事實を比喩的に表はさうとするのである。従つて又比喩其ものを事實に密接に引着けて行く必要が生ずる。それで事實に並行する比喩は作者の自由には成らないで、却て事實のために大束縛を受けねばならぬ。だからして又諷諭の或部分は文學的で無いから少し易へやうと思つても、自分の自由に事實を捏造して勝手な事を書き込む譯に行かない。假令文學的でないと思つても其處は已むを得ん、先づ教會の歴史に斯うあるのだから、諷諭の方でも枉げて其通りに行かなくてはならぬのである。そこでスキフトは此困難を那樣どうかに切抜けたらうかと云ふ問題が起る。

緒て此問題を胸裡に置いて『桶物語』を批評的に讀んで行くと、苦心の痕が一々明に指摘せられる。他人は何う感ずるか知らん。殊に西洋人は今迄褒めるだけで悪口を云つた者は無い様であるけれども、余の見る所では此作は實際この不利益の下に立つて大に苦しんで居るとしか見えぬのである。其例證は幾らでもあるが、試みに一つだけ擧げて見やう。第六章にピーターが親から譲り受けた衣服を自分の嗜好通りに變化したことを敘して、こんな風に書いてある。

"I ought in method to have informed the reader, about fifty pages ago, of a fancy lord Peter took, and infused into his brothers, to wear on their coats whatever trimmings came up in fashion, never pulling off any as they went out of the mode,

but keeping on all together; which amounted in time to a medley the most antic you can possibly conceive; and this to such a degree, that upon the time of their falling out there was hardly a thread of the original coat to be seen: but an infinite quantity of lace, and ribbons, and fringe, and embroidery, and points; I mean only those tagged with silver, for the rest fell off."—Sec. vi.

(予は順序から云へば五十頁許り前の所で、次の様な事を讀者に報告すべきであつた。それは外でも無い、ピーター卿の想ひ附きで、弟どもにも云ひ含めた事であるが、何でも流行の裝飾は悉く上衣の上に著ける。而も一度着けた以上は縦令流行が廢らうが決して取去る様な事はしない、何日まで皆一緒にごたくと着けて居やうと云ふ事であつた。月日の經つに伴れて、これが積つて殆んど想像にも餘る位な雜然異様のみなりの身形になつた。三人の兄弟が喧嘩をして別れる頃は、一面に無数の笹縁や絹紐や、縫だの縫箔だの乃至レースだので蔽はれて、元の上衣の地は絲一筋も見られない位であつた。尤も其時分まで残つて居た裝飾は皆銀の金具で留められたものばかりで、他はそれ迄に剝落し去つたのである。)

之を諷諭で無いものとして、單にそれ丈を味はつて見ると何等の感興も湧かない。ヒューモアにもキツトにもならない。全く不合理不自然な所作しよさとして眼に映ずる丈である。たゞこれが羅馬

教會で妄りに儀典を喧ましく云ふことや、又は教會に金の集まる様な教理ばかりを保存するに努めたことなどを比喩的に述べたものだと理解し得た時に、始めて多少の興味を感じ得るのである。これとても唯智的に其處へ到着するのであるからして、其興味たるや、僅に謎を旨く解いた時位の快樂しか無いのである。單にそれ丈の快樂では餘りに低く且つは淡きに過ぎる。文學的には云はれるかも知れぬが、甚だ稀薄な心細い興味である。元々諷諭が本義であるから比喩が旨く原物に當てはまる様に出來て居ることは必要條件かも知れぬが、比喩そのものが、原物から獨立して單獨に味はれる時ですらも文學的に感興を催ふし得るならば、夫丈の成功に違ない。私の文學的であれと云ふのは一又は他の意味、即ち極めて廣い範圍のどこか一角に觸れて、面白くあれと云ふことである。今の續きをも、少し讀んで兄弟の上衣を繕ふ所を見ると此點が明瞭になる。

“They both unanimously entered upon this great work, looking sometimes on their coats, and sometimes on the will. Martin laid the first hand; at one twitch brought off a large handful of points; and, with a second pull, stripped away ten dozen yards of fringe. But when he had gone thus far, he demurred a while: …… Then he fell about the embroidered Indian figures of men, women, and children; against which as you have heard in its due place, their father's testament was extremely exact and

severe: these, with much dexterity and application, were, after a while, quite eradicated or utterly defaced.”—Sec. vi.

(二人の弟は力を協せて、時には自分達の上衣を眺め、又時には父の遺言を繰り返へしながら、この大事業(上衣の修復——宗教改革)に従事した。最初手を下したものはマーチンである、第一には先づ掌に餘る程のレースを取去つた。次には絹縫の縁を百二十碼ばかり引剝した。ここまで遣附けた時に彼は暫らく躊躇した云々。それから彼は男、女、小兒などを畫にした印度風の繡模様^に手を着けた。(聖徒崇拜の廢棄を指す。)これは前へにも述べた如く父の遺言中に事細かに嚴禁された模様である。マーチンは一生懸命になつて、とうとう手際よくこれ等の裝飾を削り取るか又は消し去つて仕舞つた。)

此一節を見ても、宗教改革と云ふ事實に無理やりに引き附けて、比喩を作つた痕迹は歴然たるものである。宗教改革を説明する爲の比喩としては成功して居るかも知れないが、比喩のみを單獨に評し去ると、少しも面白くない。土臺活動して居らん。それなら何う書いたら可いか、單獨に見ても面白い、あなたの所謂文學的に價值のある比喩とはどんなものかと云ふ質問が出るかも知れない。同じく『桶物語』の一節を引用すれば此質問に應ずる事が出來やうと思ふ。

“Dining one day at an alderman's in the city, Peter observed him expatiating, after

the manner of his brethren, in the praises of his sirloin of beef. 'Beef,' said the sage magistrate, 'is the king of meat; beef comprehends in it the quintessence of partridge, and quail, and venison, and pheasant, and plum-pudding, and custard.' When Peter came home he would needs take the fancy of cooking up this doctrine into use, and apply the precept, in default of a sirloin, to his brown loaf. 'Bread,' says he, 'dear brothers, is the staff of life; in which bread is contained, *inclusivè*, the quintessence of beef, mutton, veal, venison, partridge, plum-pudding, and custard; and, to render all complete, there is intermingled a due quantity of water, whose crudities are also corrected by yeast or barm, through which means it becomes a wholesome fermented liquor, diffused through the mass of the bread.' Upon the strength of these conclusions, next day at dinner, was the brown loaf served up in all the formality of a city feast. 'Come, brothers,' said Peter, 'fall to, and spare not; here is excellent good mutton; or hold, now my hand is in, I will help you.' At which word, in much ceremony, with fork and knife he carves out two good slices of a loaf, and presents each on a plate to his brothers. The elder of the two, not suddenly entering in, Lord Peter's

conceit, began with very civil language to examine the mystery. 'My lord,' said he, 'I doubt, with great submission, there may be some mistake.' 'What,' says Peter, 'you are pleasant; come then, let us hear this jest your head is so big with.' 'None in the world, my lord; but, unless I am very much deceived, your lordship was pleased a while ago to let fall a word about mutton, and I would be glad to see it with all my heart.' 'How,' said Peter, appearing in great surprise, 'I do not comprehend this at all.' Upon which the younger interposing to set the business aright, 'My lord,' said he, 'my brother I suppose is hungry, and longs for the mutton your lordship has promised us to dinner.' 'Pray,' said Peter, 'take me along with you; either you are both mad, or disposed to be merrier than I approve of; if you there do not like your piece I will carve you another; though I should take that to be the choice bit of the whole shoulder.' 'What then, my lord,' replied the first, 'it seems this is a shoulder of mutton all this while?' 'Pray, sir,' says Peter, 'eat your victuals, and leave off your impertinence, if you please, for I am not disposed to relish it at present.' But the other could not forbear, being over-provoked at the affected seriousness of Peter's

countenance: 'By G—, my lord,' said he, 'I can only say, that to my eyes, and fingers, and teeth, and nose, it seems to be nothing but a crust of bread.' Upon which the second put in his word: 'I never saw a piece of mutton in my life so nearly resembling a slice from a twelvepenny loaf.' 'Look ye, gentlemen,' cries Peter, in a rage; 'to convince you what a couple of blind, positive, ignorant, wilful puppies you are, I will use but this plain argument: by G—, it is true, good, natural mutton as any in Leadenhall-market; and G— confound you both eternally if you offer to believe otherwise.' Such a thundering proof as this left no farther room for objection; the two unbelievers began to gather and pocket up their mistake as hastily as they could. 'Why, truly,' said the first, 'upon more mature consideration—' 'Ay,' says the other, interrupting him, 'now I have thought better on the thing, your lordship seems to have a great deal of reason.' 'Very well,' said Peter; 'here, boy, fill me a beer-glass of claret; here's to you both with all my heart.' The two brethren, much delighted to see him so readily appeased, returned their most humble thanks, and said they would be glad to pledge his lordship. 'That you shall,' said Peter; 'I am not a person to refuse

you anything that is reasonable; wine, moderately taken, is a cordial; here is a glass a-piece for you; it is true natural juice from the grape, none of your d—d vintner's brewings.' Having spoke thus, he presented to each of them another large dry crust, bidding them drink it off, and not be bashful, for it would do them no hurt."—Sec.

iv.

(一日ピーターは市の助役の所で御馳走になつたが、此助役は弟共と同じ様に、しきりに牛の腰肉を賞め出した。賢明なる助役の言によると、「牛は肉中の王である。牛は鷓鴣、鶉、鹿、雉、を始めとして、ブツデング及びカスタードの精分迄悉く含んでゐる。」ピーターは家へ歸つてから、此論法を捏ね上げて、腰肉がないから、黒麵麩にでも應用してやらうと考へ出した。それで弟を呼んで斯う云つた。「麵麩は命の本だ。麵麩のなかには麵麩があるばかりではない。牛、羊、犢、鹿、鷓鴣、ブツデング、カスタードの精分がすつかり這入つてゐる。のみならず、適當な水分さへあるから完全無缺なものだ。しかも其水分は通例の水つぽいものではない。麩をうまく混ぜて醗酵させて、結構な液體にして、それを麵麩の中に一面に浸み込ましてある。」此結論に従つて、翌日の午餐には、恰も市の正饗よろしくと云ふ仰山極まる儀式を用ひて、黒麵麩を膳に供した。ピーターは云ふ。「さあ始めるが可い。遠慮なしにどしどし遣つて呉れ。

は兄のいやに取済して眞面目腐つてゐる顔付を見て、我慢が出来なくなつた。一寸舌打ちをして、「私には眼で見ても、指で觸つても、齒で噛んでも、鼻で嗅いでも、唯の麵麩の缺片かかけらとしか思はれません」と言ひ切つた。すると次の弟も斯う云つた。「私も今迄こんな十二片志の麵麩の缺片かかけらに似た羊肉を見た事がない」「氣を付けろ」とピーターは眞赤になつて怒鳴りつけた。「貴様等は盲目めくらの癖に剛情な、分らず屋の、頑固な犬だ。知らなければ云つて聞かせてやる。是はな、本當の、眞正銘の、特別上等の羊肉だ。レズンホールへ買ひ出しに行つたつて、是より善いのあるものか。羊肉でない杯とは怪しからん。間拔め。」かう逆鱗で羊肉だと主張する以上は、もはや反抗の餘地がない。二人の不信者は早々自分の過誤をポケットの中へ仕舞ひ込んでしまつた。「成程、善く考へて見ます」と年上の弟が云ひ出した。すると若い方も途中で兄を遮つて、「さう。考へ直して見ると、如何にも御尤だ」と云つた。「それで宜し」とピーターが答へた。「おい、赤葡萄酒を洋盃コップへ一杯注いで呉れ。おい、御前等の爲めに祝盃だ。」兩人は兄の機嫌が急によくなつたのを見て大に喜んで、厚く禮を述べた。さうして、どうか自分達も殿様の爲に一盞祝ひたいものだとし出した。「宜しい。飲むが好からう。相當な願なら何でも聞届けてやる。酒も量を過しさへしなければ藥だ。さあ、一杯づゝ。是りや本當の酒だよ。本當の葡萄酒の汁だ。下等な酒屋杯で拵えたものとは譯が違ふ」と云ひながら、二

中々旨さうな羊肉だ。いや手が塞がつてゐるから一寸待つて呉れ。今ちきに取て遣る。」斯う云ひながら如何にも勿體振つた手付で、肉叉と肉刀とを取り上げたが、やがて麵麩を大きく二片切り取つて、皿に載せて二人の弟の前へ出した。年長の弟はピーターの思はくが急に解せないので、恐る／＼此秘密に探りを入れた。「殿様」と極めて丁寧な言葉使で、「私は何うもそこん所にか間違がある様に考へますが」「何だつて」とピーターが云ひ出した。「冗談云つちや不可ん。然し夫程に云ひたい洒落なら聞いても可い。どんな面白い話かね」「いえ、決して洒落どころではないので、——實は先つき伺ひますと、何か羊肉をどうか仰やつたかとも存じますが、なんなら何うか、それを一つ是非頂戴したいもので」「へえ、そりや」とピーターは吃驚したと云ふ外見で、「御前の云ふ事は何だか薩張り分らないね。」此時年若の弟は羊肉事件の始末を付け様といふ考で口を出した。「殿様、この兄は察する所ひも飢しいので御座ります。貴方が喰はしてやると仰しやつた羊が早く頂きたいのでせう」「どうも解せんな。ちと分る様に口を聞くが可い。御前達は少し氣が可笑しい様だ。でないとしても、餘りハシヤギ過ぎるよ。その切り身が氣に入らなければ、外のと代へてやらう。その所が一番旨いんだがな。」すると年上の弟が答辯をした。「ぢや、是がその羊肉なんですな」「さあ／＼御上り」とピーターが云ふ。「冗談は可い加減にして貰はう。冗談を面白がつてゐられる時ぢやない。」然し相手の弟

人の弟に又大きなばさ／＼した麵麩の片すけを一ツ宛呉れた。「さあ、遠慮なしに飲むが可い、毒にはならない。」

是は疑もなく化體説の教理 (Doctrine of Transubstantiation) を愚弄したる諷諭である。諷諭としても巧妙なものであらうが、それと離れて單獨に此文章を評しても、汁氣がある。ヒューモアがある。ピーターが助役の説を真似て、麵麩は何でも含んで居るものだと勝手に、猛烈に極めて仕舞ふ所に充分滑稽の趣味がある。それから二人の弟を無體に壓制する所から、弟が始めの間は抵抗したが漸々無理に服従する容子迄、全體に生氣がある。まづ其面目が躍然と顯はれて居るにちかい。假令諷諭としなくてもこれ丈で充分面白いのである。

偕てこゝに擧げた二つの反對した例からして、諷諭の興味は二様だと云ふことが解つた。一は地の文自身が文學的で面白いこと、一は地の文の裏面に潜む本意と表面にあらはれた意味との間に並行を見出すことの面白味である。然るに後者だけの興味では一向吾人に満足を與へない。夫から受ける興味は頗る薄弱なものである。世の中には文章を褒めるに寓意があるとか假托があるとか云つて、それが非常な文學的の技巧の様に心得て居る者があるけれども、それは云ふ迄もなく間違つて居る。勿論寓意とか假托とかの性質にも依るのは當然であるが、今述べて居る種類の諷諭の如きものは、單に諷諭である。比喩的に、寓意と表面の意味とが比例を保つて書きこなされてあると云ふ丈である。それ丈では器械的の象徵主義と一般である。作者自身で呑み込んでゐれば濟む事である。

猶一步進んで論ずれば、單に諷諭であるが爲めに價値を認められるものと、比喩としては殆ど價値を認められないが、文學的に見て單獨に價値を有するものとの優劣は如何であらうか。これも實例に就て比較して見るのが一番早分りである。『桶物語』の中の三人の兄弟が親から新しい上衣を貰つて、始めて都會へ出て來た時の様子をスキフトはこんな風に書いて居る。

“On their first appearance our three adventurers met with a very bad reception; and soon with great sagacity guessing out the reason, they quickly began to improve in the good qualities of the town: they writ, and rallied, and rhymed, and sung, and said, and said nothing; they drank, and fought, and whored, and slept, and swore, and took snuff; they went to new plays on the first night, haunted the chocolate-houses, beat the watch, lay on bulks, and got claps; they bilked hackney coachmen, ran in debt with shopkeepers, and lay with their wives; they killed bailiffs, kried fiddlers down stairs, eat at Lockett's, loitered at Will's; they talked of the drawing-room, and never came there; dined with lords they never saw; whispered a duchess, and

spoke never a word; exposed the scrawls of their laundress for billets-doux of quality; came ever just from court, and were never seen in it; attended the levee *sub divo*; got a list of peers by heart in one company, and with great familiarity retailed them in another. Above all, they constantly attended those committees of senators who are silent in the house, and loud in the coffee-house, where they nightly adjourn to chew the cud of politics, and are encompassed with a ring of disciples, who lie in wait to catch up their droppings. The three brothers had acquired forty other qualifications of the like stamp, too tedious to recount, and by consequence were justly reckoned the most accomplished persons in the town; but all would not suffice, and the ladies aforesaid continued still inflexible." — See. ii.

(初めて出て来た時は三人共随分酷い待遇を受けたものであつたが、元來伶俐な若者どもの事であるから、直に其理由を見て取つて、早くも氣の利いた都會の風俗に倣つて身邊の改良を計つた。文章を書いた。巫山戯た。詩も作つた。歌も唄つた。饒舌りもした。黙りもした。酒も飲んだ。決闘もした。女郎買もした。寐た。悪體を吐いた。嗅煙草を嗅いだ。芝居が開くと必ず初日に行つた。チョコレート店へ入り浸つた。番太郎を擲つた。屋臺店の上へ寐た。寐病

に罹つた。辻馬車の馭者を瞞した。商人に借金を拵へた。其女房と姦通した。執達吏を殺した。提琴弾きを二階から蹴落した。ロケット樓で飯を食つた。ウイル軒でぶら／＼してゐた。一度も呼れた事のない内へ、度々呼ばれて行つたり、まだ逢つた事もない貴族と屢會食をしたり、まだ一言も言葉を交はした事のない公爵夫人と耳打ちをしたり、洗濯屋の唐様かぢやうを由ある人の艶書と申したり、色々な藝をやる。其外何時でも宮中から今歸つた許りである。嘗て宮中にゐたためしが無い。謁見は仰せ付けられるが、どうも、でんの謁見らしい。一つの會で貴族の表を暗記して置いて、他の會へ出てさも熱く知つて居るやうに之を切り賣りに吹聴する。就中彼等は夫の院内では沈黙を守る代りに咖啡店で氣焰を擧げる議員等の會合に絶えず出席した。これ等の議員は毎夜咖啡店へ集つて、新らしくもない政治上の談話を吐いたり呑んだりしてゐる。すると陣笠連がそれを取り巻いて其糟粕を舐め様とする。三人の兄弟は猶この外にも四十種ばかり、一々語るも懶いから止めるが、これに類似の資格を得て、其結果おのづから全都の最も才藝ある人士の間に數へらるゝに至つた。然しこれでも未だ充分で無いと見えて、前に述べた三人の淑女達は一向靡きさうにもしない。)

この淑女の名が貪慾、野心、傲慢(Covetousness, Ambition, and Pride)の三名であると聞く
と急に興が覺めるが、三人の兄弟が都會の惡風に感染して行く有様は別段諷諭には成つて居ない。

彼等の行爲は當時の高襟(Beau)ともいふべき放埒三昧な遊野郎の寫生であつて、御覽の通りそれを二三十箇條も並べて書いてある。然し其一箇條が宗教史中のとくに何を指してゐるか云ふと、丸で指してゐないのである。だから諷諭としての此章句は全く無意味である、價値の無いものである。然しながら諷諭の觀念を胸中に置かずして、單獨に之を讀めば、讀んだ文で中々面白いのである。第一寫實的である。第二にこの多くの箇條を層々累々と並べ立て、あるところは、一寸行列して居る様だけれども、是だけ著しい點を撰んで陳列する手際は感服するに足る。而も其並べ方が錯落として一寸趣をなして居る。第三に並べ立てた事柄の書き様が氣が利いて居て、例の如く諷刺あり刺激ありで、平凡で無い。要するに諷諭としては失敗かも知れぬが、地の文としては成功である。前に擧げた様な、單に諷諭としての價値があるばかりで、其他に價値の認められない章句と比較して見ると、此方が遙に優つてゐる。

尤も此『桶物語』を以て全然教會歴史の諷諭と見るのは間違つて居るので、物語の諸所には一章又は二章程の本文とは全く無關係の敘述即ち digression がある。しかも此 digression がそれ自身に於て大に振つて居るので、反つて本題の話題よりは吾人の興味を惹く事が多い。此 digression に外れる具合、及びその中に書いてある事柄、並びに書き案排を吟味して見ると、何所かスターンに似て居る。是は作物の系統上多少の参考になる現象であるが、寧ろスターンを評する

時機が來る迄取つて置いて、其場合に比較研究をして御話をする方が便宜と思ふから、今はたゞ一言兩人の類似を指點する文に留めて置く。其外に一寸私の氣が付いたことで、あまり著るしく感ぜられるから御話をしたのは、スキフトの用語(Language)の卑猥なことである。セントツベリー(Saintsbury)で有つたと思ふが、此點を捕へてスキフトの狂氣の症候と迄論斷してゐる評家もある位に甚しい所がある。然し鄙陋(Coarseness)が十八世紀の特色であることは、前に時代の大勢を話す時にも述べた通りで、決してスキフトに限つた事ではない。たゞスキフトは一般の影響を受けた上に、自家の性癖から此方面に普通以上劇しく無遠慮であつた者と見たら宜しからう。スキフトの言語の野鄙を咎めるのは差支ないけれども、彼が好んでこんな言語を使用したと思つてはならぬ。彼は唯斯かる言語を避けなかつたまで、不必要な所へわざ／＼下等な言語を使用すると云ふ様な狂氣では無いのである。アデソン杯は文雅有禮の士君子だからして、鄙陋な事柄は成るべく避け、用語も成るべく綺麗に濟まさうと力めたのだらうけれども、一面から云へば、其綺麗な所に何だか女性的な厭味がある。スキフトは野鄙かも知れぬ。然し野鄙な事を忌憚なく平氣で傲然として敍べて居る所が男性的である。参考の爲に紹介するが、『桶物語』の中に狂氣の效用を論じた一章がある。是は前に述べた digression の一部分で、無論本題とは何の因縁もない餘事で、話の筋を云と、——去る大國の大王が(佛蘭西のヘンリ四世とも云ふが、それは吾々の

關係した所ではない)突然大軍を召集して、國庫へは無暗に金を詰め込む、海上には大きな軍艦を並べる。大變な騒ぎを遣り始めた。然るに不思議な事には其目的が誰にも解らない。大臣も知らなければ、御氣に入りの近従も知らない。全世界は愕然として驚いた。隣り國の君主は暴風雨がどの見當に進行して來るか、戦々として空模様を眺めてゐた。群小政治家は至る處に眉をひそめて、色々な臆測を逞ふしてゐた。何でも萬國統一の一大王國を建設する計畫だらうと云ふものもあつた。否羅馬法王を引き擦り落す策略だらうと斷ずる者もあつた。なにさうぢやない、土耳古を征服してパレスタインを取り返す爲と吹聴するものもあつた。世間で斯様にワー／＼騒いでゐる最中に、ある御醫者様がこの兆候から病症を判斷して、忽ちに手術を施こして仕舞つた。固より名醫の事であるから大王の本復疑ひもないのであるが、惜しいかな本復される前に大王は死んで仕舞はれた。それで一時はさすがの騒動も漸く片付いたが、

“It was afterwards discovered that the movement of this whole machine had been directed by an absent female, whose eyes had raised a protuberancy, and before emission she was removed into an enemy's country. What should an unhappy prince do in such ticklish circumstances as these?……Having to no purpose used all peaceable endeavours, the collected part of the semen, raised and inflamed, became

adust, converted to cholera, turned head upon the spinal duct, and ascended to the brain: the very same principle that influences a bully to break the windows of a whore who has jilted him, naturally stirs up a great prince to raise mighty armies, and dream of nothing but sieges, battles, and victories.”—Sec. ix.

譯文は載せないが頗る可笑しいものである。可笑しいと同時に随分遠慮のない烈しい言語を使つてゐる。尤もこんなのはスキフトの特色では無い。寧ろラベレイ(Rabelais)かスターンの本領に屬すべき滑稽趣味である。彼の平生の調子は後に論ずる積りであるが、決して斯う亂暴ではないのだから誤解の無い様に御斷わりはして置かなければならない。——『桶物語』の批評は大抵この位にして止める。その缺點を數へたら少くはないが、大體の上から云ふと、警句の豊富にして勁拔なる點に於て、容易に他人の追隨を許さない奇な作物である。参考のためには讀んで御覽になつても損はないが、何しろ忙がしい世の中だから、強ひて御勧めも致しかねる。但しもし御讀になるなら面白い所と面白くない所とを讀み分けて取捨する必要がある。夫でないと丸で詰らんものになつて仕舞ふ。だから最初から其積りでかゝらねばならぬ。

『桶物語』と同時に出版されたのが『書籍の戦争』(The Battle of the Books)で、是も充分批評の値ある作物であるが、寧ろ他人の作と結び附けて論ずる方が興味がある様に思ふから後廻は

しにする。

『ガリヴァー旅行記』(Gulliver's Travels)。これから愈スキフトの傑作と云はれてゐる『ガリヴァー旅行記』に就て卑見を述べる積りである。『ガリヴァー旅行記』と云ふと、只今では何か小兒だけが讀む書物に成り下つた様で、『かち／＼山』の長いのだと心得て居る人が大分ある。スキフトには甚だ氣の毒である。成程小兒として讀めば、小兒の讀み物として頗る面白いのであらう、然しながら大人の讀み物とすれば、大人の讀み物として又立派なものである。下手な小説や詩などを幾十冊積んだところで到底『ガリヴァー旅行記』に及ぶものでは無い。否、斯かる種類の書の中では——と云つた所で、こんな種類の書は殆ど無いが——古今の傑作である。暇があるなら讀んで御置になるが好い。先づその梗概から話さうと思ふが、それも此書が有名な割合に人に讀まれなから、此所に居る諸君も定めし目を通された事はなからうと思ふから、厭でも我慢して御聞きなさい。

『ガリヴァー旅行記』は四編から成る。第一編はガリヴァーがリ、パット(Lilliput)と云ふ所へ旅行した話である、此ガリヴァーと云ふ主人公は素よりスキフト自身のことと相違ないが、表面上は一種の冒険者と成つて居る。冒険者と云つても好んで冒険を遣る譯では無い、この男が船に乗つて出ると必ず難船する、難船して知らぬ國へ上陸すると必ず妙な所へ行く。だから是は受動的の冒険者と云ふべきである。夫で彼が第一番目の航海に難船して上つたのがリ、パットと云ふ所なので、日本語で申せば小人國である。此國の人間は普通の人間の十二分の一位な大きさであるから、萬事萬端が其格で行く。その小人國で様々な冒険が始まるのである。小人國へ上陸するなぞと云ふところは奈何にも小供だましの様であるけれども、讀んで見ると頗る文學的に出來て居る。第二編に至るとガリヴァーがブロブデングナツグ(Brobdingnag)と云ふ所へ行く。これは前の小人國の反對で大人國である。今迄は自分が大人を以て任じて居たものが、急に小人に成つて、大に恐慌する模様が、是亦文學的に旨く描かれてある。第三編はいろ／＼な所へ行く。其中で重なるものはラピュータ島(Laputa)である、此處の住民は大人でも小人でも無い代りに妙な物を持つて居る。

"I observed here and there many in the habit of servants, with a blown bladder fastened like a flail to the end of a short stick which they carried in their hands. In each bladder was a small quantity of dried pease, or little pebbles, as I was afterwards informed."

(召使と思はれる着物を着た人間が手に手に短かい棒を持つて、其棒の先きに脹らかした膀胱を穀竿の様に結び付けて居るのを、そこ／＼で大分見掛けた。後から聞いて見ると、その膀胱

朧の中には小石又は乾豌豆が入つてゐるのださうだ。

何の爲めにこんな玩具を持つて居るかと云ふと、此國の人は沈思冥想に耽る癖があつて、其極は自分で口を利くことも忘れる、人の言ふことは無論忘れる。遂には聞くことさへも忘れると云ふ始末である。だから身分の好いものになると、この棒の先きへ膀胱を括りつけた様なものを持たせて、必ず従者を伴れて歩く。で、必要な場合には此従者即ち打手(Thapper)が主人の耳なり口なりを遠慮なしにどやし附ける。この位手痛くして主人が口を利いたり、耳を引立てる様に注意をしなければ用が辨じない。是程學問に凝り固まつて居る國風である。こゝへ出て來る事件は皆空論家とか空學者とか云ふ者の迂濶を諷したものであるが、ガリヴァーは此第三編に於てラピュータのみならず、他にいろ／＼の國を巡回して居る。遠くわが日本にまで來て居るのだから偉い。但し彼はラピュータへ渡る前に既に日本の海賊船に出逢つて居るから、ジヤパン(Japan)なる文字の出るのは第三編の始めからである。さうして終ひにはとう／＼日本へ乗り込むから面白い。尤も作全體の上から云ふて面白いのではない、又文學的に面白いのでもない、又諷刺が面白いと云ふのでもない。實は文學上から云ふと、有つても無くても差支ない位な場所ではあるが、兎に角スキフトが日本を『ガリヴァー旅行記』の中へ書き入れたところが、日本人たる吾々から見れば頗る興味を惹くのである。妙なことにガリヴァー君が日本の皇帝に紹介状を貰つて居る。それで最

初上陸した地はクサモシ(Karnoschi)と云ふ日本の東南の極とあるから、或は鹿兒島のことかも知れない。それから江戸へ來た。その後嘆願して長崎へ下る。長崎では繪踏と云ふことを遣るさうだが、これ丈は御免蒙りたいと嘆願して居る。時に皇帝頗る驚き給ひて、今迄和蘭人の中でのんな頑固を云ひ張つた者は一人も無いのにと云はれたとある。際どい所で諷刺を遣つたものである。然しこれ等は吾人に取つてのみ興味があるので、他國人から云へば極めて平凡なものだらう。其次が愈第四編になるのだが、この第四編こそスキフトが彼の最猛烈の嘲罵を擅にした所である。今迄漂泊した地方はみんな人間の國である。今度ガリヴァーの行く先きは大人國でも、小人國でも、又は變物の寄り集まつたラピュータの様な土地でも無い。フーインムス(Houyhnhms)と云ふて、發音さへ出來ない馬の國である。馬の國と云ふと馬が萬物の靈として威張つてゐる國である。ガリヴァーも馬の國に漂著した以上は、馬に服従しなければならぬ。實際ガリヴァーは自分を養つて呉れる馬のことを「わが君」(my master)と呼んで居る。それで此國にはヤファー(Yafoo)と云ふ動物が居る。どんな動物かと思つて行つて見ると、豈計らんやヤファーは即ち吾々の所謂人間である。ガリヴァーも上陸した時はヤファーと間違へられた位のものである。何しろ馬が主權を握る國だから、人間が動物と思はれてゐるのは當然である。何と不平の云ひ様もない。然し冗談にも其様な國柄を描き出すのが抑も人間に對する大侮辱大諷刺である。此大不名譽を人間全體

に蒙らして置いて、空うそむいて澄まして居る所が、スピフトのスピフトたる所であらう。無邪氣な小供の眼で讀めば、只夫れ切りの御伽噺に過ぎないが、事理を解する大人の頭で考へると大變な侮辱に違ない。文學あつてより以來侮辱を人間の上に蒙らしたもののうちで、斯んな惡辣な思ひ付は決してあるまい。たゞ思ひ付ばかりではない、段々讀んで行くうちに、餘り侮辱が甚しいからして、厭やな心持がする。但し自分で自分が厭やに成るのである。同時にスピフトを怒つたり、スピフトに喰つてかゝる氣は丸で無くなつて仕舞ふ。と云ふものは、この侮辱は空威張りの底のない侮辱では無い、實際侮辱されても何とも申様のない様な弱點に對する侮辱である。否、侮辱と云はむよりも相當な取扱ひである。だからして吾人は自分で自分に愛想が盡きて嘔吐を催す位に成るので。或評家はこれを *disgusting* だと評して居る。自己の惡い所を無暗に曝け出されるのは *disgusting* に相違ない。人間は昔から、耳を掩ふて鈴を偷むことを喜ぶものである。然しながら虚心平氣に此嘲罵を味はつて見ると、厭やだといふ感じの前に、道理だと云ふ心が起らねばならん。單に厭やだと云ふ感じのみ有つて道理だと思はぬ者どもは、自分がえらいと自惚れて居るからである。

これが『ガリヴァー旅行記』の梗概で、これから先が其批評である。

(一) 第一に目に附くのは『桶物語』を讀んでから『ガリヴァー旅行記』に移ると、この方が餘程

面白い、文學的に出來て居ると云ふ事實である。是は何故かと考へて見ると、『桶物語』は題目の示す如く物語である。物語であるにも係らず、諷諭としては兎も角話としての面白味が足りない。『ガリヴァー旅行記』は之れに反して、四編を通じて諷諭以外に話そのものが頗ぶる旨く出來上つて居る。甚だ單純で、説明する程の必要もない位だが全くこれが原因である。然しそれに續いてこの源因は何故に生じたかと云ふ問題が起る。これを解釋するのも譯もない。『桶物語』は教會の歴史といふ事實に依て束縛されて居る。而してルーテルの改革やカルギン派の教理や又は法王の專制的暴威などを個人の身の上に引寄せて書ねばならん。所が舊教、新教、非國教徒の歴史なるものは、これを個人の歴史に引直したところで、必ずしも文學の好材料に成るものばかり出て來るとは極まらない。それにも拘らずスピフトは之を取捨する權利を『桶物語』の冒頭に於て棄却して居る。材料が文學的であらうとあるまいと、唯比喩的に歴史上の事實をピーター、マーチン、ジャックの三人の冒險として述べ立るといふ手段を取つた。従つて前に擧げた様な乾燥で無稽な事柄をも敘述しなければならなく成つたのは已むを得ない次第である。『ガリヴァー旅行記』には最初から此束縛が無い。『桶物語』に在つて教會の歴史を比喩的に、述べんと企てたるが如く、『ガリヴァー旅行記』に在ては抽象的眞理を述べんとして居る。普遍的命題を述べんとして居る。抽象的眞理を述べるのであるからして、之を文學的にするには單に具體的に表はせば可いのであ

る。具體的に表はす方法に就ては作者は何等の束縛をも受けない。若し束縛があるとすればたゞ好く書かねばならぬと云ふ束縛のみである。従てスキフトは文學者として精一杯の腕を揮ふことが出来る。又普遍的の命題を取扱ふとなれば、教會の歴史など云ふ地方的興味を有するに過ぎないものを取扱ふのとは大に趣が違ふ。例へば清教徒が出て來て凡ての儀式を廢棄したと云ふ様な事實は一の事實に留まるので、普遍的の命題でも何でも無い。だからジャツクなる者が親から譲られた衣服を寸斷して滅茶々々にしたと書いた所で、此具體的な像影はこの孤立せる事實の象徴と成るに過ぎないのである。此點から云へば尨大なる『桶物語』も遂に一部の『イソップ寓意譚』に若かないと云つても宜しい。『ガリブー旅行記』の『桶物語』に勝る點も亦こゝにある。約めて云へば、文學的な話を自由に構造し得ること、其話の裏面にある主意が一般人間に共通なる利害を有することゝに成る。

ガリブーが小人國の王から或命令を受けた時の文句に、――

"Golbasto Momaren Evlaine Gurdilo Shefn Mully Uily Gue, most mighty emperor of Lilliput, delight and terror of the universe, whose dominions extend five thousand blustrugs (about twelve miles in circumference) to the extremities of the globe; monarch of all monarchs, taller than the sons of men; whose feet press down to the centre, and whose head strikes against the sun; at whose nod the princes of the earth shake their knees; pleasant as the spring, comfortable as the summer, fruitful as autumn, dreadful as winter. His most sublime majesty proposes to the man-mountain, lately arrived at our celestial dominions, the following articles, which by a solemn oath, he shall be obliged to perform:....."

(御名をゴルバスト、モマレン、イヴレーム、ガーヂロ、シエフィン、マリイ、アリー、グーと呼べる稜威高き小人國の皇帝は、其の治しめす版圖、あらがねの土のつゞく極み五千ブラストラツグ(周圍約十二哩)に互り、宇宙の仰ぎ見て敬ひ且つ畏るゝ所なり。げに此君こそは萬の王の王にして、いかなる人の子よりも丈高く、足は地球の眞中を壓し、頭は中天の日輪を掃ふ。一たび點頭けば立ちどころに世界の諸王膝を折つて地に伏さずといふ事なし。穩かなること春の如く、盛なること夏の如く、富めること秋の如く、威あること冬の如けし。この睿聖文武皇帝陛下には詔して山の如き大男に次の諸箇條を下命あらせらる、謹み畏れて救命を全うすべきものなり、云々……)

如何にも嚴めしい言葉使ひである。無暗に威張つた所には誰でも一寸驚く。氣焰萬丈と云ふことを能く云ふが、眞の氣焰萬丈と云ふのは先づ是れ位のもので有らう。アレキサンダーとかシイ

ザアとか云ふ人の文句としても少々不釣合である。況んや普通一般の君主の言葉とすると、猶更
狂氣を帯びて聞える。然し之を讀みながら是程威張つて居る大王が玩具の人形程な大きさである
と云ふことを一方に想像して見ると笑はずには居られない。能くこんなに威張れたものだと、驚
くよりは先づ滑稽の感に打たれて仕舞ふ。この滑稽の感を起させる所が則ちこの作の文學的など
ころ、面白い所である。而して其裏面に伏在するスキフトの主意は何處にあるかと云へば、説明
するものはない。誰にでも明かである。人間は自ら帝王だとか金満家だとか云つて自分だけ
らい様に大得意で居る、加之時としては自分より大きな者を輕蔑したり、又は馬鹿にした積りで
威張り返るが、奈何だ、それは皆此小人國の王様と一般で徒らに自己の無智を示すに過ぎないぢ
やないか。人間は斯く迄に愚な者である。——之を具體的に仄めかしたのが此御命令である。此
御命令を讀むや否や大王の弱點は一辭の説明なくして吾人の胸裏に映じて來る。同時に可笑しく
なる。其可笑味は大王の弱點と切り離す事がどうしても出來ないのだから、大王は直ちに被諷刺
的地位に立つ譯になる。言葉を換えて云ふと、吾人は大王の様な眞似をする氣にならなくなる。
これが文學的に懲戒的な所で、此懲戒の意味が普遍になればなる程、又だれの上にも應用が出來
れば出來る程諷刺は成功したものである。其極は、如何なる人が、如何にして、此懲戒を免かれ
様ともがいても、焦つても、どうしても切り抜ける事が不可能になつた時に、絶體絶命、人間は

生れながらにして此弱點を具備するものと諦める。是が厭世的な諷刺である。スキフトが此域に
達したか達しないかは後に行つて解る。

今例に擧げた章句を下の章句と比較して見ると其意義が一層明瞭に成る。ガリヴーが小人國を
去つて大人國へ渡り、始めて大人を見た時の感じは斯うである。——

“In this terrible agitation of mind, I could not forbear thinking of Lilliput, whose
inhabitants looked upon me as the greatest prodigy that ever appeared in the world;
where I was able to draw an imperial fleet in my hand, and perform those other actions
which will be recorded for ever in the chronicles of that empire, while posterity shall
hardly believe them, although attested by millions. I reflected what a mortification
it must prove to me to appear as inconsiderable in this nation, as one single Lilliputian
would be among us. But this I conceived was to be the least of my misfortunes; for,
as human creatures are observed to be more savage and cruel in proportion to their
bulk, what could I expect but to be a morsel in the mouth of the first among these
enormous barbarians that should happen to seize me? Undoubtedly philosophers are
in the right, when they tell us that nothing is great or little otherwise than by

comparison. It might have pleased fortune to let the Lilliputians find some nation where the people were as diminutive with respect to them, as they were to me. And who knows but that even this prodigious race of mortals might be equally overmatched in some distant part of the world whereof we have yet no discovery?"

(胸騒ぎのする間にもリ、パットの事は考へた。彼等は自分を自然界の大怪物の様に考へてゐた。リ、パットでは帝國艦隊を片手で引張つた事もあつた。其外帝國の年代記に特筆大書され可き事を色々遣つた。後世に至つては、縦令萬人が口を揃へて證明しても仲々信じられ相もない仕事を遣つた。その自分が今この國へ渡つて來て、恰も小人國の人間が普通の世の中へでも現はれた様に意氣地がなかつたら如何にも心外千萬なことであらう。いや、それ位の不幸は未だ取るに足らぬ。人間と云ふものは身體が大きければ大きいほど段々残酷に成るものだと云ふことだから、最先きに自分を見附けて捕まへた巨漢の毒牙にかけられて、一口に喰はれて仕舞ふのは目のあたりである。昔の哲學者が物は較べた上でなけりや大きいことも小さいことも無いと云つた相だが、全くそれに相違ない。小人國の住民だつて、次第に依れば彼等が自分に對して小さかつた様に、彼等に對して一段小さい人民に出逢はぬとも限らぬ。又この巨大なる人間どもと雖も、何處か未だ吾人の知らぬ遠い世界の際涯で、とても敵はない様に大きな人種

に邂逅すかも知れない。)

これは寧ろ議論である。議論と云はむよりはガリヴァー自身の回想であつて、前に擧げた例の様な客觀的記述ではない。けれども此回想の中には誰にでも共通に興味のある概念を含んで居る。人間は大きくなれば成る程傍若無人の非行を逞しくする。又人間の大小なども要するに比較的のもので、小人國では山の様な男と呼ばれたガリヴァーが大人國へ來ると宛然たる小人國民である。同時に小人國の住民の眼にさへも更に小人國の民と見える様な小人が無いとは限らん。と斯う云つた哲理は少しく頭腦の發達した人には誰にでも解る。解るは無論讀まぬ前から解つてゐるかも知れないが、斯う書いてあると今更の様に感じる。そこが手際である。而も前の小人國の話の次に此章句が出るので、猶一層對照比較の便宜があつて強い刺激を興へる。(尤も比喩的の假作物だから人情小説の様には痛切でないのは當り前である。)

然らば『ガリヴァー旅行記』の中の諷諭は毎も斯う云ふ工合に旨く行つてゐるかと思ふに然うでもない。『桶物語』の面白くない原因の一として、其中に表はれる諷諭が普遍的興味を缺くからだと云つた。『ガリヴァー旅行記』に在つても單に諷諭としては地方的又一時的であつて、吾人には意味の通じない事が時たまある、そんな所になると果して詰らない。人の説によると小人國は暗に英國を指したものださうだ。そこで此編の中には當時の英國の政治的方面に對する諷刺が大分

ある。例へば小人國の役人どもが天子の前で色々な藝盡しを遣つて御機嫌を取る様な所で、其時天子は賞品として三個の絹紐を興へる。“The emperor lays on the table three fine silken threads of six inches long; the one is blue, the other red, and the third green.”(皇帝は卓子の上に長さ六吋ばかりの綺麗な絹紐を三筋まで載せたまふ、一筋は青く、一筋は赤く、又一筋は緑色である。)是は騎士の三階級たるガーター、バス、シツスル(the Garter, the Bath, the Thistle)を表はしたものださうだが、吾々英國人と關係の深くない讀者は、一わたり之を讀んだ所で別に氣が附く程の刺激を受けない。従て諷諭としては吾人に何の意味も無いものだと思つて可い。然しながら素より當時の英國の事情に悉く當て嵌めやうとしたものでなく飽まで選擇の自由を保持して書いたものであるから、この話の如きも之を諷諭と見ないで單にこれ限りの話として讀めば又捨て難い面白味がある。この點から云ふても『ガリヴァー旅行記』は遙に『桶物語』に勝つて居る。

(一)『ガリヴァー旅行記』と『桶物語』とを比較して其優劣を論じて見たから、是れからスキフットの諷刺とアヂソンのそれとは奈何様に違ふか、それを一寸調べて置かうと思ふ。

(a)彼等の諷刺に上る題目は廣狹深淺の度に於て大に相違して居る。前にも話した如く、アヂソンの捕へる所は人の儀容である、作法不作法である。攻撃する所は寧ろ惡習で、罪惡では無い。

寧ろ癖で、本然の弱點では無い。一言にして言へば寧ろ瑣末な社會的題目である。スキフトに至ると、そんな狭い所に踞踏して不平を並べて居るのとは違ふ。政治も諷する、社會の風俗も諷する、親子夫婦の關係も諷する、何でもかんでも諷する。最後にヤフーに至つて、人類全體を人間の立脚地から蹴落して獸類の群にまで入れて居る。彼は人間の爲すこと考ふることもしくは言ふことの何れに於ても、人間らしき所、萬物の靈たる所を認めざる迄に猛烈な諷刺を加へたのである。人間は一人残らず根本的に下劣醜陋な動物なりとの觀念を諷諭的に述べ盡くし證し盡したのである。アヂソンとは最初から立脚點が違ふ。アヂソンには世俗の悪い所を矯めたいと云ふ考がある。スキフトは改良の希望を疾くの昔に通り過ぎて居る。初手から駄目だと投げてかゝつた。(b)従て彼等が人世を批評する兩様の態度は能く著作の上にも現はれて、明かに之を觀取することが出来る。前に一二度御話した通り、アヂソンは十八世紀に於ける當時の状態に満足した人である。但だこの満足の中に不満足があるからして、其不満足な所ばかりを諷して取除かうとした。然も當人自身は其様な缺點を脱却し得たと信じて居るからして、至極太平であつた。故に彼の社會に對する態度は常に嘲笑的である。冷笑には相違ないが、揚々たる風が見える。其作に多少の辛味を含んでゐるにも係らず、大體は先づ／＼吞氣に讀める。世の中は平穩無事で結構だと云ふ氣になる。少しは寒いのも吹くが柳も日毎に霞んで來ると云ふ景色である。之に反してスキ

フトは十八世紀に於て毫も満足する所が無い。何處までも不満足である。單に十八世紀に不満足なるのみならず、十九世紀にも廿世紀にも、乃至唐虞三代の世にも不満足なのである。人間のゐる所、社會の成立する所は一視同仁に不満足の意を表する男である。夫だから世の中に對して希望が無い、希望が無いからして世を救つてやらうの、弊を矯めてやらうのと云ふ親切心も無い譯である。其親切心の無い所が作の上であり、と反響して現はれるからして、之を讀む時にも暖い感じが無い。和樂した味ひが無い。滑稽もあり頓智もあるけれども、陰氣な感じばかり起る。或所を讀む時などは、此の國の冬の空を仰いで再び日の目は見ることが出来ないかと心細く成つた様な氣さへする。

こゝに問題が起る。今云ふ通りアヂソンの諷刺に上る問題は人生の一局部の而も上つ皮の事である。だからして之を評して淺薄とも皮相とも云へる。又スキフトの取扱つた問題は人倫の大本に渡つてゐる。だから之を評して深刻とも痛切とも云へる。偕てこの皮相と深刻と云ふ形容詞を並べて、何方が文學として價値があるかと尋ねたら、十人が十人ながら深刻の方を擇ぶだらうと思ふ。深刻の方を擇ぶとすれば、其必然的論結としてアヂソンは文學者として遙かにスキフトの下に居らねばならない。然るに彼等の作品から得る吾人の感じから云へば奈何であらう。アヂソンの文は愉快である。吾人をして吾人の缺點を自覺せしめられるのは、直ちに諷刺の目的と成つ

た當人から云へば多少不愉快かも知れぬが、而も其缺點たるや一舉手一投足の勞で以て容易に切棄てられるものであるからして、之が爲めに癒すべからざる深傷を負ふ様な騷動の起る氣遣は無い。のみならず彼は人間をして大に得意で世の中に生存せしむべき餘地を與へて居る。スキフトの聲は眞理かも知れぬが福音では無い。吾人をして自ら好んで地獄に投ずるの已を得ざるに至らしむる聲である。非常に不愉快な感じを起させる聲である。吾人は眞理を悟つて絶望の淵に投るのが好いか、又は迷つても、浮かれて世の中を面白く暮すのが好いか。それは容易に解釋の出來ん問題としても、或る一種の人から云へば、文學書を讀んで不快の感を起すよりも愉快な感じを起す方を擇ぶかも知れない。それをある調子に乗つて押し詰めて行くと、今度はアヂソンの方がスキフトよりも、より多く文學の目的に適つた仕事をしてゐるかも知れない。アヂソンは皮相で淺薄である、然し文學者としてはスキフト以上である。スキフトは深刻である、根本的である。然し文學者としてはアヂソン以下である。と云ふパラドックス(Paradox)に到着する様になる。何だか妙である。私は此問題を擧げて讀者の判斷を聞かうと思ふのである。どう解釋したら旨い所へ落ち付けるだらう。私は斯う考へる。

文學の讀者中には色々の階級種類があつて、其階級種類が各特別の事情を有して居ると想像が出來ないでもない。最も著るしい例を擧げて云ふと、學校の教科書として文學を讀む生徒もある。

是は讀まなければ卒業が出来ないから是非共讀む。警視廳では風俗取締の爲に讀む。是も檢閲の爲だから否でも應でも讀む。或は専門上研究の必要があつて讀む。是も已を得ない。或は讀んで見ると云はれて、仕方なしに讀む。或は義理だから嫌でも讀む。——數へて來るといくらでもある。然し云ふ迄もなく是等は皆特別の場合で、大多數の讀者に比例すると極めて僅少の例外である。其大多數の讀者なるものは皆自分の勝手で讀んでゐる。悪く云へば酔興に讀んでゐる。既に酔興の沙汰であつて見れば、どこかに面白い所がなければならぬ。六づかしく申すとある一種の快感を起さなければならぬ。文學を娛樂と云ふと一部の人は之を攻撃するかも知れない、又攻撃される餘地は充分あるだらうが、娛樂の分子を悉く取り除けば面白味は全くないと斷言するのと同様で、面白味の全くない文學は成立する事は勿論、想像する事さへ出来ないのである。吾々は吾々の必要品たる衣服や、住宅や、食物に對してさへも撰り好みをする。旨いとか不味いとか云つてゐる。着ねばならず、住まねばならず、食はねば死んで仕舞ふ程のものに迄好き嫌ひの沙汰がある以上は、讀まないでもゐられる、買はないでも罰金を取られる憂ひのない文學書——もし面白くないとしたら、誰が讀まう。現に日本の人口何百萬あるうちで、生涯文學書に手を觸れないものが何百萬あるか分らない。さうして其唯一の理由は眞に面白くないからと云ふ丈で、他に何等の言辭を必要と認めないものが又何百萬あるか分らない。

して見ると、文學讀者の大多數は、みな面白いから讀むと云ふ連中のうちに一括されべきものである。是は一見明白な事實で、如何に超絶な作家も此事實を度外に置く事は出来ない。如何に面白がらせる爲の作物ではないと主張しても、面白いから讀むと云はれる以上は——又讀む以上は面白いから讀むに極まつてゐる。——作者の主張は一般讀者の上に對して全然無能力の主張である。かう云ふ主張を敢てする作家のあるべき筈もないが、もしあるとすれば、其主張を貫かうとする前に、退いて、所謂面白味とはどんなものだらうか、文學的述作から出る快感とは如何なるものだらうか、其點を考へて見る方が順序に近い。

普通の誤謬は字義の不分明な點から起る。次に複雑の現象を單純と見誤まる御粗末から起る。今此面白味とか快感とか云ふものも、此二ヶ條に注意して調べて見れば理義が自から分明になると考へられる。今アヂソンの書いたものは愉快である。スキフトの書いたものは不愉快である。さうして讀者は愉快だから文學書を讀む。だからアヂソンの方を好く。だからアヂソンの方がえらい。——と、かう押して行くと、知らぬ間に妙な所へ持つて行かれて仕舞つて、持つて行かれた後で、どうも變だたと云ふ氣になる。それは全く此愉快(即ち快感、面白味)といふ字に轉がされたのである。足元を引き緊めないで滑つて來たのである。スキフトの作は不愉快である。——是は私自身の言明である。スキフトの作は今日迄澤山讀ま

れた。——是は事實の證明する所である。讀む人は愉快だから讀んだに違ない。——是も私の今保證した所である。是等スヰフトの讀者が皆間違つてゐるとすれば格別、不愉快な作物を愉快と思ひ違へたとすれば兎に角、さうでないとする、私は自分で矛盾に陥つてゐる。スヰフトの作は不愉快であると主張しながら、スヰフトに多數の讀者のある事を承認して、しかも其讀者は愉快だから讀んだのだと説明するならば、どうしても矛盾に違ない。私は形式の上に於て明かに此矛盾を認めると共に、私の所謂愉快の二字の内容を吟味して、始めて實際上に此矛盾を免かれ得るのである。何故といふに私は此矛盾を犯しながら、毫も矛盾の感が生じないのである。生じないから、愉快の意味を詮議して區別したくなるのである。單純に見えるものを複雑に分解したくなるのである。さうして腑に落ちる所迄行きたいのである。

スヰフトの作は不愉快である。しかも私は讀み通した。何等の特別の事情がなくても單に讀む爲めに讀み通したらうと信ずる。その讀み通し得る所に明らかに私は一種の愉快を認めてゐなければならぬ。すると此愉快と、前に云ふ不愉快とは多少性質の違つたものでなくてはならない。(同じ物が同時に愉快で、又不愉快であるとは人間として云ひ得ないから。)するとスヰフトの作は何れの點に於て不愉快で、何れの點に於て愉快であるかを明らかにすれば問題の大部分は片付くのである。

私は此編の冒頭に於て文學は好惡の表現であると説いた。又其好惡なるものは二重にも三重にも重なり合つてゐると説いた。今御話を致す事は是と關聯して御聽を願ひたい。スヰフトの不愉快の點は、露骨に人間の弱點を曝く所にある。容赦なく人間に恥をかゝせる所にある。人間の醜と陋と劣と愚を陳列する所にある。臭いものを無暗に鼻の先へ突きつける所にある。空に輝いてゐる太陽を永劫に奪つて仕舞ふ所にある。人間を動物の如く取り扱ふ所にある。動物より下等なる馬の國の動物として取り扱ふ所にある。人類はスヰフトの爲めに自尊心を傷けらるゝ故に不愉快である。道義を取り上げらるゝが故に不愉快である。偉大と壯烈とを減ぜらるゝが故に不愉快である。美しくしき人、美しくしき花、美しくしき空と水と衣裳と簪とを泥だらけにされるが故に不愉快である。相思、友愛、節義、信念、凡ての便りを打ち壞さるゝが故に不愉快である。かくして人類は世界滅却の日に至る迄不幸である。それが最大不愉快である。——一言にして云へば、スヰフトは善惡、美醜、壯劣の部門に於て、寸毫の満足をも吾人に與へないのである。吾人の希望を永久に鎖したのである。人生の三分二を焼き拂つたと同じ事である。

しかして是が人間の本體だと云ふ。看板を懸けて本體屋と號するのでも、樂隊を雇つて本體を廣告するのでもない。次第々々に本體が露出し、活躍し、横行し、濶歩し、恥もせず臆しめせず、冷然として天命の如くに展開し來るのである。讀む者は第一に眼を擦る。新らしい刺激を愉快に

思ふからである。第二に成程と思ふ。争はれぬ事實だからである。内外呼應の愉快である。第三におよと思ふ。隠れたる事實を掘り出した愉快である。第四にははつと思ふ。飛んだ所に人間の正體が見付かつた愉快である。——是等は悉く愉快である。但し眞實を探ぐり、事相を明める點から見ての愉快である。

不幸にしてスヰフトの書いた是等の愉快は、悉く他の部門から出る愉快と衝突してゐる。眞偽の部門から出る愉快で、善悪、美醜、壯劣の部門から出る愉快と重なり得る者、並行し得るもの、兩存し得るものは、一つ残らず切り棄て、唯不愉快を興へるものゝみを餘して、それを根氣に書き連ねたのが『ガリヴァー物語』である。従つて『ガリヴァー物語』は愉快である。さうして又不愉快である。愉快でもあり不愉快でもあつて、決して矛盾にはならないのである。(『ガリヴァー物語』ばかりではない、世間には小説を読むのによく讀んで仕舞つたあとで、面白くないと云つて苦い顔をしてゐる人がある、さうして讀む時は一生懸命に讀んでゐる。かう云ふ人の心的状態は以上の分解で大抵説明が出来ると思ふ。)

スヰフトに關する愉快不愉快の辯は是で略盡きた。残る所はアヂソンの愉快は如何なる性質のものか、簡略に説明すれば此問題は結了したと同然である。アヂソンは當時のマナーを忠實に後世に残した人として有名である。だから其作物を讀むと當時の風俗がよく分る。分ると云ふ事が

既に愉快である。當時の風俗なんぞは何うでも構はないとした所で、たゞ、左もさう有り相な社會や風俗が眼の前に出て來るのは見てゐて愉快である。それから彼の書いた人間はと云ふと矢張り人間らしい。社會とか風俗とか云ふものは著るしく世紀によつて變るものであるが、人間はそれ程變らない。(全く變らないと云ふ譯ではないが、變るのは寧ろ人間を觀察する態度と程度である。)だから當時に在つて旨く寫された人間は(ある意味から云つて)今日でも旨く寫された人間に違ない。アヂソンは旨く人間を寫してゐる。すると善く自然に似た敘述即ち事實を傳へる點から見て、アヂソンは吾人に愉快を興へてゐる。此點はスヰフトと同じである。但しスヰフトは本來の——彼の所謂本來の——人間其物を敘述する爲めに架空の比喻を借りて來たのだから、有の儘の世相を有の儘に書き流したアヂソンの流儀とは方法が全然違つてゐるが、雙方共に眞實より出る快感を讀者に與ふる點になると同じである。たゞ一方は前にも屢述べた如く儀容作法の末節に走つた事實を傳へ、一方は人間の内部を裏返しにした事實を傳へたと云ふ相違になる。此點に於て雙方の優劣を論ずるは一に標準の立て方である。深淺を標準にすればスヰフトが勝つ。勝つとは淺い方が悪いと云ふ意味である。然し油繪よりも水彩畫が好いと云つたり、水彩畫よりも俳畫が面白いと云つたりすれば逆さまになる。西洋料理より普茶料理が旨いと云つたり、東宮御所より茶座敷が趣があると云へば反對になる。又兩方共に結構だと云へば分けになる。深い方は

深いなりに上出来で、浅い方も浅いなりに上出来で、出来の程度が同じとすると、又深ければ深い趣味があり、浅ければ浅い趣味があるとすると、強ひて優劣を決する必要もなくなつて仕舞ふ。同じ種類の果物のうちでパイナップルと梨を比較する様なものである。たゞ深い浅いで區別して、他は讀者の取捨に任せたら宜からう。

次にスキフトが悪感を興へる點に於て、アヂソンは快感を興へてゐる。前にアヂソンの事を論ずる時に大分色々な事を詳しく述べたから、此所にはたゞ手短かな、片寄つた説明文で間に合はせるが、——彼の文章を讀むと、(嘲弄される當人は別として)一般に暖かい縁側で日向ぼっこをしてゐる様な感じがする。即ち太平和樂の趣を具へてゐる。是は作物の眞偽から出る快感でも、壯劣から出る快感でもない。寧ろ善惡と美醜の部門から出る快感である。何故善惡に關係があるかと云ふと、世の中が平和なのは、人が靜穩で、騒動も喧嘩もしないで結構だと云ふ感じが籠つてゐる。惡事凶事がなくて目出度いと云ふ感じを控えてゐる。何故美醜に關係があるかと云ふと、日光が美しい如く、暖かい縁側が戀しい如く、太平の氣象が耳目を自から悦ばしめるからである。アヂソンは此點に於て吾人に快感を興へてゐる。然し是も程度から云ふと浅いものである。既に其快感の種類をかやうに説明しなければ諸君に了解が出来かねるのである。然し快感はどこ迄も快感で、其種類を云ふと今説明した部分に屬する快感に相違ないのである。所がスキフトは此

點に於て吾人に非常な不快を興へてゐる。それは前に述べた通りだから繰り返す必要はない。で一口に云ふと、アヂソンは快感を興へてゐる代りに浅い、スキフトは非常な不快を興へてゐる代りに深いとでも評したら、二人の特性丈は摘み出す事が出来やう。けれども、それが優劣にもなりかねる。

以上の議論説明を呑み込んだ上で兩人に關する取捨を隨意に極められたら好からうと思ふ。アヂソンが俱樂部の事を書いた中に、斯んなのがある。

“I know a considerable market-town, in which there was a club of fat men, that did not come together (as you may well suppose) to entertain one another with sprightliness and wit, but to keep one another in countenance: the room, where the club met, was something of the largest, and had two entrances, the one by a door of a moderate size, and the other by a pair of folding-doors. If a candidate for this corpulent club could make his entrance through the first he was looked upon as unqualified; but if he struck in the passage, and could not force his way through it, the folding-doors were immediately thrown open for his reception, and he was saluted as a brother. I have heard that this club, though it consisted but of fifteen persons,

weighed above three ton.

“In opposition to this society, there sprung up another composed of scarecrows and skeletons, who, being very meagre and envious, did all they could to thwart the designs of their bulky brethren, whom they represented as men of dangerous principles; till at length they worked them out of the favour of the people, and consequently out of the magistracy. These factions tore the corporation in pieces for several years, till at length they came to this accommodation; that the two bailiffs of the town should be annually chosen out of the two clubs; by which means the principal magistrates are at this day coupled like rabbits, one fat and one lean.”

(自分の知つてゐる、ある大きな町に肥大漢の俱樂部と云ふのがあつた。これは普通の俱樂部と違つて、會員が互に頓智を闘はずでもなければ陽氣に遊ぶでもない。只寄り合つて眞面目な顔を突合せて居る。會員の集まる部屋は素張らしく大きなもので、入口が二つある。一方は普通の戸が閉て、あるが、一方は一對の疊み戸で出來て居る。この肥滿俱樂部の會員に成らうと云ふ候補者が、若し第一の戸から容易く這入つて來やうものなら、即座に會員たる資格の無い者と認められる。これに反して入口に挟まつて奈何にしても進むことの出來ない者は、直ちに一方の疊み戸を開けて會員として歓迎せられる。この俱樂部の會員は僅かに十五名以内だが重さは三噸以上あると云ふ話である。

肥滿俱樂部の向ふを張つて、案山子や骸骨の様な人間ばかりで組織せられた會がも一つ出來た。この連中は瘠せて、ひよろついて、忌々しいものだから肥滿俱樂部で計畫することは何に限らず手の届く限り妨害を加へた。しかも彼れ肥滿會員は危險極まる主義を抱いてる杯と言ひ觸らした結果、とう／＼敵の聲望を傷け終せて、町の公役に就けない様にして仕舞つた。此騒動が數年間續いた爲め、町組合も散々になつたが終に相談の末、町のベリツフを一人宛兩方の俱樂部から年々選むと云ふ事で漸く落着を告げた。今日に至る迄此町のベリツフは溝と臍みその様に瘠せたのと肥つたのと二人でしつくり成立つて居るのは、全く是れが爲めである。是れは當時雨後の筍の様に俱樂部が出來るのを諷したものと見えるけれども、少しも皮肉な所がない。却て如何にも陽氣な感じばかりして、不平とか不愉快とか云ふ分子は跡方も見出せない位である。

是と對照する爲にスキフトの冷罵のうちで尤も辛辣を極めた第四編の中からして、二三の例を擧げて御覽に入れやう。ガリヴァーが馬の國へ行つて馬の言語を習ふと存外能く覺えるので、馬の主人が大變感心したと云ふ條りに斯うある。

"He was extremely curious to know from what part of the country I came, and how I was taught to imitate a rational creature; because the *Yahoos* (whom he saw I exactly resembled in my head, hands, and face, that were only visible), with some appearance of cunning, and the strongest disposition to mischief, were observed to be the most unteachable of all brutes."

342

(彼(即ち馬である。馬の國だから馬が人間の位置に居る。)は自分に何所から來た、又どうして理性的動物の眞似をする様に仕込まれたかを大變熱心に問ふた。と云ふのはこのヤフーと云ふ獸は(主人は自分を目して、手なら頭なら顔なら、見える所は皆この動物に酷似そっくりだとしてゐる。)見掛けから悪賢しこさうで、且つ非常に善くない傾向を有してゐて、あらゆる獸類の中一ばん手の附けにくいものだと言はれて居るからである。)

滑稽は無論ある。けれども滑稽の感じは忽ちに壓迫されて仕舞ふ。但し痛くはない。局部を刺したり、ちく／＼させる様な細工にわたつたものではない。のそりと四方から讀者を取り巻いてゐる。さうして讀者は壓迫を感じる、雪と雲に鎖されたと同様である。

ガリブーが其主人に(即ち馬に)故郷の物語りをする條りにはこんな所がある。

"I told him we fed on a thousand things which operated contrary to each other;

that we eat when we were not hungry, and drank without the provocation of thirst; that we sat whole nights drinking strong liquors, without eating a bit, which disposed us to sloth, inflamed our bodies, and precipitated or prevented digestion; that prostitute female *Yahoos* acquired a certain malady, which bred rottenness in the bones of those who fell into their embraces; that this and many other diseases were propagated from father to son, so that great numbers come into the world with complicated maladies upon them; that it would be endless to give him a catalogue of all diseases incident to human bodies, for they could not be fewer than five or six hundred, spread over every limb and joint; in short, every part, external and intestine, having diseases appropriated to itself."

(主人にこんな話をして聞かせた。吾々は色々なものを食ふ。それが腹のなかで鉢合せをする。それから腹の減らないのに食ふ、飲みたくないのに飲む癖がある。さうかと思ふと、食ふものは一口も食はないで、終夜よひじ強い酒を飲む。さうして身體からだは怠なまになる。熱ほてる。腹が下る。食ものが痞へへる。それから、地獄を商賣にする牝ヤフーは一種の病氣を有つてゐる。此牝ヤフーに抱き付かれると、其病氣が食ひ込んで骨迄腐る。最も病氣は是許りではない、色々ある。それ

が親から子に傳つて行くから、生れ落ちると、すぐ、こんがらかつた、六づかしい病氣を有つてゐる奴が大分ゐる。人間が懼る病氣の名を一々教へるのは大變な事だ。手、足、關節、至る所にはびこつた奴を勘定したら、何でも五六百はあるだらう。まあ外も内もない、何所もかしこも病氣と云つて可い。

是は寧ろ諷刺ではない。悪口に近い攻撃である。何でもない様だけれども、人間の動物と違ふ所は、食ひたくないのに食つたり、飲みたくないのに飲んだりする點にもあるんだから、そこが一寸面白い。あとは大した才もない。云はうとすれば普通の人にも云へる。然し相手がフーインムスなる馬であつて、其馬が、成程人間と云ふ動物は、そんな譯の解らない野郎か、と聞いてゐるんだから、随分厭になる。よし是丈なら左程でもない主張した所で、前のアヂソンの調子とは丸で比べ物にならないのだから、對照にはなる。

それからガリヴーがヤフーを見に行きたいと願つた。主人の馬は許可を與へた。其理由が面白く、*S. being perfectly convinced that the hatred I bore these brutes would never suffer me to be corrupted by them*(自分がこれ等の獸類(即ち人間)に對して有する憎惡の念に徴しても、彼等に接したが爲に墮落する様なことは斷じて無いと云ふことを十分に信用したから)とある。甚だ思ひ切つてゐる。普通のものでは是丈の考があつても大抵遠慮して黙つてゐるのが當然だ。

斯うして永く馬の國に住居するにつけて、さすがのガリヴーにも漸々馬の國の風俗習慣が懐かしく成る有様を叙した所がある。

"By conversing with the *Houyhnhms*, and looking upon them with delight, I felt to imitate their gait and gesture, which is now grown into a habit; and my friends often tell me, in a blunt way, that I trot like a horse, which, however, I take for a great compliment. Neither shall I disown, that in speaking I am apt to fall into the voice and manner of the *Houyhnhms*, and hear myself ridiculed on that account without the least mortification."

(フーインムスと逢つたり話をするのが、何となく面白いので、何時の間にか彼等の身振り、歩きつきを真似る様に成つたが因果で、今ではちやんと習慣に爲つて仕舞つた。それでもフーインムスの友人は、何だまだ馬の様な歩き方ぢやないか扨と云ふ。然しさう云はれると大變難有い氣がする。夫から白狀して仕舞ふが、話をするフーインムスの聲や様子が出る。可笑しいと云つて笑はれても口惜しくも何ともなかつた。)

是は人間を正面から蹴落す代りに、馬を人間以上に上げたのである。馬の方が人間よりもえらいからして、人間は馬を學んでも可いと云ふと同時に、人間は馬にも劣ると云ふことを廣告した

ものである。

(三)以上の例は随分人を馬鹿にしてゐる。スウィフトを相手取つて告訴でもしたいが、スウィフト自身が既に自身を侮辱してゐるんだから仕方がない。スウィフトの諷刺の一般は大抵想像がつくだらうが、私をして一言に之を評せしめるならば、先づ冷刻と云ふのが一番適當だらうと思はれる。冷刻なる犬儒主義(cold cynicism)とでも評したい氣がする。元來諷刺にかゝる題目は、人生の見様、社會の觀方で色々に區別も出來やうが、諷刺を遣る方の動機を分析して見ると面白い等差が出来る。第一は好意的の諷刺である。諷刺其ものは苛酷かも知れぬが、其目的は諷刺を受ける當人をして惡を罷め善に移らせやうとする好意から出るのである。アヂソンやスチール、殊にスチールは此傾向を有して居る。第二は惡意的のもので、單に其人の感情を傷けて、陰で舌を出して居ると云ふ様な皮肉な遣り方である。アヂソンには時々此傾向がある。第三は善意でも惡意でも無い、唯諷刺其ものが面白いから遣る。其結果に至つては何うでもよい。毫も問ふ所が無い。小兒が犬を追ひ廻はして喜ぶ如く、諷刺以外に何の目的も有して居らるのである。スウィフトは天性諷刺家に生れ付いたのだからして、諷刺以外に何等の目的を有して居らんでも、決して諷刺をやめる譯には行かない人である。

元來諷刺其ものを目的として諷刺を遣る人は、諷刺其ものが面白いのであるからして、諷刺を受けた本人に如何いふ結果を來さうと構ふ筈はない。これは前に述べた通りである。偕て諷刺は固より不満足を表はす消極的批評の文學であるには相違ないが、其不満足があればこそ諷刺の材料が出来るので、諷刺の材料があればこそ自分は愉快を感じるのである。して見ると此等の人々は不満足が満足に變化して諷刺の材料が無くなるよりも、不満足は其儘で矢張り諷刺的な觀察がして居りたいのである。是れは自己の優勢スベリオリチーを示す爲とも解釋出来るし、或は眞に藝術的良心から無關心の愛(disinterested love)を以て諷刺に對するものとも説明が出来る。猶立ち入つて云ふと、かう云ふ諷刺家は諷刺を受ける人物に對して存外憎惡の念を抱いて居らん。よし抱いて居つても諷刺其物を喜ぶ快感の爲に打ち消されて、果は却つて此弱點を有する者の存在を嬉しがらないとも限らない。是は妙な矛盾である。が又寄り道をしてゐると歸るのが面倒だから、すぐ後戻りをして、かゝる諷刺家は少くとも諷刺を興ふる目的者の利害に關しては無頓着(Indifferent)であると云つて置く。

偕此種の無頓着は世の中に飽きはた結果として、所謂不感無情(callousness)の域に入つたものでは無い。又冷やかに輕蔑の意を含んで居る無頓着でもない。世の中に飽きもせぬ。世の中を輕蔑しても居らん。但だ藝術として諷刺を愛するが爲に、或は自己の優勢スベリオリチーを愛するが爲に、諷刺以外の交渉即ち當人の利害などは忘れて仕舞ふ、と云ふ無頓着である。其結果は諷刺を遣る癖

に呑氣である、現世に甘んじて居る。しかも諷刺を敢てする位だから幾分か世の中を茶にして居る。茶に出来る様な地位に立つてゐるものもある。(一休、大久保彦左衛門、現今上流社會の紳士のあるもの。)或は世界觀の結果然るものもある。或は天性然るものもある。いづれも定業は五十年、浮世は肥桶の様なものだ、臭い々々と云つて人を冷かしながら、臭い中に澄まして住んで、至極太平に諷刺を遣つて居る。

スピフトは天性の諷刺家だと云つたが、それでは矢張りそんな呑氣屋の一人ぢやないかと疇違をする人があつたと不可ないから斷つて置く。決してさうぢやない。彼の迫つて喰ひ入るやうな諷刺である。何處までも理は理、非は非、醜は醜として、一毫も假借せぬ諷刺である。斯くの如く、惡を憎み、醜を忌む潔癖の態度を飽く迄も持してゐる。それで居て可笑しい事には矢張り無頓着である。たゞ彼の無頓着は感覺が鈍くて無頓着なのではない、感覺が鋭敏過ぎるから、無頓着にでもして居なければ居たたまれないのである。彼は現在に對して大不満である。大不平である。然しながら此大不満と大不平とは到底動かすべからざる大自然であつて、人間を作り易へなければ如何することも出来ないと思つて居る。そこで、奈何とも勝手にしりと投げ出した。云はば絶望から出る無頓着である。彼は憤怒の峠を通り越して無頓着に成つたのである。雪に封じられた火山の様な無頓着である。

この態度が能く作物の上に表はれて居る。彼は徹頭徹尾諷刺的文字を並べて居るにも係らず、嘗て自己の感情を作中に暴露したためしが無い。彼れ自身が怒つて居る所、叫んで居る所、さては狂ひ亂れて居る體裁を嘗て讀者に見せたことが無い。同時に彼は此諷刺に對して愉快であると云ふ風を見せたことが無い。諷刺と共に浮かれ出したことが無い、調子づいて躍り出したことが無い。開卷第一頁から最終の頁に至るまで、嚴肅な容貌を崩さないで、機械的に諷刺を吐出して居る。之を讀むと、彼自身は諷刺をして居る本人であるか、又は諷刺を受けて居る目的物であるか分らぬ位に、寂然として超越して居る。それだから彼の罵詈は決して熱のある憤狂性の罵詈ではない。冷え切つた氷點以下の罵詈である。彼は諷刺世界のジュピター(Jupiter)の如く、冷やかに、穩かに且つ嚴かにオリムパス(Olympus)山の頂上に立つて、遙に下界を見下しながら、恰も他界の出來事に對するが如き同情なき筆を以て人界の事象を描き出して居る。

(四)それだからして彼の諷刺は其自身に於て如何に深刻を極め、如何に冷峭の趣を具へても、何となく餘所々々しい感がある。何處までも事實を事實とする流義で、公文書を讀む様な氣がする。吾人はこれを讀んで冷たい心持ちになる。然し其冷たさは京都の冬の様な底冷えである。云ふ可らざる一種の壓迫である。然しながら喜怒哀樂共に劇しく骨肉を動かす程の一時性の影響は受け無いのである。諷刺其者が深刻であるのと、讀者が深く感情を動かすのとはスピフトに於て

必ずしも一致しない。其説明は單簡である。スキフトの作物には作者自身の喜怒哀樂が表はれて居ない。ぢかに表はれてゐないのは無論、作中の人物の喜怒哀樂に變形して表はれてゐない。從て讀者の方でも強い喜怒哀樂の情が起り様がない。つまり讀者は作中に於て同情を起すべき目的物を有して居らるのである。若し作者が先きに立つて狂奔し、怒號し、痛哭するならば、若し作者が作中の人物と狂奔し、怒號し、痛哭するならば、讀者もそれにつれて狂奔し怒號し又痛哭する筈であるが、スキフトもガリヴァーも冷然と構へて居るから已を得ない。讀者は彼の爲めに、我を忘れて有頂天に成らうにも成り様がない。これを例へるとスキフトの諷刺は老吏の獄を斷する如きものだらう。一々罪狀を審問して罪人を斬つて仕舞ふ。罪人だから斬られても仕方がない、又其冷靜なる判決に對して何人も不平を言ひ得ざる手際には感服する外はない。が、如何に名法官であつたにした所で、一篇の宣告文を以て聽者の心を躍らしめるといふ手腕は無いのである。吾人は罪人の斬られるのを氣の毒とまでは思はぬが、法官に向つて滿腹の同情を表して、出來得るならば手傳ても罪人を殺して遣りたいと云ふ氣にはなれない。猶詳しく云へば、スキフトの筆は詩的な所がない。頓才もあり諷刺的でもある。又非常な達筆である。然しながら遂に詩的な所がない、否極めて少ない。從て感情的に人の心を動かす點が少ない。例を挙げれば幾許でもあるが、試みにガリヴァーがラビエータの女を敘述する所を舉げて見やう。

“The wives and daughters lament their confinement to the island, although I think it the most delicious spot of ground in the world; and although they live here in the greatest plenty and magnificence, are allowed to do whatever they please, they long to see the world, and take the diversions of the metropolis, which they are not allowed to do without a particular licence from the king; and this is not easy to be obtained, because the people of quality have found by frequent experience how hard it is to persuade their women to return from below. I was told that a great court lady who had several children is married to the prime minister, the richest subject in the kingdom, a very graceful person, extremely fond of her, and lives in the finest palace of the island; went down to Lagado on the pretence of health, there hid herself for several months, till the king sent a warrant to search for her: and she was found in an obscure eating house, all in rags, having pawned her clothes to maintain an old deformed footman, who beat her every day, and in whose company she was taken, much against her will. And although her husband received her with all possible kindness, and without the least reproach, she soon after contrived to steal down again

with all her jewels to the same gallant, and has not been heard of since.”

(この島は世界中で一番住み好い所のように見えるけれども、この國の細君や令嬢は其中に閉ぢ籠められて外へ出られないのを常に嘆いて居る。彼等の生活は贅澤を極めたもので、何でも嗜きな事の出来る身分でありながら、世の中へ出て見たい、首府の快樂を味はつて見たいと頻に焦がれて居る。然しこればかりは特に國王の允許を得なければ出来ないことで、それが又容易に得られない。と云ふものは高貴の人々もこれ迄幾度と無き経験で、一たび其れを許したが最後、いくら説諭しても容易に下界(註、この島は飛揚島として空中に浮んでるのだから斯く云ふのである)から連れ戻すことが出来ないのを知つて居るからである。自分は又斯ういふ話を聞いた。或貴婦人が——既に數人の子まである年配で、しかも良人と云ふのは總理大臣で、金持で、男振りが善くつて、殊に細君を可愛がる質で、其上非常に立派な屋敷に住んでゐて、何に不足のない女なのだが、——或時健康の悪いのを口實に、ラガードーへ下りて行つた儘、數ヶ月間も行衛不明になつてゐた。あまり歸りが遅いので、とうとう國王から搜索の令狀が出た。段々搜つて見ると女は兎ある裏通りの薄汚ない小料理屋に、ぼろに包まつてゐた。着物はみんな脱いで、色男に入れ上げたのである。所が其色男と云ふのが、不具で、爺さんで、身分は足輕位のもので、毎日の様に此女を打つたり蹴たりするのだ相だが、それでも見附けられた

時は、女の方が離れるのが厭だと云つて大に抵抗したと云ふことである。邸へ連れ戻されてからも、良人は少しも悪い顔はせず、出來得る限り親切に待遇したが、其後間もなく女は機を窺がつて身の周りの寶玉類を引攫つて元の情夫の許へ逃亡した。それから如何成つたか、誰も其消息を知らないと云ふ。)

只是丈である。固より普通の小説でなし、又一小事件で、全體に關係のない出來事であるから、かう書くのも比例を得てゐるかも知れない。けれどもスエフトの書き方は前後數百枚を通じて此調子で貫いてゐる。いつでも着實で、明瞭で、落付いて、乾燥で、平面的で、餘所々々しくて、高見の見物的である。女を辯護したら善からうの、夫を愚うたららの様に書いたら面白からうのと云ふ譯ではない。どこかにもう少し精彩を着けたら何うだらうと云ふのである。日常の出來事を有の儘に報告する新聞記事として見ても、あまりに色澤が無さ過ぎる。是から見ると、絃々相摩すと云ふ海軍の公報の方が却つて刺激がある。海軍の公報ですら絃々相摩してゐるのだからして、間男騒ぎの敘述には自然作者の氣乗りから、もう少しは形容も交り、主觀の句も出て來さうに思はれる。十八世紀は情熱を缺いた時代ではあるが、これ程迄に落付拂つて、客觀的に、否器械的に進行するのは却つて骨の折れる事だらう。此節の次に二三行批評の様なものに附け加へてある。批評だから定めし感情的な文句もあらうと思ふと、違つてゐる。依然として吾不關焉の態度であ

る。しかも苛く遣つ付けてゐる。

“This may perhaps pass with the reader rather for a European or English story, than for one of a country so remote. But he may please to consider, that the caprices of womankind are not limited by any climate or nation, and that they are much more uniform than can be easily imagined.”

(讀者は恐らくこれを聞いて、そんな遠い國の話とは思ふまい。歐洲大陸や英吉利のごとく思ふだらう。然し斯う云ふ茶人は女にはよくある事で、存外、風土、國境杯で制限されてゐないものだから、其邊は讀者の御諒察に預かりたい。)

女性に對する批評ではあるけれども、毫も個人的の嫌忌を發表して居ない。極めて無頓着の様に見える。無頓着ではあるけれども、氷柱の側に坐つて居る様な心持がする。

(五)こんな風な書き方だからして、唯一方から冷えて來るだけで他に感じの乗らないのは事實であるが、一方から云ふと甚だ老巧な筆致で、餘程熟練しないと斯ういふ手際には行くもので無い。畫家が色を殺して色を出す如く、筆を殺して居る所が妙である。尤もスヰフトの天性が斯う出來てゐるのか、又は故意に筆を殺したのであるか、其邊は一寸分らない。又これを論ずる必要も無い。但だ文章に現はれた手際からして之を評する許りである。で、感情的な言語を多く使つ

て文章を書きこなすのは詩的には相違ないが、遣り損なへばまるで手の付けられないものに成つて仕舞ふ。グレイ(Gray)があつたか、ホレース、ワルポール(Horace Walpole)に書を興へて、ボスウェル(Boswell)を評した語に、如何なる馬鹿でも見た通りを見た通りに書きさへすれば面白いものだとあるが、全く其通りである。感情的の文句といふものは、見た通りでもなく、感じた通りでもなく、雙方から見て虚偽の言語に陥り易い。物を見るには見る丈の眼が必要である如く、物を感じるにも感ずる丈の素養が大切であるのは云ふ迄もないが、雙方を同程度とすれば、見てゐる方が、感じてゐるよりも成效し易い。見る方なら大抵の人は一致する。感じる方だと申中同意を求めにくい。自分自身の感じでも、二三日立つて讀み直すと厭になる事が多い。見た方は却つて何年経つても厭きない。然も感情的の言語は外見上粉飾の出來るものだから多く人に喜ばれる。ことに初心のものに濫用される傾がある。其弊はしつこく、毒々しい、嫌味な文章が出來上る。

スヰフトの諷刺は夫れ自身に於て随分毒惡である。甚だしつこい物であるけれども、之を表現する方法に至つては、微塵も毒惡らしい所、しつこいと思はれる所が無い。又比較的微細な事柄を寫すにも係らず艶氣がない、寧ろ乾燥と云つても可い。従つて濃厚な滋味のない代りに決して無意味な形容詞や不適當な主觀的言語を弄しないから讀んで舌觸りが好い。殊に敬服すべきは文

意明晰一點の曖昧の字句が無いことである。或人がホッブス(Hobbes)の文章を評して、暗い所から日の當る所へ出て物を見るやうだと評したことがあるが、スピフトのも其通りで、アヂソンの温雅なところ、細緻なところは缺いてゐるかも知れぬが、明快の點に至ると何人にも譲らないのである。彼は嘗て新たに牧師と成つた者に書を與へて説教の風格を論じた中に、從來の僧侶が漫りに艱かしげなる言語を使つて却つてそれを得意がるのを大に嘗つたことがある。説教に於けるばかりでなく、作文の上に於ても、彼は平易明晰と云ふことを以て第一義と心得て居つたらしい。これが彼の文章家として大に他を凌ぐ所であるが、世の人は左様思はない。平易と安價とを混同して、スピフトの文を安つぽい抔と考へるものが少くない。間違である。スピフトの様に平易に文を綴るのは、困難である、又成功である。

(六)前に述べた通り彼は猛烈なる毒舌を弄しながら、自己は至上の審判官の如く超然と構へて居る。彼は微笑すらしない。吹き出す事は夢にもない。然うして居て皮肉な冷嘲を雑作もなく當然であるが如く言ひ放つ。皮肉が三度の食事より尋常であるかの如き考へでなけりや、こんな風に出來るものではない。大抵な人の生涯に於て諷刺的態度はどの位な比例で出て來るかを調べて見ると参考になる。不幸にしてまだ調べた事はないが、いくら此傾向のある男でも、泣き蟲が泣いたり、笑ひ上戸が笑つたりする程度以上には出まい。決して常態とは云はれない。慥かに變態

である。變態であればこそ、遣る前に一寸調子を易へて斷わりたがるものである。咳一咳して、それから諷刺に取りかゝる馬鹿もあるまいが、よく觀察をしてゐると、常態から變態に移る間際には、何か相圖がある。然るにスピフトに至ると全く斷わらない。人間としてのスピフトは附合つた事がないから分らないが、文章家としてのスピフトはのべつ幕なしに諷刺をやつてゐる。だから斷はる必要が丸で無い。これから冷罵を始めますぞと念を押す手数を省いて、いと心安げに澄して遣つてゐる。まあ商賣の様なものである。だからこの冷やかな毒罵を浴せかけて置いて、説明もしなければ主觀的言語も交へない。

彼の著はした『僕婢への差圖』(Directions to Servants)は題名の示す如く、婢僕に對して斯く斯くすべきものと教訓を下したものであるが、其初めに斯んな事がある。

"When you have done a fault, be always pert and insolent, and behave yourself as if you were the injured person; this will immediately put your master or lady off their mettle."

(汝等過失を犯したる時は、いつでも無遠慮に横柄に構へて、損害を受けたのは却て此方だと云はむばかりに振舞ふが可い。然うすりや幾許火の様に怒つて居る主人でも直きに向ふから折れて來るものだ。)

なほ又。

“Never come till you have been called three or four times; for none but dogs will come at the first whistle; and when the master calls ‘Who’s there?’ no servant is bound to come; for ‘Who’s there?’ is nobody’s name.”

(三遍か四遍位呼ばれるまでは決して行かないが可い。一遍口笛を吹かれて直ぐ飛んで行くものは犬ばかりだ。又主人が「誰か居ないか」と云つて呼ぶ時には、そんな「誰か居ないか」と云ふ様な名前は無いから誰も行く必要は無い。)

始めから終ひまで此調子で只押しに押しに行くのである。彼は真面目に是等の教訓を興へて居るのか、それとも諷刺的にこんな事を云つてるのか、素より説明をも興へて居らんから、讀者の常識に依て判断する外はない。然し彼の方から云へば之れが順當の書き方である。彼の真面目と云ふのは諷刺と冷罵以外に存在しないのである、皮肉な所が彼の真面目な所である。彼は又『愛蘭土に於ける貧家の兒女の兩親及び國家の負擔と成ることを除き、彼等をして社會に有用の材たらしめんとする卑見。一千七百二十九年。』(A Modest Proposal for Preventing the Children of Poor People in Ireland from being a Burden to Their Parents or Country, and for Making Them Beneficial to the Public. 1729.)と云ふ殿めしい表題の論文を著して居るが、何が書いてあるかと本氣で讀むと、こんな事が書いてある。

“I have been assured by a very knowing American of my acquaintance in London, that a young healthy child, well nursed, is at a year old a most delicious, nourishing, and wholesome food, whether stewed, roasted, baked, or boiled; and I make no doubt that it will equally serve in a fricassee or a ragout.

“I do therefore humbly offer it to public consideration that of the 120,000 children already computed, 20,000 may be reserved for breed, whereof only one-fourth part to be males; which is more than we allow to sheep, black cattle, or swine; and my reason is, that these children are seldom the fruits of marriage, a circumstance not much regarded by our savages; therefore one male will be sufficient to serve four females. That the remaining 100,000 may, at a year old, be offered in sale to the persons of quality and fortune through the kingdom; always advising the mother to let them suck plentifully in the last month, so as to render them plump and fat for a good table. A child will make two dishes at an entertainment for friends; and when the family dines alone, the fore or hind quarter will make a reasonable dish,

and, seasoned with a little pepper or salt, will be very good boiled on the fourth day, especially in winter.”

(余は嘗て倫敦で懇意に成つた物識りの亞米利加人から、當才位の赤ん坊は健全でよく育つてさへ居れば、スチューにしても、焼いても、炙つても、茹ても實に美味しいもので、滋養分に富んで居るといふことを聞いたことがあるが、フリカシーやラグーにしてもかなり喰へるだらうと思ふ。

そこで余は謹んで世人の一顧を煩はしたい。外でもないが、今計算致した兒童十二萬の中で、二萬人だけは子孫繁殖の爲に残して置いても宜しいとする。尤其中で男は四分の一だけあれば澤山である。これでも羊や牛豚に較べて見ればまだ割合が多過ぎる位だ。元來是等の兒童で正當に結婚した夫婦間に生れた者は甚だ少ない。結婚などといふものは野蠻人の眼中には餘り重きを置かれてゐない。だからして一人の男子は能く四人の女に當り得るといふのが、余の男子節減策の根據である。偕て自餘の十萬人をば、一歳位生長したところで、國中の貴族又は富豪へ賣附ける。それには母親に忠告して、その一箇月位前から乳を澤山に吞ませて、立派な獻立てにも出せるやうに肥らせて置く必要がある。もし友人を招待するなら小兒一人で二皿位は出来る。家族だけなら胴の方でも足の方でも構はない、四半分で澤山である。それから胡椒と鹽

で味を付けて、殺してから四日目位に茹ると丁度好い、冬は尙更然うである。

これを眞面目とすれば純然たる狂人である。然し始めから讀んで見ると、いろ／＼面倒な統計やら何やら調べて、頗る慎重な口調で論じて居る。到底巫山戯て居るとは思へない。現に外國の或記者はこれを眞面目の論文と解釋して、愛蘭土が斯く迄極端に疲弊して居つたといふ例に引いた相である。此外國記者を瞞した如く、彼は何人をも瞞すのである。冗談も休み／＼云ふ人の冗談は自ら冗談と眞面目の境がつくが、平常冗談を商賣にして居る者の冗談は普通の談話と區別することが出来ない。否、冗談が即ち普通の談話であつて、其作者の常態なのである。

(七)最後にスウィフトに就いて、殊に彼の『ガリヴァー旅行記』について特筆すべきは、彼の想像の豊富なことである。尤も想像と云つたからとて、夫の空漠なる神秘的想像、例へばコールリツヂ(Coleridge)の『昔の船乗』(Ancient Mariner)に表はれてくる様な性質のものとは全然趣を異にして居る。趣を異にすると云はむよりは直徑的に反對なものである。コールリツヂの想像は人をして感覺的物象から受ける感じ以上のものを感じしめる想像である。何處までも捕捉し難い、どこまでも朦朧とした、到底實世間の事相からは得られない感じを實現する想像である。これに反してスウィフトの想像は到底實世界にあり得べからざる事實を、恰も嚴として存在するが如く明瞭に感ぜしむる想像である。彼の材料とした小人國や大人國は、其性質から云ふと、コールリツ

デ杯よりも遙に不可思議な筈である。然るにも拘はらず、之を讀んで毫も不可思議な夢の様な感じは起らない。二三頁讀んで行く間に小人の不合理千萬な被造物であると云ふことも忘れて仕舞ふ。小人なる者は當然存在し得るものだと思ふ心持で終ひ迄讀まされる。だからコールリツヂが現在の事を書いて夢幻世界に在る如き感を起さしむる如く、スヰフトは荒唐架空の世界を描いて恰かも現實界に在る如き思ひを起さしめる。兩者共に目覺ましい想像ではあるが、其行方は正反對である。而してスヰフトの想像は第一步に於て讀者と或約束をする。例へばこゝに小人國があつて、其處の住民たるや吾々の高さの十二分の一であると申し渡す。それにさへ吾人が一致すれば其後は流れに従つて下るが如く、何の苦もなしに物語に跟着行かれる。即ち出立點は頗る奇怪な想像であるが、一度び出立さへすれば、餘は極めて寫實的な想像で進行するのである。

これによつて見ると、スヰフトの想像力について吾人の感心すべき點は二つある。一は其奇抜にして常人の夢にも想ひ及ばざる境地を拉し來る事である。今の人の眼から見れば慣れ切つて陳腐の極に見えるけれども、六吋にも足らざる人間が生息してゐる世界を想像するのは奇抜である。純然たる小供の様な所が奇抜である。少なくとも十八世紀の大人の想像としては奇抜である。『ガリヴァー』の出所に就ては色々な説がある。どこから思ひ付いたの、此所から來たのと澤山にならべ立てる人もあるけれども、みんな好加減である。剽竊や模擬の證明は少しも出來ない。だ

から獨創的のものと見做して然るべきである。(尤も、昔からピグミーと云ふ小人が書物の上で一般に知れ渡つて居るぢやないかと云へば夫迄である。)次に大人國を想像するのは小人國から割り出したものだからして、左程の事もないかも知れぬが、飛揚島までを想像するのは矢張り奇抜と云はねばならぬ。馬の世界を想像するに至つては猶更の奇抜である。馬の世界で人間が動物として取扱はれ、又動物として棲息して居る有様を想像するに至つては全く奇抜の極である。

二には此奇抜なる想像を更に寫實的に描き出す想像に感心する。前の丈なら或は吾々にでも考へ付けない事はない。然し考へ付いたところで、それを小人國らしく、又大人國らしく、又馬の世界らしく活かして來ると云ふ段になると到底叶はない。此等の世界を活かせる爲には夫れ／＼準備が要る。單に小人國だと人に告げたからとて、それで他人が承知する譯のものではない。之を然う思はせる様に數十乃至數百の事件を造り出さなければならぬ。この事件と云ふものが普通の小説や敘事文でも容易に旨く出て來るものでない。所が『ガリヴァー旅行記』を見ると何の苦も無く續々事件が出て來る。然もそれが決して無用蛇足の事件では無い。小人國なら小人國を現はすに最も適當な事件である。例へば小人國の人々がガリヴァーの横腹へ梯子をかけて上つたり髪の毛の中で隠れん坊をして遊んだり、それからガリヴァーの拳銃を評して hollow iron pillars (中空の鐵の柱) だと評したり、又た財布を見て a net, almost large enough for a fisherman (漁

師に丁度善さ相うな大きな網(おほなみ)だと評したりするが如きである。又た小人國の皇帝が漂流者ガリ
グーに食事を與へる様を敍した所に斯うある。

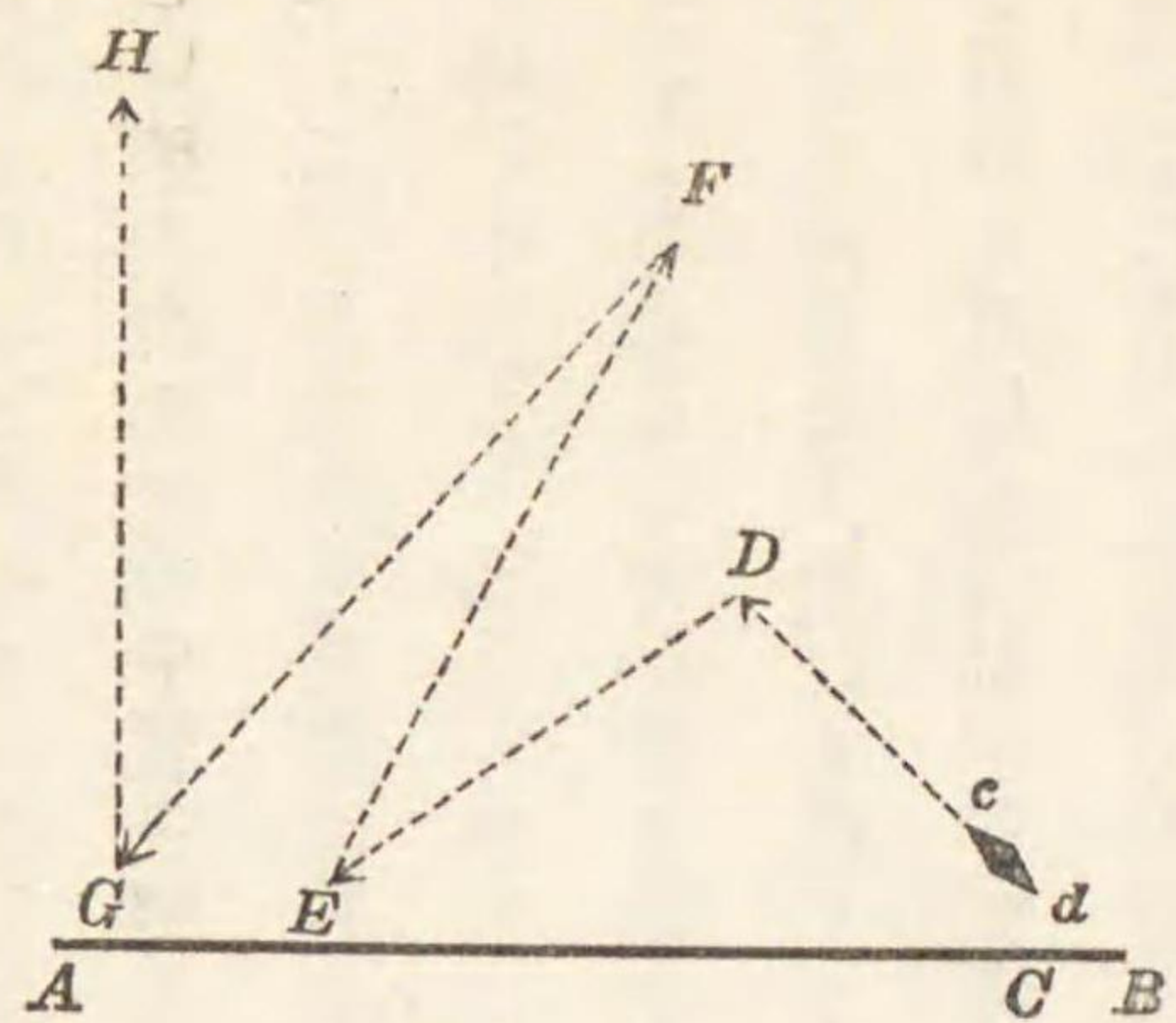
“He ordered his cooks and butlers, who were already prepared, to give me victuals
and drink, which they pushed forward in a sort of vehicles upon wheels, till I could
reach them. I took these vehicles, and soon emptied them all; twenty of them were
filled with meat, and ten with liquor; each of the former afforded me two or three
good mouthfuls; and I emptied the liquor of the ten vessels, which was contained
in earthen vials, into one vehicle, drinking it off at a draught; and so I did with the
rest.”

(皇帝は兼て用意の料理人と御膳職に、食ふものと飲むものを遣れと御命じになつた。すると料理人等は食物を車輪付きの運搬器様のものに積み込んで、傍へ推して來た。それから其運搬器を取つて片端から明けて行つたが、その中二十台は肉で十台は飲料であつた。一台の肉が二口か三口しか無い。飲料の方は土製の甕に入れた十杯分を一臺に打明けて一息に飲み干した。残る九臺も悉く然うしたのである。)

こんな事件も一つや二つなら誰にも出来るが、これが繋がつて五十頁にも百頁にも成ると如何なる人も閉口して仕舞ふ。大人國でも其通りである。大人を見たガリグーは、*He appeared as tall as an ordinary spire-steeple, and took about ten yards at every stride, as near as I could guess.*”(彼は普通の尖塔と高きを争ふ様に見えた。余の想像した所では一步に殆ど十碼も進むやうであつた。)と云ふて居る。スエフトが寫實的の想像をする時は屹度數字を擔ぎ出す。甚しい所になると文學書を讀んで居る様な氣持がしない位精密である。大人國の女の乳房を記載しつゝ、*“It stood prominent six feet, and could not be less than sixteen in circumference. The nipple was about half the bigness of my head, and the hue, both of that and the dug, so varied with spots, pimples, and freckles, that nothing could appear more nauseous.”*(其高さは六呎にも餘つて、周圍も十六呎より少ない筈はない。乳房は余の頭の半分もあつて、乳房も乳房も汚點しみやら雀斑そばかすやら疹子いぼやらで色が變つて居る。世にこれ程胸の悪いものはあるまい。)と云ふて居る。普通の女の乳房を蟲眼鏡で覗いた事があるのかも知れない。又この國の犬は象を四足竝べた位で、猫は牛の三倍程ある。食事の時の皿は直徑殆ど二十四呎とある。ガリグーが乳酪を容れた大銀盃に落ちた時は、*“I fell over head and ears, and, if I had not been a good swimmer, it might have gone very hard with me.”*(頭から眞逆方まじさかさまに落ち込んだ。若し水練に達して居なかつたら既に命も危い所であつた)とある。

最も驚くべき想像は、彼がラビエータ嶋の動くことを説明した所で、それを圖入りで遣つて居るからである。

“To explain the manner of its progress, let AB represent a line drawn across the dominions of Balnibarbi, let the line $c d$ represent the loadstone, of which let d be the repelling end, and c the attracting end, the island being over C ; let the stone be placed in position $c d$, with its repelling end downwards; then the island will be driven upwards obliquely towards D .”——



(其進行の状態を説明する爲めに、先づ AB を以てバルニ

バビ家の領土の上に畫かれたる直線なりとせよ、又該嶋は C 點の上にあるものとして、線 cd を以て夫の磁石を表はすものとせよ、而して D は反撥點を表はし、 C は求引點を表はすものとせよ、然る時は該嶋は D 點に向つて斜めに上方に進行すべし。)

寧ろ散文的だと云へる。散文的と云ふよりも寧ろ事實的だと云へる。事實的の極は遂に科學的になる。但し數學的に精密になるといふ丈の意味である。科學界の大發明家杯の能くする眞理を豫知する様な詩に近い想像を指すのではない。

スウィフトの批評も大分長く成つたから好い加減に切上げる積りであるが、最後に一言して置く。彼の想像の性質は上來、述べ來つた如くである。それには好い點も悪い點もあるが、其得失は今論ずる必要が無いとして、彼はいやに政治的である。貴族的である。勿論彼自身が政治家であつて、政治に最も多く興味を有する所から、自づと政治に關する諷刺が多くなる譯ではあらうけれども、吾々から見ると餘りに其傾向が著るし過ぎる様に思はれる。彼は小人國へ行つても大人國へ渡つても直ぐ國王が如何だとか、皇帝が奈何したとか云つて居る。やれ宮殿が如何の、大臣が奈何したのと、そんな詮索ばかり氣にして居る。吾々帝王にも又貴族や金持にも餘り興味を有しない者からいふと、今少し平民的に社會的方面から筆を執つて貰ひたい様な心持がする。大人國では漂着するや否や、島の中で百姓に捕まつて居るから、これは面白いと思ふと、直ぐ王様の所へ持つて行かれる。何だか物足りない様な氣がする。それから今一つは通篇諷刺的精神に満ちて、絶えず刺激を受け、間の延びた所は少しも無いが、それと共に所謂美くしい感情を起す様な要素が缺けて居る。是も詩的で無いと云ふところで評すべき事かも知れぬが、單に人事的に云つて詩

に近い場面が無いのみならず、自然の享樂を表はした點が少しも無い。彼様に所々方々を漂流して歩いたのだから、少しは海の色、浪の音、又は飛ぶ鳥の具合や空模様、偕は山や川や田園の景色でもよいから、賞翫の態度を以て記載したら可からうと思ふに、そんな事は一向無頓着である。只朝の何時に船が出た、何年何月の何日に何處へ着いたと云ふ様な、實用的に精確な記載ばかりであるのは、いさゝか遺憾である。それも物が物であるから遺憾がる方が悪いとしても可い。

以上述べ來つた所で、文學者としてのスウィフトの立場を先づ大體は評論した積りである。此人は缺點もあるには相違ないが、大家である。『ガリヴァー旅行記』は名著の一つである。彼は最強大なる諷刺家の一人である。彼は是非の辨別に敏く、世の中の腐敗を鋭敏に感ずる人である。病的に人間を嫌忌したといふ名を博したに係らず、親切な人である。正義の人である、見識を持つた人である。見識が無ければ諷刺は書けない。妄りに悪口を吐いたり、皮肉な雑言を弄することは誰にでも出来るが、眞に諷刺とも云ふべきものは、正しき道理の存する所に陣取つて、一隻の批評眼を具して世間を見渡す人でなければ出来ないことである。スウィフトの諷刺は堂々たる文學である、後代に傳ふべき述作である。彼は愛蘭土の愛國者で、故國の爲めには危きを辭せずして應分の力を盡した志士である。白眼にして無爲なる庸人ではなかつた。

第五編 アレキサンダー・ポープ (Alexander Pope)

1688—1744)と所謂人工派の詩

スウィフトに次いでポープを論ずるのは、文學の潮流に於て後者が前者の影響を受けたといふ譯ではない。ポープは詩人でスウィフトは散文家である。(勿論雙方とも詩文の両面に手を出して居るが。)のみならずポープは十八世紀の詩風を完成した大家である。若しポープが影響を受けた源を探らうとすれば、之をスウィフトに求むるのは無理である、アデソンに求むるのも間違である、ポープ以前に一期を劃して覇を稱したドライデン (Dryden) に遡らなければならぬ。ドライデンまで遡るとすると、問題が又大袈裟に成つて、十八世紀以外で大分暇を潰さなければならぬ。成る。それだから此處ではポープを單獨に批評する積りである。

此ポープといふ詩人に就いては今日迄毀譽褒貶が區々で、其區々の批評だけを研究しても随分長い論文が書ける位に思ふ。其中で今日最も多く學者間に認められて居るものは、何人も知れる

が如く、ポーブは立派な修辭家である、練句家である、然し眞正の意味に於ける詩人とは申されぬといふ斷案である。是れは十九世紀の初め浪漫派の運動(Romantic movement)が盛になつてから以後、今日に至る迄最も廣く人の唱導する所で、日本の英學者なども大抵此説を聞かされてゐる。従つてさう云ふものか知らと思つてゐる。私も實はさう云ふものか知らと思つてゐる。然しそれでは此講義をするのに何の風情もない。元來が吾々は眼色毛色の變つた日本人のだから、其日本人の立場から見たら何んなものだらうかと考へて見る必要がある。考へて見て果して左うか又左うでないか、今よりも比較的明かに其邊を知る事が出来たなら、此講義は其時始めて諸君の御参考になつたものである。西洋の詩形及び詩調の鑑別力に鈍い日本人、ことに私の様なものに、それ丈の事が仕果せられるかどうか、自分ながら頗る不安心であるが、先づ一通り出来るだけの事を遣つて見る積である。

ポーブの批評に入る前に、先づ彼が何んなものを書いて居るかを窺つて見る。是は其作物の特性を一目に見渡す必要があるからである。彼の全集を繙いて年代を追ふて調べて行くと、大略下の如くなる。

(一)『牧童歌』(Pastorals. 1709.) ポーブ自身の説に依ると、始めの方は一七〇四年に作り、終りの方は一七一三年に書き加へて、其時に出版したものだといふことであるから、時代が少々違ふ様だが、兎に角彼が少時の作として第一に擧げて可からうと思ふ。『牧童歌』とあるから文字の表はす如く田舎の光景を描いたもので、羊飼が戀を歌ふとか、唄のうたひ競をするとか云ふことが出て来る。みな問答體である。これは云ふまでもなくヴァーギル(Virgil)の牧歌(Eclogues)から脱化したものである、脱化したといふよりは之を踏襲したものである。

(二)『批評論』(An Essay on Criticism. 1711.) 是れは有名なものであるが、行數から云ふと七百四十餘行に過ぎず、それが三篇に分れて居る。内容は表題の示す通り批評に關する議論である。題が論文と云ふ名で實は詩なのだから餘程妙である。少しく其内容を擧げて見ると、批評家の分類、批評家は自己の限界を知らねばならぬといふこと、批評家たらむと欲せば、古代の文學を研究せねばならぬと云ふこと、それに關聯して古代作家の頌辭、高慢が正鵠を誤まる本に成ると云ふこと、學問には際限の無いこと、評家は全體を通覽すべく、一字一句の疵瑕を探がす様ではならぬと云ふこと、何んな作でも完全といふ物は無いと云ふこと、漫りに古語を學ぶなどいふこと、音と意との調和を計らねばならぬと云ふこと、それから狭くてはいけない、雷同してはいけない、無定見ではいけないと云ふ様なことが、勝手に竝べてある。論文として見れば、順序も立たず、主意も餘り貫いて居ないが、それは又後に改めて論ずることにする。

(三)『髮盜人』(The Rape of the Lock. 1712.) 是れも有名なものである。或時ピーター卿(Lord

Petre)といふ人がアラベラ、ファーモー(Arabella Fernor)といふ美人の髪毛を一握り切つたと云ふ事實がある。冗談に切つたのか、本気で切つたのか分らないが、何しろそれから事が起つて、兩家の仲違ひとなる、確執となる、段々込み入つて来て、仕舞にはとても和解する見込みの無い位面倒に成つた。そこでカリル(Caryl)と云ふ男がポーブに頼んで、兩家の反目を和げるために此詩を書かせたのである。然るに實際は彼等の豫期に反して、ファーモー家では却てこれを憤つたといふ話もあるし、又アラベラは之に満足したともあつて、その處は判然しない。しかし詩の内容は慥かに前の事實を基礎として之に裝飾を加へたものである。この詩に於て特に注意すべきことは、ポーブが其中へロジクルーシアン(Rosicrucians)の思想を綴り込んだことである。ロジクルーシアンとは十五世紀頃から起つた一種の秘密結社の稱で、其會員になれば天地萬有悉く之を掌に指すが如く明らかなりと自稱したものである。彼等の言ふ所に従へば、土水火風の四元には目に見るべからざる精靈が住んで居る。即ちシルフス、ノームス、ニムフス、サラマンダース(Sylphs, Gnomes, Nymphs, Salamanders)の四者である。ポーブはこの超自然的な力を藉りて、無数の小活體が絶えず女主人公の身に付き纏つて、人の目につかぬ様にいろ／＼心配するさま、保護するさまを手際よく微細に寫し出して居る。

(四)『キンゾーの森』(Windsor Forest. 1713) 是はデナム(Denham)の『クーパー』(Cooper's Hill)を真似てキンゾーを詠じたもので、大部分は敘述的である。

(五)『ほまれの殿堂』(The Temple of Fame. 1714—15) この中へはピンダー、ホレース、グーゼル、ホーマー、ブルタス、シピオ、シイザなど様々な大人物が出て来る。

(六)『アベラードに送れるエロイザの消息』と『亡き薄命の女を弔ふ歌』("Eloisa to Abelard" and "Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady." 1717) アベラードとエロイザの物語は十二世紀にあつた名高い失戀譚である。消息と云ふのは、二人の仲が永く斷えた後、男の方が自己の運命を様々に嘆いた手紙を其友人に送つた。エロイザがそれを見た。見た時に昔しがなつかしくなつて、尼寺からアベラードへ長い消息を送つた。ポーブの書いたのは其消息の一部分である。非常に情熱に富んだものである。弔歌に關する事實は能く分らない。ジョンソンの人から聞いた所に依ると、伯父の保護の下に教育を受けて居た或る婦人が、何日の間にか或男を慕ふ様になつた。然るに其男は身分の低い者で伯父の意に滿たない所から、伯父は兩人の仲を遮ぎつて、婦人を外國へ送つた上に文書の往復も許さなかつた。そこで女は終に自殺したと云ふ浪漫的な物語があるのださうだ。

(七)『イリヤッド』(Homer's Iliad. 1715—20) 是れは別に解題を要せぬことと思ふ。ポーブが金を作つて一生安樂に暮すことの出來たのは、この翻譯のお蔭である。

(八)『オヂセイ』(Homer's *Odyssey*. 1725.) 是れは『イリヤツド』を譯した行き掛り上、手を延ばしたもので、到底遣り切れないから人の助けを借りて完成した翻譯である。

(九)『ダンシアツド』(*The Dunciad*) 是れは一七二八年に完成して、一七二九年に註釋を付けて出版し、下つて一七四二年に第四卷を加へたといふ長篇である。或點から見ればポープの傑作と云つても宜しい。Dunceといふと御承知の通り馬鹿のことである。それへ *had* を付けてポープの *Mad* 風に呼んだもので、名前を見ても諷刺的の詩だと云ふことが解る。諷刺の多いポープの作中でも、最も苦心の餘に成つた諷刺はこの『ダンシアツド』であらうと思ふ。此書は混沌、闇夜、魯鈍(Chaos, Night, Dulness)を頌讚するのが主意であつて、これと同時に當時の馬鹿者を悉く筆誅してゐる。但し馬鹿といふのはポープの著作に對して失敬な非難を加へたり、又は個人的にポープの氣に入らなかつた連中を指すので、實際は馬鹿でも何でも無い。それだからシオバルド(Theobald)などは散々な目に遇つて、「魯鈍の王」(King of Dulness)として書き下されて居る。尤も後の方では *Cerber* を主人公にする様に改めたが、シオバルドがこんな待遇を受けるに至つた原因は善く知れてゐる。嘗てポープが沙翁集を校訂して出版したことがある。(一七二一年。)ところが彼は別段この方面に學問が有つた譯でもなし、たゞ金を取りたさに遣つ付けた仕事であるから、斯道の人から見ると頗る怪しい所が大分あつた。其處へシオバルドが出て、

別に自分の沙翁集を出版した。たゞ出版した許りなら好いが、其中でポープの弱點を遠慮なく數へ立てた。それがぐつとポープの癢に觸つたのである。そこで忽ち馬鹿の大王にされて仕舞つた。一世の碩學として當時全歐から尊敬を受けて居たベントレイ(Bentley)も同じく馬鹿の仲間へ入れられた。尤も是は沙翁の恨みではなかつたが矢つ張り似た様な事がある。ポープが『イリヤツド』を出版してから間もなく、去る處でベントレイに出逢つた時に斯う聞いた。“Dr. Bentley, I ordered my bookseller to send you your books; I hope you received them.”(ベントレイ博士、本屋に吩咐けて書物を御送り致すやうにして置きましたが、御受取下さいましたでせうね。)實を云ふとベントレイは故意と此書に就ての會話を避けて居たのだが、この言葉を聞いて、“Books! books! what books?”(書物ですつて、何んな書物でしたかね。)と、とぼけて云つた。ポープは更に、“My Homer, which you did me the honour to subscribe for.”(私のホーマーのことです、確か豫約にお這入り下さいました様に心得ますが。)と出直した。そこで博士は、“Oh! ay, now I recollect—your translation:—it is a pretty poem, Mr. Pope; but you must not call it Homer.”(あ、左様々々、解りました、貴方の翻譯のことです。あれは中々結構だ。だがホーマーぢや無いやうだ、然う呼ぶのは不可んね。)と答へた。これがポープの感情を害したのである。

斯くの如く手當り次第に自分の氣に喰はぬ者を捕へては、馬鹿者の組合に引入れて、存分惡口を並べたのが此『ダンシアツド』であるが、少しく其趣向を紹介すると、第一卷は別に面白くもないから略するとして、第二卷は「愚鈍の王」の面前で「混沌の女神」が様々な競技をして御覽になる。詩人、文人、乃至本屋が大勢集まつて我勝ちに競技に加はる。第一の競技は詩人の幽靈が現はれると本屋が之を追ひかける。次には詩人が擲ぐる、喚く、潜る競技をして見せる。最後に批評家の忍耐力を試験する。これは長い著作を讀んで聞かせて、いつ迄も坐睡の附かない者が、勝つといふ寸法であるが、愈々朗讀と成ると、批評家ばかりぢやない、満堂の大衆悉く華胥の國に遊んで、萬事何だか分らなくなる。第三卷では「愚鈍の大王」が女神の膝に眠つて、夢に幽冥界に遊ぶ。そこで様々なものを見る。その幻の中には文藝の歴史がある、英國の景況もある。當代の文學者がいろ／＼引合に出される。第四卷に至ると女神の周圍に多人數の馬鹿者が集まつてゐると、突然「學校の亡者」なるものが演説を始める。天下の青年には知識を興ふるなかれ、ただ言葉文をぎゆ／＼詰め込むべしと云ふ主意である。次に大學の代表者が出て、矢張同方針に依つて教育を施して居ることを女神に告げる。それから外國を漫遊した若い男がぞろ／＼出て来る。眞先の一人の傍に其家庭教師が立つて女神に紹介の勞を執る。是が當世の紳士、女神の御氣に入るべき人柄で御座りますす杯と吹聴して、自分が一所に歐洲大陸を漫遊した有様を長々と喋舌り立てる。其處へ蝶々や貝殻や鳥の糞をひねくり散らす奇妙な連中が現はれて、互に所持品を奪ひ合つて喧噪する。斯う云ふ様な出來事が續いて、最後に女神が欠伸をすると、凡ての物が「闇夜と混沌」に化してお仕舞ひになる。

(10) 『尺牘集』(Epistles. 1732—35.) 其の第一信はサー、リチャード、テムプル(Sir Richard Temple)宛てたもので、表題は『人間の性格に就いて』(Of the Characters of Men)とある。内容は其名の示す如き議論である。只書物ばかり讀んで居ては人間を知ることが出來ないとか、行爲から動機は推察せられないとか、人を判斷するには先づ其人を支配する欲情を見出すのが必要だとか云ふやうな事が論じてある。第二信の表題は『婦人の性格に就いて』(Of the Characters of Women)とある。これにはルーファ(Ruth)とかキャリプソ(Calyso)とかナーンツサ(Nar-cissa)とか色々な名を擧げて、婦人の性格を辯じて居るが、前の尺牘の様に段落のついた抽象的の議論では無い。第三信は『富の効用に就いて』(Of the Use of Riches)とある。金と云ふものは人間に取つて便利な物であるとか、害毒を及ぼす物であるとか、金を貪る者にも浪費する者にも幸福は與へられないとか、中庸が大切であるとか云ふ様な事が論じてある。第四信も前と同じく『富の効用に就いて』といふ表題であるが、此處には、金を使ふにも外の事と同様に分別が必要である、分別が無くて無暗に金を使ふと、得て没趣味な建物などを造り上げる様な事に成り易

い、然しそれでもまあ貧乏人や労働者に利益を興へる點もあるから恕してもいゝ杯と書いてある。以上四信の尺牘を總稱して「ポーブは道德篇 (Moral Essays)」と名けて居る。

(11) 『人間論』(An Essay on Man. 1733—34) 是れもボリンブローク卿 (Lord Bolingbroke) に興へた尺牘の體に書いたもので、矢張四つの書信から出來て居るが、内容は頗る哲學じみて大袈裟なものである。第一信にいはく、人間は自己を中心として物を論ずるものであるからして、到底世界の大を知ることが出來ぬ。人間は此世界創造の段階に於ける一段を作るに過ぎない。吾人は神の思召のまに／＼活動して居る、恰も馬が人間に制御せらるゝ様なものである。それが何故かと云ふことは、局部のみ知れる吾々人間の到底解し得る所でない。自己の運命すら知らない人間は只神を信じて死を待つが可い。それで希望さへ失はなければ宜しい、漫りに天道を思議してはならない。吾人の最大な缺點は慢心である。慢心を以て天道を論じた所で何の益にも立たない。神は大局より打算するものだから、黙して従へば宜しい。無暗に慾張つた所で、人間は人間だけの事しか考へられぬから仕方がない、而してそれが却て幸福である。凡ての存在は皆存在の必要あるもので、宇宙の諸現象は一大調和に外ならん。斯様な譯であるから決して高慢心を抱いて天道を是非してはならない。第二信、人間は神と畜生との中間に彷徨して居るもので、えらい様な又下らない様なものである。如何に格物に慢じ究理に誇るとも、畢竟虛榮心から出た空威

張に過ぎないので、それを引去れば残る所は云ふに足らぬ。人間を動かすものは自愛心である。人間を束縛するものは理性である。其目的は兩者共に苦痛を避け愉快を得るにある。そこで自愛心は一轉して欲情と成る。理性は楫で、欲情は風である。この欲情からして吾人の徳が出る。怒は熱心と忍耐とを生じ、貪慾は要慎の念を起し、閑居は哲學を生み、性慾は愛と成る。斯く吾人の徳は皆吾人の惡徳から出るもので、惡徳を變じて徳と爲すものは理性である。一個人に即いて云へば、其人は同時に善人でもあり又悪人でもある。即ち善惡は悉く交錯して居るとも云へる。而して斯様な人が寄集つて、互に倚賴し互に助け合つて居るのが社會である。其社會のうちにいる一人々々は尙ほ各自個々別々の希望を抱いて個々別々の道を歩むで居る。第三信、萬有は互に呼應して自己の幸福を構成する。單獨に獨立して世に在るものは一も無い、皆愛の鎖で下から上まで繋がれて居る。それを自分ひとり超越したものゝやうに、世の中は凡て自分の爲めに造られて居るなど、考へるのは大それた間違ひである。雲雀は決して自分の爲めに鳴いて呉れるのではない。兩性の愛、親子の愛、同族の愛などは、悉く相互の愛の上に相互の幸福の打建てられたものである。人間の歴史を研究して見ると、自然の教訓から出立して今日の域に達したもので、自然の教訓は禽獸を師とせよとある。それから漸々進化して、自衛の爲めに道德を作らなければならぬことに成つて、國王ですら正義や仁慈を學ぶに至るのである。順序と差別とは天道であつ

て、これ有るが爲めに相互の關係上に幸福を生ずる。幸福とは一言にして云へば、健康、平和及び完全である。一見した所では、この三者に於て、世間には不公平がある様であるが、人間總體の幸福は希望と恐怖といふ二つの情のために平衡が取れて居る。神は個人の爲めに一般法則を變ずるもので無い、云々。大分骨が折れる。

(111)『ホーネスに倣ひ』(Imitations of Horace. 1733—39.) 此れには序詞 (prologue) と跋辭 (epilogue) とが附いて居り、内容は唯題目の示す通り諷刺と尺牘とである。諷刺にはモンタギエー女史 (Lady Montagu) の悪口やら何やら譯の分らんことを書き列ねて、尺牘には道德上の思議や判断が滅茶苦茶に並べてある。而して其序詞なるものが『ダンシアッド』よりも一層烈しい毒舌から出来て居て、嘲弄や罵倒づくめである。

以上はポープの作物の内容を簡単に述べたのである。勿論梗概とか解題とか云ふものは面白いものではない。如何に立派な作物でも梗概だけを聞くと詰らなくなる。梗概では文學的伎倆と云ふものを述べる餘地がなくつて、只筋道を語る丈だから致し方がない。公文書とか法廷の判決文とか云ふものと同様の効力しかない。ポープの作物の梗概を述べた所が、彼の詩を品評する上に於て別段諸君を動かすに足らないだらうとは思ふ。私だつて此梗概に依てポープの詩を是非する見は勿論ない。たゞポープの場合には是だけの手續を爲る必要があると思つたからである。換

言すればポープの作物總體の内容を一頁か二頁の間に約めて互に對照して見たならば、彼が如何なる方面に向つて詩的活動を擅にしたかと云ふことを明瞭にする便宜があるだらうと思つたからである。高い處から一國の地理を研究する様なもので、山國か平地か、河が多いか海を周らしてゐるか、其大體を知るには、遠くから一目に縮めて見ないと解らない、それと一般である。

此手續はポープに於て特に必要であると云ふ譯は、前にも既に一と口述べて置いたが、——吾が英吉利の評家の所説を讀むたびに、ポープは人工的である、自然を直接に味はつて居らんと云ふ文字が眼に付く。又其理由もいろ／＼述べてある。然し吾々日本人が外國の作物殊に詩に就いて判断する時には、單に此等の評家の斷案や辯論のみを以て唯一の證左とすることは出来ない。尤も此等の評家は皆斯道の大家であつて、他から推重されて居る人達だから、吾々も研究の際には其の云ふ所に耳を傾けて謹聽する必要がある。決して輕蔑すべき必要はない。けれども西洋人の批評は西洋人に見せるためで、いかに交通頻繁の今日でも、日本の讀書界を眼中に置いて議論して居る者は一人もない。是は明かな事實である。(科學的の著述は此内へ入らず。) 従つて吾々が讀んで何うも不親切である、底迄納得し兼ねると云ふ様な事が常に起る。そのうちで第一に著るしく感ぜられるのは、圈外にあるものが圈内の事、即ち樂屋落を其儘承つて、敬服する譯にも行かず、反駁する譯にも行かないで、妙な顔をしてゐる様な傾向である。英吉利人はポープを通つ

て、ウォーヅウオースを通つて、テニソンを通つて今日迄來てゐる。だから自分が今迄通過して來た變化を説明しないで、相互に共通なものとして、昔を顧みる事が出来る。直ちにポープを捕へて人工的だと斷ずる事が出来る。何故人工的だと説明する必要がない。分つてゐるぢやないかと云ふ顔をしてゐれば濟む。誰も不審を起すものがない。其次に、科學と違つて、普通の英吉利評家の文學的批評は大抵斷案的である。たゞ人工的だから人工的だと云ひ放つ丈である。如何にして、如何なる點が、如何なる程度に、又如何なる過去に於ける趣味の變遷で、現代の自分には、人工的に見えると説明して呉れるものは一寸ない。出来ないのか、遣らないのか、面倒なのか、原因はどうでも、無い事は事實である。

して見ると已を得ない。我々は我々で、夫丈の仕事を不充分でも不完全でも遣らなければならぬ。ポープを講じなければ夫迄であるが、苟も其詩を諸君の前で批評するとなると、その特性は是非共研究しなければならぬ。それでなければ、かの西洋人の樂屋落を其儘紹介して平氣でゐるか、或は彼等の獨斷的批評に雷同して知つた風をするより仕方がない。(獨斷的ではない直覺的だと辯護しても、其斷案的の價值が、吾々日本人に通じなければ、吾々から見れば何方でも同じ事である。)

で序論にも述べた通り、われ／＼が文學上の作物に對する態度は、單なる賞翫の態度と、賞翫

を吟味してかゝる態度と、賞翫を離れて單に吟味する態度との三つであるが、斯様にポープの作物を並べて、其梗概からして何か搜し出さう、篩ひにかけた梗概をもう一返篩ひにかけて、纏められる丈纏めて見様と云ふ方法は、寧ろ器械的で、種類から云へば第三に屬するものである。全く賞翫を離れてゐるからである。斯様に賞翫を離れた態度から出立して何んな所へ歸着して行くか、それは後になつて自づから明瞭になる積りである。かう云ふ態度は批評界にあつて許すべきものだと既に序論に述べた所だから別に辯護の必要はない。それから此態度がポープに在つて必要なのは、西洋人の賞翫的斷案に同意して好いか、反對して好いか分りかねる日本人、ことに私には、物數奇ではない、まあ已を得ないのである。要するに此方法から出る結果如何によつて、此場合に於ける此方法の價值は定まるのだから、其積りで御辛抱を願ひたい。

然らば今擧げたポープの作物の梗概から如何なる利益が出るかと云ふと、私はこれから一種の概括を作り上げる事が出来る様に思ふからである。前年の講義で、私は文學的述作にあらはれる要素を四に區別した。即ち官能に訴へて吾人の情緒を動かすものが一つ、是を感覺的と名けた。それから喜怒哀樂、友愛、嫉妬、忠孝等凡て人間内部の感情を敘述詠歌して、吾人の情緒を動かすものが一つ、是をかりに人事的と名けた。つぎに鬼神、異靈、あらゆる形而上のものに關する記載を敢てして、吾人の情緒を動かすものを超自然と名けた。最後に理知辨別の悟性に訴へて吾

人の情緒を動かすものを知的と名けた。

其時私は此四要素の特性と相互の關係とを論じて、此四要素の、吾人の情緒を動かし得る等級階段に及んで、一通り彼等の價值を定めた。其議論は寧ろ粗雑であつた。又その分類法もある場合には不都合になる。純文學全體を蔽ふと云ふ點から云ふと、まあ是でも差支ないと思ふが、段段細かい議論をして行くと、四要素が入り亂れてくる爲めに、存外煩はしい説明をしなければならぬ。手数のかゝる様に思はれる。たとへば込み入つた織物の模様を概括して、櫻の花と、光琳波と、薄青い遠山から出来て居ると判じた様なものである。概括としては差し支ないが、其うちを段々詮議して行くと、同じ櫻の花でも木綿で織つた所と絹で織つた所があつて、しかも光琳波が、同じく、同じ絹で織つてあつたりする。すると一方では明瞭に區別が出来た様で、一方ではまだ誤多々々である。それと同じ事で感覺的と云ふ要素を一と纏めにしたために、他の要素は全く感覺的でないかの如くに聞える。こゝに美しくしい女が居る。此女が吾人の耳目に訴へる色、形、は感覺的な要素であるが、其女が怒つたり苦しんだりするのは人事的要素になる。しかも其苦しみや怒りは其女の身體を離れないとすれば、此人事的要素は感覺的要素を待つてとか、通じてとか、もしくは同時にとか、或はもつと烈しく云へば、感覺的が人事的に變化して、起ると云はなければならぬ。又其女の色を見分け、形を辨別し、苦しみなり、怒りなりを認識するのは

知力の作用であるからして、此知的要素も亦感覺的要素を待つてとか、通じてとか、もしくは同時にとか、或はもつと烈しく云へば、感覺的が知的に變化して起るとか云はなければならぬ。かうなつてくると、所謂感覺的要素の存在が、他の三要素の存在の必要條件になる場合が非常に多くなつて来る。従つて單に感覺的と云ふ言葉は人事的要素にも、超自然的要素にも、乃至知的要素にも通じなければならぬ。然るに全要素を四つに分けて、同等の程度に於て彼我を區別すべき様に講義をした。そこが甚だ混雜した分類である。

此點から云ふと、前段(たしかスウィフトの條)に簡略に述べた眞偽の材、美醜の材、善惡の材、壯劣の材の四種に分つ方が明瞭の様である。たゞし之も一材料で二重にも三重にも見られる事はあるが、いくら重なつても混雜が生じない。けれども注意すべき事がある。斯様に分けたのは、文學の材料を凡て具體と見做した上の話である。見做さなければ斯うは分けられないかと云へば、必しもと答へるより外はないが、一材料を眞偽の方面より、又美醜、善惡、壯劣の方面より同時に見る事が出来るかと云つたのは、其材料が是等の各態度を以て味ふべき體を具へたるものとの意味に外ならなかつた。だから此所で云ふ眞偽は個人、個物其他個性を具へたる對象(記述されべき)を離れた意味ではなかつたのである。即ち其個人個物其他個性を具へたる對象が吾人に提供する事實に就て云つたのである。所が前に分類した四要素中にある知的要素とは、重に、耳目に觸れ